

レミリア・スカーレット トの挑戦

Amur

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

気が付けばレミリア・スカーレットになっていた。…となれば細かいことはどうでもいい。憧れの幻想郷をこころゆくまで堪能するだけよ！

そしてどうせなら目標を一つ設定しましょうか。そう、あの月のチートキャラ、よつちゃん（綿月依姫）に勝つという目標を！

	月の都』	—————							
	第二十二話	『月の異変（エピローグB 帰還）』	—————						
	250								
	第二十三話	『風神録異変 裏ボス（前 編）』	—————						
	260								
	第二十四話	『風神録異変 裏ボス（後 編）』	—————						
	274								
	第二十五話	『風神録異変 裏ボス（エピ ローグ）』	—————						
	287								
	第二十六話	『天界異変』	—————						
	296								
309	第二十七話	『天界異変（エピローグ）』	—————						
	313								
	第二十八話	『地底異変』	—————						
	313								
	第二十九話	『地底異変（エピローグ）』	—————						
	324								
	第三十話	『天界一 武道会（前編）』	—————						
	334								
	第三十一話	『天界一 武道会（後編）』	—————						
	344								
	第三十二話	『天界一 武道会（エピロー グ）』	—————						
	357								
	第三十三話	『お嬢様の華麗なる一日』	—————						
	363								
	第三十四話	『星蓮船異変』	—————						
	375								
	第三十五話	『般若湯』	—————						
	391								
	第三十六話	『仙界異変（前編）』	—————						

405

第三十七話 『仙界異変（後編）』

419

第三十八話 『人里の異変』 —— 433

第三十九話 『動き始めた天邪鬼』

443

第一話 『吸血鬼異変（前編）』

唐突だが自己紹介をしよう。

私の名はレミリア・スカーレット。

かの名高き吸血鬼ヴラド・ツェペシユの孫だ（自称）

世界中の吸血鬼ハンターが私に血眼。ところが、これが捕まらないんだなあ（ルパン）
ま、自分で言うのもなんだけど、西洋諸国に名を轟かす紅魔館の当主。

それがこの私、レミリア・スカーレットだ。

そしてもう一つ、私を表わすなら言わなければならぬことがある。

それはこのレミリアには前世の記憶があるということだ。

前世で読んだ小説の言い方を借りるなら転生者、もしくは憑依者と言ったところか。

転生者のよくあるパターンで、トラックに引かれて神様に転生させてもらうという流れがあるが、私は神に会った記憶なんてない。

そもそも前世での死因もよく覚えていない。ごく普通の日本人だったようだが……。

物心が付くにつれて前世の記憶が蘇っていったが、事態を把握した時は驚き、歓喜に震えた。落ち着くまで傍から見たら情緒不安定すぎる吸血鬼だったと思う。

そりゃあ色々なライトノベルや二次創作を読んできて、自分も転生したらなんて妄想したことはあるけど、実際なってみるとすぐに対応できるわけもない。しかも、まさか自分があのレミリアになるとは。

そう、私はレミリア・スカーレットという人物を知っている。彼女が登場した東方Projectというシューティングゲームも知っている。

知っているどころか原作ゲームはやり込んだし、書籍も一通り読んでいた程度にはファンだった。中でも可愛さとカリスマを兼ね備えたレミリアは一押しのキャラだった。

なぜ前世のゲームの登場人物に自分になっていいのかは分からないが、せつかくあのレミリア・スカーレットになれたのだ。やることは決まっている、この世界をこころゆくまで楽しんでやる！そして、来るべき日には「あの野望」も達成してみせる！

私が今世での決意を新たにしていると、誰もいかなかったところに急に人影が現れた。「お嬢様」

この瀟洒な女性は十六夜咲夜。我が紅魔館のメイド長。

かつては私に血眼の吸血鬼ハンターだったけど、このレミリアのカリスマに心酔して今では忠実な従者ってわけよ。

初対面の時は有名キャラに会えて感動している間に、無数のナイフに囲まれてあわや

殺されそうになったわ。本当にDIO様と同じことができるのね。

彼女の『時間を操る程度の能力』は文字通り自分以外の時間を止めたり、特定の物体の時間の流れを速めたり出来るといふこの私でもブルッてしまうほどの性能を誇っている。

咲夜にはその能力を使って紅魔館の家事のほぼ全てを任せているんだけど、過労で倒れないか心配になるわ。けど、飄々としてあまり疲れたところを見せないのよね。

「どうしたのかしら？　咲夜」

「パチュリー様より転移の準備が出来たとのことですよ」

「わかったわ。ふふ……いよいよね。世界からは多くの神秘が失われ、張り合いのある相手もいなくなつた。けれどあそこにはその神秘が多く現存している……楽しみだわ」

「はい。お嬢様」

—————

「待ち焦がれたわよ！　パチエー！」

「ちよつと、壊さないでよ。レミイ」

扉を吹き飛ばす勢いで図書館に入った私を出迎えるのはパチュリー・ノーレッジ。

紅魔館の頭脳にして私の親友。紫もやしとも揶揄されるほど色白でひ弱な魔女。

能力はそのまま『魔法を使う程度の能力』。主に精霊魔法を得意として、私の無茶ぶりにも完璧に対応してくれるわ。

「紅魔館で困ったことがあるなら、まずパチュリーを頼れと言われるわ」

「いや、誰に言っているの。それに本当にやめてよね、私の時間をなくすのは」

「パチエと親友の私の間に遠慮なんてものはないはずよ」

「あまり度が過ぎると何も協力してあげなくなるわよ」

「——ま、まあ、それはともかく。準備が出来たそうね？ パチエ」

「……ええ、出来たわよ。いつでも行けるわ。忘れ去られたモノたちの楽園、『幻想郷』

へ」

「この紅魔館ごと行けるのよね？」

「ええ、勿論」

「ふふふ……。流石よ、パチエ。フランに美鈴も用意はいいかしら？」

「オーケーよ。お姉様」

私とお揃いのドアノブカバー（に似た帽子）を被った少女が答える。

この可愛すぎる吸血鬼は妹のフランドール・スカーレット。

フランドールの持つ『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』は全ての物に存在

する「目」を砕くことで対象を粉々に破壊することができるというこの私でもブルッてしまうほどの性能を誇っている（2回目）

前世の記憶では実際に使ったのは隕石を破壊したときくらいだけど、鍛え上げて概念すら破壊できるようなになれば恐ろしいことになりそうね。

その能力や狂気のせいで、地下に幽閉されていたという説もあつたけど私はやらないわよ。

こんな可愛い妹を閉じ込めるなんてとんでもない！

「私も準備は万端です。レミリアお嬢様」

中華風の衣装を着た麗人も答える。彼女は紅美鈴。

『気を使う程度の能力』を持ち、エネルギー波みたいなやつを飛ばすことができる。

普段は門番として招かれざる者を撃退してくれている。彼女のような信頼のおける強者が守りについていれば、ザコの番人は不要よ。まあ、居眠りが玉に瑕だけどね。

咲夜、パチュリー、フランドール、美鈴にこのレミリアを加えた五人が紅魔館最高戦力よ。

「さあ、ここから始まるのよ。このレミリア・スカーレットの伝説がね」

実はこの転生レミリア・スカーレットにはある野望がある。

そう、東方儚月抄でよっちゃん（綿月依姫）に勝つという野望が！

東方儚月抄を読んだ人には無謀だと思われるかもしれないが、せっかく大好きなレミアに転生したんだし、それくらい大きな目標は持ちたいってものよ。

我が心のライバル綿月依姫は強敵よ。強者だらけの月人でも戦闘力は随一。変なTシャツ（ヘカーティア・ラピスラズリ）が登場するまでは東方勢で敵なしとも言われていたくらいに。

原作のレミアも依姫相手にバシユツゴオオオオオオと飛んだと思つたら天照大御神の光で倒されていたわ。

ちなみに私の能力は『運命を操る程度の能力』で、ちよつとした未来への干渉が出来るわ。けど、戦闘ではあまり使えないのよね。

出来ればルーミアの『闇を操る程度の能力』が良かったかな。どう考えてもあれって大魔王ゾーマ様や黒ひげみたいなラスボスの能力じゃない。

ほほう、我が闇の衣を外すべを知っていたか、よつちちゃん——とか言ってみたいわ。うん、やっぱり闇のチカラって私向きよね（中二病）

——

「圧倒的じゃないか、我が紅魔館は」

いかにもダメそうな台詞を言いながら、私はパチエの転移魔法の発動を待っていた。発動が完了したら、そこはもう幻想郷ってことよ。

基本的に私は原作に沿った行動を心掛けている。目標とする月での戦いはともかく、作品のファンとして大筋の歴史は変えたくないからだ。

原作のレミリアは紅魔館と共に幻想郷にやってきたとき、現地の妖怪を相手に無双するも、最終的に最も力を持った妖怪に敗北している。

このときの異変を吸血鬼異変と呼ぶが、この転生レミリアの最初に超えるべき壁がこの異変よ。

レミリアを鎮圧した妖怪は不明だが、幻想郷の管理者である八雲紫かそれに近い実力を持つ大妖怪だろう。

私のアドバンテージは原作知識を含む前世の記憶。それを活用して様々な作品の能力を参考にして自らを鍛えたわ。

その甲斐あって、現時点で原作以上のチカラを身に着けたと自負している。とはいえ齢500歳程度では幻想郷のBB：古参連中に比べれば若輩もいところ。

まずはこの吸血鬼異変で今の自分がどこまでやれるのか試してみるところでしょうか。

それに最初に気が付いたのはやはり八雲紫とその式の八雲藍だった。

「紫様」

「ええ、お客様よ。見たところ、館ごとこの幻想郷に転移してきたようね」

「館ごとであれば、計画的な行動ですね。侵略の可能性も考えられますが、そうならばそこらの妖怪では分が悪いかと」

「そうね」

今の幻想郷の妖怪は人間を襲わなくなつて弱体化しているわ。あの館の住人が外の世界で名を馳せたような存在だとしたら、藍や私が行く必要があるかもしれない。

「私が警告に行きましようか？」

「……それはまだいいわ。まずは相手の出方を伺います。この幻想郷は全てを受け入れる。それがどんな種族であれね」

「承知いたしました」

—————

おおおお！　ここが憧れの幻想郷か！

待ちきれない、すぐに外を見に行くわよ！

「まずは私が一当てしてくるわ」

「お嬢様がですか？ 当主のお嬢様が行かなくとも、私か美鈴が行ってきますが」

咲夜が止めてくるけど、そうはいかない。一番乗りはこの私よ！

「幻想郷への挨拶代わりに派手に一発食らわせて、離脱してくるには私が行くのが最適

よ」

「それはそうですが……」

「はあ……わざわざ喧嘩を売らなくてもいいのに」

「何を言っているの Pacheco。このレミリアが下手に出て幻想郷に入れてくださいと言う

とでも？ まずはどちらが格上か、平和ボケした妖怪たちに思い知らせてやるのは当然

よ」

「勝手にして。私は幻想郷への転移で疲れてるから手伝わないわよ」

「まあそれは仕方ないわね。お疲れ様、Pacheco」

「お姉様だけずるい！ 太陽は隠れているんだし、私も行くよ！」

「え、いや……フランは紅魔館で待機——」

「じい〜」

頬を膨らませて私を睨んでくる妹が可愛すぎた。何これ、反則じゃない？

フランの（可愛い）威圧に負け、結局二人で幻想郷への宣戦布告を行うことになった。

「いい？ フラン。宣戦布告と言ってもやり過ぎちゃだめよ。」

「分かってるわよ。壊したりはしないわ」

「それならいいわ。じゃあ——行くわよ！」

「オーケー！」

——

「いったい何があった!？」

妖怪の山の間管理職、大天狗が吠えると配下の天狗が答える。

「依然として正体は不明です！ 見たことのない妖怪が山を縦横無尽に飛び回り、哨戒天狗は大混乱です！ 報告では九天の滝まで突破したとのことですよ！」

「ふざけおって……そいつは我ら天狗を敵に回してただですむと思ってるのか！ 迎撃の人員を増やせ！ 遊びまわっている射命丸も呼び戻せ！ ああ見えて腕は立つ！」

「はっ！」

「ふふっ……残念だけど私はもう山にはいないわよ。しかし、これが幻想郷でも最大勢力の妖怪の山か。本当に平和ボケしているのね。さて、帰って戦利品の天狗酒の味でも確かめましょうか……」

私が勝利の美酒の味を想像していると、愛しの妹が戻ってくるのが見えた。よしよし、怪我も無いようだなによりね。

「お姉さま」

「ちようどいいタイミングね、フラン。首尾はどうかしら？」

「森から里の方まで飛んできたけど、強そうな妖怪とは会わなかったわ」

「フランが妖気をまき散らして飛ぶだけで、木っ端妖怪や人間は面白いように狼狽えてたでしょうね」

「ああ、でも里を過ぎたあたりで大きな妖気を感じたわ」

「へえ？ 大きな妖気ねえ」

この時期に人里の方で大きな妖気って誰かしら。八雲藍あたりが面白い物にでも来たいたとか？

「妖気を辿っていくと家があったから突撃したの。けど、誰もいなかったから紅魔館への招待状だけ置いてきたわ。目の前に一面のひまわりが咲いててね、綺麗だったな」

「フアッ!？」

た、たた太陽の畑？　じゃあその家つて暴虐の大妖怪、風見幽香の家じゃない？　それに突撃したの？　ヤバいわ、ヤバいわ——いえ、落ち着くのよレミリア。私は風見幽香や八雲紫どころか月人にすら挑む超吸血鬼。元々、古参の妖怪相手に実力を試すつもりだったのよ。むしろちようどいい機会と考えるべき！

「どうしたの？　お姉様」

「……いえ、何でもないわ。ご苦労様、フラン。私も妖怪の山をはじめ、目についたところで適当に招待状を置いてきたわ」

「じゃあ後は紅魔館で待つてれば向こうから来てくれるつてことだね」

「ふふ……連中が臆病者でなければね」

カラダが震える……これが武者震いというやつか……。

第二話 『吸血鬼異変（中編）』

拝啓、幻想郷の皆様。

私は紅魔館の当主にして吸血鬼の女王レミリア・スカーレットだ。

つい先般、外の世界からこの幻想郷へとやって来た。

私は3日後の朝に幻想郷が我が支配下に入った証として、すべての空を紅い霧で包むつもりだ。

それにより太陽の光は消え、名実ともにこの世界は私のものとなる。

さて、その前祝いとして記念式典を行うので、皆を我が紅魔館へと招待したい。

皆も幻想郷の新たな支配者の到来を祝いたいであろう。

是非とも腕に自信のある者は参加してもらいたい。

この招待状を受け取って以降はいつ来てもらっても構わない。

こちらの歓迎の準備は万全だ。

是非とも私を退屈させないでくれたまえ。

グツドラック！

敬具

レミリア・スカーレット

—————

妖怪の山にレミリアからの招待状をもらった妖怪たちが集まっていた。

「ぬがあああつ！ 吸血鬼ふぜいが……命がいらぬらしいな——!!」

レミリアからの招待状を読んだ大天狗は、そのあまりの挑発ぶりにここ1000年見たことがないほどに荒れていた。

「大天狗様、落ち着いてくださいよ」

大天狗の側にいるのは烏天狗の射命丸文。

普段は新聞記者として昼行燈を気取っている彼女だが、その実、1000歳をこえる大妖怪であり、幻想郷でもトップクラスの實力を持っている。

「これが落ち着けるか！ 射命丸！ 我ら天狗がコケにされているのだぞ?!」

「いや、まあ……確かにすごい勢いで煽ってきてますが。このレミリアとやら」

「射命丸よ！ すぐに手勢を引き連れて鎮圧してまいれ！ 本気になった天狗の恐ろしさをこの若輩者に思い知らせてやれ！」

「はあ……わかりました」

「なんだその態度は！ 本当であればわし自ら制裁してやりたいところだが、いきなり大天狗が出ていくのも体面が悪い。そこでそなたにわしの名代として兵を任せるのだ！ もつとやる気を出せ！」

「おそらく相手は西洋妖怪でも上位の存在。実戦を離れて久しい大天狗様だと返り討ちにあう可能性大ですものね」

「な!? そ……そ……そんなことはない！ わしの名代になれるなど、名誉なことなのだぞー！」

「はいはい。光栄でゝす」

「はいは一度でよい！」

「……………」

自宅に招待状が置かれていた四季のフラワーマスター、風見幽香も八雲紫に誘われてここに來ていた。大天狗と違い、彼女は無言だった。それどころかにつこりと笑っていた。

強い者は大抵、笑顔である。 by 稗田阿求

幻想郷の管理者である八雲紫と、その式の八雲藍はその様子を眺めていた。

「紫様。では我らも」

「ええ。ここまで単純にしていたいたのです。この挑戦、受けて立ちましょう」

――

翌日、紅魔館ではレミリアたちが来客の訪れを今か今かと待っていた。

「ではみんな、用意はいいわね？」

「はい」

「何人たりとも門は突破させません！」

「問題ありません」

「問題しかないわ……」

やる気に満ちたレミリア、フラン、美鈴、咲夜と違ってパチュリーだけは嫌そうな顔をしていた。

「どうしたのよパチエ、いつも以上に暗い顔をして」

「いつも以上は余計よ……そりゃあ誰かさんの書いた招待状のせいよ」

「ああ、あれ？　かなりよく書けてたでしょ」

「せめて一度目を通しておくべきだった……あんなものを幻想郷の古参妖怪が見たら、この館ごとチリにされても文句は言えない……」

「大げさねえ、パチエは。安心しなさい。私の運命を操る程度の能力によれば、悪い結末にはならないわ。それともこの私が信頼できないかしら？」

「……信頼はしている。けど信用はしていない」

「ひどい親友ねえ」

「——！ 皆さん、どうやらお客様が近くまでやって来たようです。私は門を守りに行きます」

「任せたわよ、美鈴」

「はい、お任せください」

「けれど、無理はしなくていいからね。危ないと思ったら素直に引きなさい。門も大事だけど、それ以上に紅魔館の仲間であるあなたの方が大事なのだから」

「……はい、レミリアお嬢様」

——

妖怪の集団が紅魔館へと迫っていた。その中核をなすのは妖怪の山の天狗たち。保守的な彼らが外に向けて大規模に兵を動かすことは珍しいが、激怒した大天狗の命に従い、文が白狼天狗を率いて進軍していた。

「文様！ 門の前に妖怪が一人います！」

先陣を切る白狼天狗が文に報告した。

「ふむ……門番のようですね」

「たいした妖気も感じません！ このまま蹂躪しましょう！」

「……そうですね。任せました」

「ようこそ紅魔館へ。私は門番の紅美鈴と申します。招待状を確認させていただきました
す」

「貴様の主からのふざけた招待状ならば確かにもらった！ しかし、すぐに燃やして
やったわ！」

「おや、それは困りましたねえ」

「これが招待状の代わりでどうだ！」

「ハッ!!」

白狼天狗が斬りかかったが、美鈴がカウンターで放った掌底で吹き飛ばされた。

「がはあああつ！」

鳩尾に入った攻撃に悶絶する白狼天狗。それを見た仲間たちが激高する。

「き……貴様ああああ!!」

「気をつけろ！ こいつの妖力は並みだが、武術を使うぞ！」

「複数で取り囲め！ 4人で一齐に攻撃すれば対応できんはずだ！」

「さて、それはどうでしょうか……」

連携して迫る白狼天狗、それに対して美鈴が冷静に構えた時——まばゆい光が轟音と共に紅魔館の外壁を吹き飛ばした。

「な……なんですかっ!？」

門での戦いには目もくれず、巨大なレーザーを放った人物——風見幽香は破壊した壁から紅魔館の中に侵入した。

「あああああ！ いきなり侵入されましたーっ！ というかそれありですか!! 門を無視しないでくださいよ！」

「あやややや！ 相変わらず無茶苦茶ですねえ。道を彼女が行くのではなく、彼女が行くところが道となる——ですか。では私もお先に失礼します。後は任せましたよ、皆さん」

「ははっ！ お気をつけて！ 文様」

「えっ!? ちょっと待っ」

美鈴の反応を待たず、文は目にもとまらぬ速度で門を突破して館内に突入した。

「あああ! 二人目!! お……怒られる! 危なくなったら引いてもよいと言われたけ

ど、これは怒られる——!」

「ふはははは! いい気味だな! もっともこの程度では許してやらんがな!」

「ああ、もうっ! これ以上は絶対に通しませんからね!」

—————

そのころ——紅魔館の玉座の間では早くもトップ同士が火花を散らせていた。

「……お前以外にも門から入ってこないやつがいるようだな」

「幽香が来たようです。あなたは欲張りすぎですよ。天狗だけでなく、あの四季のフラワーマスターまで呼び寄せるなんて」

「なに、可愛い妹が遊び相手に不足していてな。そちらに行ってもらおうとするよ」

「……すいぶん簡単に当主のもとに来れたと思いましたが、やはり私だけはこちらまで誘ったのですね」

「そうだ。お前がここに来るように運命を操作した。実質的な幻想郷のトップたるお前

と紅魔館当主の私で雌雄を決するのが最もわかりやすい決着だろうか？ 他の連中は私の親友や片腕が相手をしているよ」

「運命操作ですか。ずいぶんと大それた能力ですこと……しかし、それならば最初から私だけと呼ばばよいでしょう。あなたが各地でやんちゃをしてくれたおかげで、怒っている方が大勢いるのですが？」

「ふふふ……それでは寂しいだろう。せつかくの祭りだ。大勢に参加してほしいではないか」

「はあ……見た目通りの子供っぽい理由ですわ。けれど、いくら子供とて少し、おいたが過ぎたようです」

紫がそういうと空間にいくつもの裂け目ができた。その奥には多数の目玉が見える。

空間の裂け目——スキマは紫を取り囲むように浮かんでいた。

「不気味な目玉だ」

「その余裕がいつまで続くか試してみましよう——ではお灸を据えます」

その瞬間、スキマから一斉に光弾が発射されたが、レミアは光弾のわずかの隙を縫うようにして回避した。

「上手く避けますね」

「グレイズは得意なんだ」

「ではこれはどうでしょうか？」

紫は先ほどの倍のスキマを呼び出すと、今度はレミリアを取り囲むように配置した。裂け目に浮かぶ無数の目玉がレミリアを睨みつける。

——回避不可能な弾幕は反則のはず……いや、この時代にスペルカードルは無い。となればこれも当たり前か。

「さあ、どうしますか？」

——すべて避けるのは不可能だな。なら不夜城レッド……いや、ここは攻める！

すべてのスキマから光弾が発射されると同時にレミリアは全身を羽で覆う。そして、高速回転しながら紫に向けて突進した。

いくつかの光弾はレミリアに命中するが、回転したことで威力を減らすことができたこと、また羽で全身を覆っていたことでそれほどのダメージにはなっていなかった。

「ずいぶんと強引ですね——！」

光の弾幕を潜り抜けたレミリアの手には紅い槍——グングニルが握られていた。弾幕を突破した勢いのまま、紫に向けて高速で迫り、グングニルが紫を貫く——かに見えたが、スキマから飛び出た道路標識のようなものに止められる。

だが、間髪入れずにレミリアの口から激しい炎が吐き出された！

「なっ!？」

まさか火を吐くとは思わず、不意を突かれた紫はまともに食らい、火だるまになっていた。

「——っ！」

すかさずレミリアはグングニルで追撃をかけるが、紫はスキマに緊急避難してこれを回避した。

「……やっつけてくれますわね」

やや離れた位置にスキマから紫が現れたが、火は消えているようだった。

「妖獣タイプならともかく、その見た目で炎を吐くのは反則ではありませんか？」

「ふっふっふ……みんなそう言うよ」

——とはいえ、スキマに逃げられるのでは遠距離攻撃だと決定打を与えにくいな。どうにかして接近戦に持ち込んでみるか。

「さあ、今度こそ串刺しにしてやる！」

グングニルを持ったレミリアが強襲するが、紫は距離を取りつつ、高速のレーザーをスキマから発射して迎撃する。

レーザーを掻い潜りながら紫へと迫るレミリア。

徐々に紫との差が縮まっていくが、今度はスキマから光弾ではなく列車が飛び出し、レミリア目掛けて突撃した。それを紙一重で避けた——かに見えたが、列車が突如、

大爆発を起こした。

「があああっ!?!」

至近距離での爆発で思わぬダメージを負ったレミリアは動きが止まってしまった。

「次、行きますよ」

紫の言葉と共に2両目、3両目、4両目と止まらぬ爆弾列車がレミリアに襲い掛かる。

次々と列車が命中し、爆風に紅魔館が揺れた。

「……ダメージはあっても死んではないでしよう? お嬢さん」

近づき過ぎず、距離をとった状態で語りかける紫。

反応がない為、気絶したかと考えたとき、爆炎の中から無数の蝙蝠が飛び出し、紫に

襲い掛かった。

「——っ!」

スキマから光弾の雨を発射して迎撃するが、蝙蝠の速度は先程のレミリアの突撃よりも速く、数匹は紫への接触を許してしまった。

「キキッ!」

取り付いた蝙蝠は牙で紫の上半身に噛みつき、何かを吸い上げ始めた。

「——なっ……あ……う……っ」

蝙蝠から吸い上げられるたびに悶える紫。

「ああああっ!!」

蝙蝠に吸われながら紫は自身をスキマに入れ、再び現れたときは蝙蝠から解放されていた。

それに対して無数の蝙蝠が集まり、レミリアも再び実体を取り戻す。

「ぐ、眩暈が……何をした！ 小娘！」

——うわ、ゆかりん怖っ。

内心ドキドキしながらも、エナジードレインを成功させてちよつと強気になったレミリアは不敵に笑って返した。

「ふっふっふ……その程度で済んで幸運だと思え。存在そのものを奪い取ったんだからな。あのまま続けていれば、いずれお前という存在は消滅していた」

「存在を奪う——!? 運命操作とやらだけが能力ではないわけね」

「直接吸ってやればもつと効くのだが、まあ分身だとこんなところか」

——直接吸った場合のエナジードレインが4レベルくらいとしたら、さっきのは1レベル分にも満たないか。まあやり過ぎてゆかりんが弱体化したら幻想郷的に困るか
らちようど良かったかもね。

「……………そういえば名乗っていませんでしたね。知っているかもしれませんが、私の名は八雲紫。妖怪の賢者とも呼ばれています」

「おっと、これは失礼。私は紅魔館の当主にして永遠に紅い幼き月、レミリア・スカーレットだ」

紫の目には最初にあつた慢心がなくなっていた。そして、目の前の吸血鬼を一人の強敵として認めたからこそ名乗りを上げた。

「では、続きを始めましょうか」

「ああ」

妖怪の賢者と紅い吸血鬼が再び戦いを開始した――。

第三話 『吸血鬼異変（後編）』

紅魔館に突入した射命丸文はすぐに異変を感じていた。

——おかしい。いくら何でも広すぎる。

幻想郷一のスピードを誇る彼女が飛んでいるにも関わらず、館の廊下に終わりが見えない。

「どうやら館内の空間に手を加えているようですね」

考えながら飛行を続ける文だが、突然、大量のナイフが目の前にあった。

「!!」

緊急回避でナイフを避ける文。

「あ、危なかった。何ですか、これ」

「今のタイミングで避けますか。この紅魔館に乗り込んでくるだけはありませんね」

文が声の方を向くと、そこには完璧にメイド服を着こなした少女が立っていた。

「吸血鬼の館に人間……ですか？」

「はい、私は人間です」

「一応確認しますが、吸血鬼を狙うハンターではありませんよね？」

「そんな時期もありましたが……今の私は紅魔館のメイド長、十六夜咲夜です」

「そうですか。私は当主のレミリア・スカーレットに用がありますので、これで失礼します」

文字通り、目にもとまらぬ速さで飛び去ろうとした文だが——咲夜が空間に干渉すると急速に動きが鈍くなった。

「私の動きが遅い……!?!」

「招待客の方をもてなすのが私の役目。すぐにどこかに行かれては困ります」

咲夜は戸惑う文にナイフを放つ。投げたナイフは一本だが、速度が凄まじく、文は辛うじて避けた。

しかし、避けたはずのナイフが壁に当たり、反転して文を襲う。そしてそれを避けても再び反射したナイフが迫る。

「妙なチカラのせいで動きが鈍いですが、それでも私の方が速いですよ!」

「その状態で避け切るなんて凄いわね」

咲夜は文を称賛しつつ、大量のナイフを操り一斉に放った。

「風よ!」

文にナイフが殺到するが、彼女は自身を守るカマイタチを発生させ、すべてをはじき返した。

「厄介な風ね。ナイフでは突破に苦勞しそうだわ」

「あなたがそれを言いますか。1000年を生きる私ですらあなたの能力は脅威ですよ」

「お褒めにあずかり恐悦至極」

「……仕方ありません、予定変更です。あなたを倒して当主のところに案内してもらおうとしましょう！」

「やってみろ、この咲夜に対してツ!!」

———

「……」

「……」

図書館ではパチュリー・ノーレッジとスキマで館内に侵入した八雲藍が対峙していた。

藍は油断なく観察しているが、パチュリーの方は目の前の藍を気にせず、本を読んでいた。

「魔法使いよ、何故そんなにやる気がない。お前もこの館の一員だろう」

藍が声をかけるとパチュリーが渋々、返事をする。

「……私としては幻想郷に来ればよかったの。暴れているのはレミイ——紅魔館当主レミリアのわがままよ。正直、私も困っているのよ」

「そ、そうか。お前も苦労しているようだな」

「分かったのなら帰って」

「だが、お前がチカラある魔法使いであることには違いない。紫様の命でレミリア・スカーレット以外の妖怪は捕縛させてもらおう」

藍が腕を振ると次々と魔方陣が現れる。

「大人しく捕まればよし、抵抗するなら少々手荒になるぞ」

藍の周囲には合計十二個の魔方陣が配置されていた。

「……はあ。嫌になるわね」

溜息を吐きながらも大人しく捕まる気はないようで、パチュリーは五色の石を呼び出した。

—————

「さて、吸血鬼さんはどこかしら」

壁にあけた穴から紅魔館に入った風見幽香はレミリアを探してうろついていた。「やっぱり吸血鬼らしく地下にでもいるのかしら」

「残念、ハズレ〜！」

声と同時に炎を纏った紅い剣が幽香に叩きつけられる。

幽香は避けようとはせず、妖力を高めた自身の腕でその一撃を受け止めた。

「うはっ！ 凄い！ 私のレーヴァティンを素手で止めたのはあなたが初めてよ！」

「それはどうも。お嬢さんもなかなか良い一撃だったわよ」

「私はフラン。フランドール・スカーレット」

「フランちゃんね。スカーレット……ということはこの館の当主の関係者かしら？」

「そうよ！ 私はレミリアお姉さまにあなたの相手をするよう言われているの」

「なるほど……当主自らではなく妹を差し向けたのね」

「お姉さまは別の来客の相手で忙しいらしいから」

「ふうん……つまり私はその来客より下に見られたということね？」

「さあ？ お姉さまは何を考えているかわからないときがあるから。それにあなたも私を甘く見ない方がいいわよ？ これでも西洋諸国では悪魔の妹として有名だったからね」

「それは失礼したわね。当主には後で言いたいことを言うとして、まずはあなたの相手

に集中しましょうか」

凜猛な笑みを浮かべながら幽香が妖力を高めていく――

――

妖怪の賢者と紅い吸血鬼の戦いは続いていた。

紫はスキマから大量の卒塔婆を発射する。あえて狙いを付けずに放たれた卒塔婆は無作為に襲い掛かる為、逆に動きが読みづらくなっていた。

それに対して激しい炎を吐き出し迎撃するレミリア。

卒塔婆と炎の衝突で発生した爆炎が視界をふさぐ中、紫は自身の上半身をスキマに滑り込ませる。

レミリアの前には紫の下半身だけが残されていた。

その下半身にグングニルの槍を投げつけるが、実体が存在しないのかすり透けてしま
う。

次の瞬間、背後から現れた紫の上半身が腕を振ると、巨大なツメが出現してレミリアを叩き落す。

「ぐはっー」

地面に叩きつけられるレミリア。

すぐさま起き上がるが、そのときには再び紫が多数のスキマを呼び出していた。その数は10を超える。

新たに呼び出されたスキマの奥に見えるのは、先程までであった目とも異なる巨大な目玉。

それらすべてがレミリアをじっと見つめている。

「なんだ？ こいつらは……ただ見ているだけか？」

「これらは幻想郷の変容を見守る眼。もちろん、ただ睥睨するのではなく、誰かさんのようなやんちゃ者を懲らしめる役目も持っています——こんな風にね！」

紫は結界のごとき弾幕を放ち、レミリアを追い詰める。炎や弾幕で迎撃も考えるが、視界が悪くなることを考え、レミリアは回避を選択する。しかし、あまりの物量にすべてを避けることはできなかった。

「ちっ！」

レミリアに弾幕が命中した瞬間、巨大な目玉のすべてから追撃の光弾が放たれる。

「なっ——ぐああああああっ！」

レミリアは光弾を食らいながらも、グングニルを投げるが、紫にあっさり避けられてしまう。

「——ふ、ふっふ……やっつけてくれるな」

それでもレミリアは笑うが、かなりのダメージが蓄積していた。

「まだ笑う元気がありますか。呆れた頑丈きですね、けれどももう終わりです」

「なに？」

紫が腕を振ると多重結界が現れ、レミリアを取り囲む。

咄嗟にレミリアは高速飛行で脱出しようとする。

「逃がしませんよ」

多重結界が回転すると、逃れようとするレミリアを吸い寄せる。

「なんだと!？」

一瞬、動きが止まったレミリアを紫がスキマからの高速レーザーで狙い撃つ。

「ぐっ!」

レーザーが直撃したレミリアをすぐさま多重結界が取り囲み、今度こそ結界内に捕えてしまった。

レミリアを捕らえた多重結界は内部に激しいスパークを巻き起こす。

「があああああつ!!」

「ふー。この結界に捕らえるのは苦労しましたが、さすがに今の体力では脱出は不可能でしょう」

けて発射された。

光の柱は一瞬にして宇宙空間を駆け抜ける。

「宇宙から!？」

「さあ、共に吹き飛ばうか、八雲紫！ 私は頑丈さには自信があるぞ！」

光の柱——月神降舞ルナテックが紅魔館を直撃した。

一点に集中したとはいえ、そのエネルギーは膨大であり、紅魔館の玉座の間は完全に消滅。その周辺も瓦礫の山となっていた。

「お嬢様——っ！」

主の危機に思わずやって来たのか、咲夜が血相を変えて飛び出す。その姿は文との戦いでボロボロになっていた。

玉座のあった周辺を探すが、レミリアの姿はどこにもなかった。

「ぐ……うう……」

「!」

咲夜が振り向くと、そこにはスキマから這い出す紫の姿があった。

辛うじて四肢は無事だが、その姿は満身創痍でもはや満足に動けそうにはなかった。

「貴様！お嬢様をどこにやった!？」

「……わかりませんわ。ただ、レミリアも彼女自身の攻撃に巻き込まれたようです。私は咄嗟にスキマに逃げましたが、完全には避けきれずにご覧の有様です」

「そんな……お嬢様——」

「……安心しなさい、咲夜。私はここにいるわ」

瓦礫をどかしてレミリアがゆっくりと姿を現した。その姿は酷いもので、両翼はなくなり、上半身もひどい火傷を負っていた。しかし、少しずつ身体は再生を始めているようだ。

「お嬢様！良かった!」

咲夜が駆け寄り、レミリアを支える。

「やあ、紫……お互い無事なようで何よりだ」

「これのどこが無事だと言うの……」

「どうする……まだ続けるか？」

「はあ……互いにそんな余力はないでしょうに」

「ふっふっふ……さて、どうかな？」

「終わりです、お・わ・り」

「そうか、なら引き分け……いや、違うか」

「ご無事ですか、紫様」

藍がパチュリーを尾で捕らえた状態でやってきた。激しい戦いがあったようで、藍も疲労しているが、パチュリーは目を回している。どうやらこの九尾の狐に軍配が上がったようだ。

「だからこれが無事に見えますか」

「は、はあ……。しかし、まさか紫様がここまで追い詰められるとは……」

「おやおやつ!? これはスクープです! こんな姿の紫さんは滅多にお目にかかれませんよー!」

咲夜が戦いを切り上げて玉座の間に向かったため、それを追って文もやって来た。見たところ、咲夜よりも消耗は少なそうだった。

「写真に撮ったら怒るわよ天狗……」

釘を刺す紫だが、文の方は記事にする気満々だった。

「あなたがレミリア・スカレットね? 困るわね、そんな状態じゃあ。せつかく手合わ

せをお願いしようと思ったのに」

「うわっ、お姉さま。凄いことになってるね」

最後に風見幽香とフランドール・スカーレットがやって来た。それぞれの服は襤褸切れのような有様だが、余裕はあるようだ。また、何故か割と仲良さげな様子だった。

——藍、文、幽香か。やっぱいわ……これ。幻想郷でも上位の化け物が三人も来ちゃったか。

内心でドキドキしながらもレミリアは紅魔館の敗北を認めることにした。

「……どうやら私の仲間たちは敗退したか、形勢不利らしい。仕方ないな……特別に今回は紅魔館の負けということにしておいてやろう」

「なぜ敗北宣言がそんなに偉そうなのですか……」

「だが紅魔館はまだまだ強くなる。次はこうはいかんぞ」

「もう嫌です。次なんて考えたくもありません」

「ふふふ……まあ、そう言うなよ」

「ゼーっ、ゼーっ」

レミリアが紅魔館の負けを認めたころ、門前では紅美鈴と天狗の軍勢の戦いも決着がついていた。

その場で無事なものはいないが、立っているのが美鈴だけということは、彼女は門番としての仕事をやり遂げたということ。

「うおおおお！ やりましたよ、お嬢様！ この紅美鈴、門番の任を全うしました!!」
天に向かって咆哮する美鈴。

今回の戦いの中、紅魔館勢で完璧に勝ったのは彼女だけといえる。

こうして吸血鬼異変は史実通り？ 紅魔館の敗北という形で幕を閉じた――。

第四話 『吸血鬼異変（エピソード）』

『吸血鬼軍団VS天狗軍団！ 激闘の末、勝利したのは天狗軍団！』

外の世界から幻想郷を侵略せんと襲来した強大無比な吸血鬼たち。彼の者たちは幻想郷に到着するなり瞬く間に各地を荒らしまわった。その所業を見過ごせず、妖怪の山の勇猛なる天狗たちは立ち上がった。

連中の仕掛けた数々の卑劣な罠を突破し、たどり着いたるは返り血で染まったか如くおぞましき紅い館——それこそが吸血鬼の居城、紅魔館であった。

立ちふさがる鉄壁の門番。妖しげな能力で空間すら歪めるメイド。精霊の力を自在に操る魔法使い。目についたものすべてを破壊する妹吸血鬼。そしてそれらを束ねる傍若無人悪鬼羅刹な姉吸血鬼!!!

これらの猛者たちを我々は多大な犠牲を払いながらも鎮圧することに成功した。最後には姉吸血鬼——レミリア・スカーレットも天狗のチカラにひれ伏し、降伏を受け入れた。

もはや彼女たちが暴れることはないであろう。

我ら天狗が山を……いや、この幻想郷を守る限りは——。

「なにこれ？」

レミリアは紫が持ってきた新聞を読みながら疑問の声を上げた。

発行者はもちろん烏天狗の射命丸文。

「あなた天狗のチカラにひれ伏したの？」

パチュリーが半目でレミリアに問いかける。

「いや、幻想郷側に降伏はしたが、天狗に対してどうこうは……ああ、あの文とかいう烏天狗に山で暴れたことを詫びてはおいたか」

「完全にそれですわ。あの天狗は1のことを10に、0のことを5にして記事を書きま
すから」

紫がいつものことです、と言いながら説明をする。

「これだと私たちが天狗に負けたみたいじゃないですか」

文を除く紅魔館に攻め寄せた天狗を一人で叩きのめした美鈴は不満げに言う。

「む……」

完敗はしてないものの、文には形勢不利だった咲夜は微妙そうな顔をする。

「これって他の妖怪たちは参加してないことになってるの？」

フランドールが疑問を投げかける。

「いえ、小さく端の方に数名の外部妖怪の協力もあつたと書かれていますわ」

「ええ……むしろ天狗が協力した側で主力は別よね。私の相手も花の妖怪のお姉さんだったし」

——この子の相手は幽香……よくもまあ彼女と正面からやり合えたものです。あの姉にしてこの妹といったところですか。

スカレット姉妹の脅威を再認識しながら、紫は再び話し始めた。

「天狗としてもメンツを潰されたわけですから、この程度は仕方ないでしょう」

「それは分かるけど多大な犠牲って何よ。後のことを考えて死者は出さないように気を付けていたわよ」

「……私との最後のアレは下手をすれば死んでいませんか？」

「ま、まあそれはともかく……あの文とかいう烏天狗には礼が必要だな。鶏肉を吊るす器具を用意しておこう。人間サイズが吊るせるやつをな」

「おやおや、怖いですわね」

紅魔館側が敗北を受け入れたことで吸血鬼異変は終了した。その後、幻想郷側と契約を交わすことになる。契約内容は紫が食料になる人間を提供する代わりに、生きた幻想郷の人間を襲わない、という予想通りのものだった。

——提供する人間って外の世界から連れてきているのよね。たしか自殺者とかだけ。

「さて、難しい話も終わったし、後はフリータイムね」

レミリアは紫と藍の方をチラリと見て言った。

「? ええ、まあ」

紫が訝しむ中、レミリアは――

「そりゃ!」

掛け声と共に藍の尻尾の中に突撃した。

「おおお。これは良い尻尾。極上ね!」

「な!? ななな……!」

まさかいきなり尻尾に潜られるとは思っていなかった藍が言葉にならない様子で慌てる。

「あ、私も! そりゃ!」

続けてフランドールも藍の尻尾に潜り込んだ。

もふもふもふもふ

「こらあつ! 貴様ら二人して何をしている!」

スカーレット姉妹にもふられまくった藍が怒りの声を上げる。

「大丈夫よ。これだけポリュミーミイな尻尾だもの。まだまだ余裕はあるわ」

「違う! そういうことを言ってるんじゃない!」

「あるときパチエが藍の尻尾に包まれて遊んでたじゃない？」

「誰が遊んでるのよ。捕まってるんでしょ」

パチュリーが否定の声を上げるが、レミリアは聞いていなかった。

「実は羨ましいと思いつつながら見てたのよね」

「そ、そうですか……あなた戦ってる時と雰囲気がいまいち違いますか？」

紫が戸惑いながらレミリアに問いかける。

「そこはスイツチのオンオフを切り替えてるからね」

「そういうものですか……」

「そうそう、今回の件で以前から危惧していた幻想郷の妖怪たちの衰えが浮き彫りになりました」

「たしかに各地でそれなりに暴れたが腑抜けたやつが多かったな」

レミリアは藍の尻尾から頭だけ出した状態で答えた。フランドールは奥まで潜っている。

藍はすでに諦めた顔でなにも言わなくなっていた。

「人間の数を減らさないうちに、幻想郷の妖怪はむやみに人を襲わなくなりました。しかし、それが妖怪の無気力化を招いてしまった」

「ふうん」

「それを解決する策を考案中なのですが、実行に移す時は貴方たち紅魔館にも協力してもらうことになるでしょう」

——妖怪の無気力化を防ぐ手立て……間違はなくスペルカードルールだな。

「へえ？ まあ暴れた詫びとして多少のことなら協力もやぶさかではないが」

「そう言っただけで安心しました」

——スペルカードルールは紫たちと博麗の巫女こと博麗霊夢が考案したもの……ではないよいよ紅魔郷が始まるわけか！ 霊夢に魔理沙の主人公コンビに会うのが楽しみだ！

「では帰りますわよ、藍」

「はい、紫様……」

尻尾からスカートレット姉妹を放り出した藍がやや疲れた様子で答える。

「あなたも苦労しているようね」

パチュリーが藍に同情しながら言った。

「分かってくれるか……」

「さて……紫の言った策とやらの結果、最高に刺激的な二人が紅魔館にやってくるこ

になるわ」

「能力で見られたのですか？ お嬢様」

「そうよ、咲夜。楽しくなりそうね」

「また私の研究の時間がなくなるんじゃないでしょうね？ レミイ」

「……」

「ちよつと、何か言いなさいよ」

———

スキマで自宅に戻りながら紫は幻想郷の未来について思いを巡らせていた。

——レミリア……今の時点でも十分な強さですが、今後さらに成長すればいつか月と事を構えるときに頼りになりそうですね。

千年以上昔の話だが、紫は月に攻め込んだことがある。

しかし、彼女の率いる妖怪軍団は月の近代兵器の前に敗北した。

それ以来、紫たちが月に干渉することはなくなった。

だが、彼女はいずれ月と幻想郷に何らかの関わりができることを予感していた。

そのとき幻想郷に強力な味方がいることは賢者として望ましいことなのだ。

「……いやな予感がする」

「レミイが言おうとシヤレにならないんだけど」

第五話 『紅霧異変（前編）』

「じゃあこれから異変を起こすわよ。皆、スペルカードの用意はいいわね？」

レミリアが紅魔館の主要メンバーに語り掛ける。

「はい。抜かりありません」

「バツチリです！ お嬢様」

「この日のために練習したからその成果を見せるわ！」

「ま、一応ね」

咲夜、美鈴、フランはやる気十分だったが、パチュリーはいつも通りテンション低めだった。

「けど私は使わないでしょうね」

「なんでよ、パチエ」

「私の大図書館に侵入者が来ても、すぐにレミイの居場所を教えるからよ」

「そこは形だけでも侵入者と戦ってくれよ、親友……」

レミリアがやや呆れて言うが、すぐにニヤリと笑った。

「ふふふ……けどそう思い通りにいくかな？」

「なによその笑みは。気味が悪いわね」

妖怪たちが博麗霊夢に相談して誕生した『スペルカードルール』は幻想郷における新しい決闘法である。

このルールでは遊び感覚に近い決闘が出来るため、妖怪の無気力化を防ぐ効果があった。その上で人間と妖怪のパワーバランスを調整できるので、異変を起こした妖怪を人間が退治しやすくもなっていた。

レミリアはスペルカードルールを用いた初の異変を起こすことを八雲紫から依頼され、これを受諾した。

「さあ、始めるわよ」

レミリアの体から魔力が放たれ、それは紅い霧となつて幻想郷の空を覆い始めた。

——いよいよこの転生レミリアによる紅霧異変の幕開けよ！

——

幻想郷が紅い霧で覆われ始めて数日後、その発信源である紅魔館を目指して二つの人影が飛んでいた。

「いったいどの誰よ。こんなふざけたことをしてくれたのは」

怒りながら飛ぶのは紅白の少女。一見、巫女のようにも見えるがその服には袖がなく、腋は丸出し、後頭部には大きな赤いリボンと独特の服装をしている。

彼女こそ幻想郷になくてはならない存在——博麗の巫女、博麗霊夢である。

「私はわくわくしているぜ。ちよつとした妖怪退治でなく、ついに本物の異変でスペルカードを使えそうだからな」

楽しそうに飛ぶのは白黒の少女。黒い帽子を被り、箒にまたがって空を飛ぶという魔女としか言いようのない格好をしていた。

彼女は霊夢の友人にして幻想郷でも珍しい人間の魔法使い、霧雨魔理沙。

「ならあんた一人で解決してきてよ、魔理沙。私は帰って寝るから」

「いいぜー、霊夢。ただし、その場合は博麗の巫女は役立たずだったと天狗の新聞に載るかもな? 情報源は私」

「一人で行く気ないじゃない」

「まあ、せつかくの異変だ。二人で解決したほうが楽しいだろ?」

「はあ……まあいいわ。このイライラは異変の元凶をぶつ飛ばして晴らすことにするか」

「ふっふ……じゃあ競争だな?」

「はあ？」

「お先に失礼！」

言うが否や魔理沙は猛烈な速度で飛び去った。

「こら——！ 魔理沙——！」

慌てて追いかける霊夢だが、圧倒的な速度で飛び去った魔理沙はすでに見えなくなっていた。

——

「邪魔するぜ——っ!!!」

爆音とともに紅魔館の裏口を吹き飛ばして白黒の魔女が突入した。

「侵入者！ 侵入者よ！」

「食い止めたらメイド長からご褒美がもらえるわ！」

侵入者に気が付いた妖精メイドたちが慌てて集まってくるが、魔理沙は容赦なく弾幕の雨を浴びせた。

「どけどけ——っ！」

「あああああ————っ!!!」

妖精メイドたちはしよせんは数合わせであり、人間とはいえ魔法使いが相手では碌な抵抗もできず、簡単に蹴散らされていった。

魔理沙が無人の野を往くが如く進撃していると、廊下の先に大きな扉を見つけた。

「お、こりや怪しいな」

躊躇なく扉を開くと地下への階段があるようだった。

「地下か。まあ悪の親玉つてのは最上階か地下最奥にいるもんだけどな」

魔理沙は立ち止まってどうするか思案していた。

「私の経験上、強力なやつほど隠れたがるもの……となるとこの先が当たりか！」

意気揚々と地下への階段を進む魔女。果たしてその先に待っているものは――。

――

「さて、通らせてもらいましょうか」

「くうう。すみません、お嬢様」

紅魔館の正門では霊夢が美鈴を撃破していた。

美鈴は格闘戦が得意な反面、スペルカードルールの弾幕戦はあまり得意でないよう

で、霊夢にはあつさりと負けてしまった。

「無駄に広いわ、お金持ってるのね。これなら迷惑料をもらっても良いかも……いえ、逆に懲らしめる意味でも是非もらうべきね」

勝手に迷惑料を徴収することを決めた巫女は幾分か機嫌がよくなつて紅魔館の廊下を進んでいく。

「！」

霊夢が巫女的直観に従つて異変の元凶のもとに向かっていると、突然目の前に人影が現れた。

——いつ現れたのか見えなかった。こいつの能力かしら。

「ようこそ紅魔館へ。歓迎いたします」

霊夢の前に時間を止めて出現した咲夜は優雅に礼をして言った。

「……あなたはここの主人じゃなさそうね」

「はい。私は紅魔館のメイド長、十六夜咲夜です」

「この館の誰かが幻想郷中に広がるように紅い霧を出してるのよ。メイド長なら誰がやってるか知ってるんじゃない？」

「はい。それは我が主であるレミリア・スカーレット様が邪魔な日光を遮るために発生

させています」

「さつさとやめさせて。迷惑なのよ」

「それは私の一存では出来かねます」

「なら主とやらに直接言うわ」

「それも出来ません。何故ならあなたはお嬢様には会うことができないのだから……」

音もなく咲夜の両手にナイフが現れた。

「やる気ね。上等よ」

霊夢もお祓い棒とお札を構えて咲夜に相對する。

――

魔理沙は地下を進み、紅魔館の大図書館にたどり着いていた。

「おお……すごい数の魔導書だ。私のために用意してくれたのか」

白黒魔女が訳の分からないことを言いながら大図書館内を物色していると、声をかけるものがあつた。

「……はあ。本当に来たのね」

「お、誰だ？」

ゆっくりと本棚の奥から姿を現したのはパチュリー・ノーレッジ。

「私はパチュリー・ノーレッジ。この大図書館の主よ」

「ほう、そうか。私は霧雨魔理沙だ」

—— 雰囲気が人間じゃないな。アリスと同じように種族としての魔法使いか。

「あなたは紅い霧の元凶を退治しに来たのよね？」

「そういうことだ」

「それならここはハズレよ。元凶のいる玉座の間への行き方を教えてあげるから、そっちへ行つてちょうだい」

「そりゃあ助かるぜ」

そう言いながら魔理沙は棚の本を自分の風呂敷に入れ始めた。

「??? ちよつと、待ちなさい。なにを勝手に本を持つていこうとしてるのかしら？」

「安心しろよ。いつか返すぜ、いつかな」

「異変を解決しに来たんでしょ？ 本を盗んでいる場合かしら」

「それはそれ、これはこれだ」

「こ、この人間……はっ!？」

そのとき、パチュリーは親友の憎たらしい笑みを思い出した。

「まさかレミイがニヤニヤしていたのはこれを予知して……?」

パチュリーがぶつぶつ言っている間にも魔理沙は大量の本をいただいていた。

「ふいー。とりあえずこれくらいにしておくか」

「待ちなさい！ 勝負よ、ドロボウ魔女！ 叩きのめして二度と本を盗もうなんて考えないようにしてあげるわ」

「ふふふ……出来るかな？ ムラサキ魔女。私は幻想郷最速を自称する女だぜ」

種族^パ魔法^{チユ}使いと職業^リ魔法^魔使いが紅魔館地下でスペルカード戦を開始した――。

第六話 『紅霧異変（中編）』

「人間たちよ。私こそ幻想郷……いや、すべての命あるものを食らう者——永遠に紅い幼き月レミリア・スカーレットだ！——なんてどう？ フラン」

「うーん、ちよつと極悪過ぎるわね。それに命を食らうつていうのは吸血鬼だから分かるけど、その後の永遠に紅い幼き月との繋がりが無いわよ、お姉様」

「ならやはり最初に考えていたやつにするか……」

レミリアとフランは侵入者と相対したときの口上を考えていた。

「——ん。来たわよ、フラン」

「早いわね。二人とも？」

「いや、一人だけだ。別行動のようね」

隠密行動をまったく意識しない激しい足音が廊下から聞こえてきた。

「……か——っ！」

叫ぶとともに侵入者が玉座の間の扉を開け放った。

「——これはこれは、凄まじい妖気だな。さすがの私もごくりと喉を鳴らすぜ」

侵入者——霧雨魔理沙はスカーレット姉妹の妖気で満たされた玉座の間に、委縮することなく入ってきた。

堂々としたその姿は強敵に緊張しながらも、たしかな自信を感じさせるものだった。

その魔理沙の姿をレミリアは無表情で見つめ、フランドールは興味深そうに観察していた。

——うっは！ 生魔理沙!! このレミリア、感動している！

「お前たちが紅い霧を発生させている元凶か」

「いかにも。私こそ紅魔館当主にして世界のすべてを紅く染める者。永遠に紅い幼き月、レミリア・スカーレットだ」

「そして私が悪魔の妹フランドール・スカーレットよ」

「私は霧雨魔理沙！ 魔法の森の魔女だ」

「侵入者は二人と聞いているが、あなただけかしら？」

「そうだけ。もう一人——霊夢は手こずっているらしいな」

「あなたは誰とも戦わなかったの？」

「道中で蹴散らしたメイド妖精を除けば、パチュリーって魔女を倒したな」

「あら？ パチエと戦ったの。私は戦わないとか言っていたのに、素直じゃないんだから」

「なかなか手強い相手だったが、大魔法使いとも呼ばれる（予定の）私には勝てなかったな」

「へえ。人間がパチュリーに勝つなんて凄いね」

「ここまできて大人しく紅い霧を引つ込める気はないんだろ？ さあ、勝負だぜ！」

「まあ待ちなさい。もう一人の侵入者が来るまで待ちましょう」

「ん……？ お姉様は咲夜が巫女つてのに負けると思ってるの？」

「そうよ、フラン。咲夜は優秀だけど、それを乗り越えて博麗の巫女はやってくるわ」

「ふん」

「霊夢を待つ必要はないぜ。私一人で二人とも相手をしてやる」

魔理沙が強気な発言をするとフランドルが笑って返した。

「アハハ！ 自信満々ね。いいわ、待ちきれないなら私だけで相手をしてあげる。いいでしょ？ お姉様」

「うん、まあいいわ。じゃあ任せたわよ、フラン」

「オツケー♪」

「そういうことで私が相手をするわ、魔理沙さん」

「まずは妹吸血鬼が相手か。いいぜ——だが、ここじゃあ狭いな」

「ええ、広いところに行きましょう」

そう言うのと二人は天井を弾幕でブチ破り、開けた穴から外に出て行った。

「せめて窓から出ていきなさいよ……多忙な咲夜の仕事を増やすんじゃないわよ」

レミリアは呆れながら二人を追って外に出て行った。

「さて、魔理沙さん。さつき私だけで相手をすると言ったのは本当だけど、厳密に言えばウソでもある」

「ん？ どういうことだ」

——禁忌「フォーオブアカインド」

フランドールがスペルカードを発動させると、3体の分身が現れた。

「なんだ!?! 四人に増えたぞ!」

「これで四対一になったけど」

「フランドールだけで相手をするのは本当だから」

「許してねー」

「あははははー！」

笑いながら四人のフランドールは魔理沙を囲む。

「くっそ！ どれが本物だ!！」

本体を見つけ出そうとする魔理沙だが、フランドールは一斉に弾幕を放ってくる。

「うおおおお!!? 四人とも実体があるとか反則だろ!！」

——いきなりフォーオブアカインドとか、我が妹ながら容赦ないわね。

けど、それだけで墜ちる魔理沙じゃないわ。

レミリアは二人の勝負を離れたところからのんびり観戦していた。

「見せてちょうだい、霧雨魔理沙。主人公の片割れの実力を」

「さあどうする魔理沙——！」

「私を甘く見るなよ！ そっちが手数ならこっちは火力で勝負だ!！」

言うだけあって魔理沙の弾幕はかなりの威力を誇るが、さすがに四人に分かれたフランドールの物量には及ばず、徐々に抑え込まれて逃げ場がなくなっていくた。

「ちいっ！ ならばこっちも使うぜ!！」

——星符「メテオニックシャワー」

魔理沙は星型の弾を大量に打ち出してフランドールの弾幕を相殺していく。

前方に集中的に放たれたメテオニックシャワーは弾幕の空白地帯を作り、そこを魔理沙は高速で駆け抜けて囲いから抜け出した。

「たしかに弾幕の威力は大したものね！ けれど私も火力には自信があるわ！」

——禁忌「レーヴァテイン」

フランドールが大きな——いや、大きすぎる炎の剣を構えた。

「なんだ、あのバカでかい剣は!？」

「いくよ！ 魔理沙あ!!」

四人のフランドールがレーヴァテインで攻撃を仕掛ける。

「当たるかよ!」

レーヴァテイン四本による同時攻撃だが、速度自体はそれほどでもなく、魔理沙は上手く隙間を見つけてかわすことに成功する。

しかし、レーヴァテインが振られると剣から火の弾幕が発射された。それが四本分も集中することで、圧倒的な密度となって魔理沙に襲い掛かる。

「そうか、こっちが本命か！ だが、火力には自信があると言っただろう！ それを見せてやる!」

魔理沙がフランドールの弾幕にミニ八卦炉を向ける。

「なに？ このすごい魔力は——！」

フランドールが放った魔理沙を覆うほどの弾幕が一瞬、魔女の姿を隠した。だが、この一瞬が勝敗を分けた。

「弾幕は——パワーだぜー！！！！」

——恋符「マスタースパーク」

超弩級の大出力レーザーが弾幕を吹き飛ばしながら迫る。

わずかの間、魔理沙を見失ったフランドールはマスタースパークの軌道を読み切れなかった。

「ああああああっ!!」

分身ごとフランドールを飲み込んだ閃光は天を貫き、紅い空が一瞬だけ明るくなるほどだった。

——あれがマスタースパークか！ 噂にたがわぬ大迫力！

「ふははっ！ 人間とは思えぬ規格外の威力！ 見事だな！ 霧雨魔理沙」

——けどマスパが直撃したフランは大丈夫かしら？ まあ、スペルカード用に威力を調節してるんだから問題ないと思うけど……。

レミリアが妹の心配をしていると、後ろから声をかけてくるものがあつた。

「相変わらずふざけた威力よね、あれ」

「おや、ようやく来たか。博麗の巫女——」

レミリアが笑いながら振り向くと、そこには静かに吸血鬼を睨みつける博麗霊夢の姿があつた。

第七話 『紅霧異変（後編）』

——いよいよ主人公との対決ね。スペルカード戦だから紫と戦った時のような殺意高め有能力や魔法は控えるとして——よし、決めた。原作のスペルカードに加えてオリジナルの美しい弾幕も披露するつもりでしょう！

「初にお目にかかる、博麗の巫女。我が名はレミリア・スカーレット。言うまでもないかもしれないが、紅い霧を生み出しているのはこの私だ」

「そう……話が早くて助かるわ。私に退治される準備は出来てるってわけね？」

「ふっふ——準備は出来ているが、残念ながら内容が違う。出来ているのは博麗の巫女を屈服させ、幻想郷の支配を行うことだけだ」

「あつそう。もういいわよね？ そろそろ退治するわよ」

「せつかちなやつだな。では一つ忠告をしてやろう」

「なによ？」

「こんなに月も紅いから……私もお前を本気で殺すわよ——！」

レミリアと霊夢が予備動作なく飛び上がり、速攻で弾幕を放った。先頭集団が激突

し、すり抜けた多数の弾幕が襲い掛かる。これを難なく避けながら、互いに次の攻撃を準備していた。

レミリアはナイフ形の弾幕を大量にばらまいた。ナイフ弾の軌道は不規則でありながら、霊夢を狙って動いているようだ。

霊夢は焦らずに最小限の動きでこれ avoidance 切った。

「さっきのメイドだけじゃなく、ご主人様もナイフっぽいのを使うのね」

「嗜み程度で咲夜ほどじゃない。あいつは遠くにいる頭にリングを乗せた妖精の額に命中させる程の腕前だからな」

「リングは——どうしたのよー」

霊夢が針を拡散させて投げつける。

「リングはただの飾りだ！」

レミリアはナイフ弾をばら撒き、針を迎撃する。いくつかは命中コースを辿るが、数本程度なら苦もなく躲す。

すべての針を避けたレミリアは霊夢の正面に停止し、無言で腕を組んでいた。

「……？」

レミリアは弾幕を放つ様子がないが、霊夢は嫌な予感がした為、やや後退した。

——なにかヤバイ。腕を組んでいるだけなのに、私の勘が警鐘を鳴らしているわ。

霊夢が様子をつかっていると、レミリアがゆつくりと口を開いた。何か話すのかと考えた瞬間、その口から凍りつく息が吐き出された。

「はっ!？」

意表を突かれた霊夢だが、油断はしていなかったことと、距離をとっていたことで何とか冷気のブレスを避けることができた。

「あ、あんたそれあり!？」

「もちろん。私の冷気の弾幕に何か文句でもあるのかな？」

「あれのどこが弾幕よ」

「手から出そうが、口から出そうが同じこと。そら、おかわりだ!」

——息符「凍える吹雪」

レミリアの口から先程よりも強力な冷気のブレスが吐き出された。それは紅霧と混ざり合い、禍々しい色合いとなって霊夢へと迫る。

「紅い雪だなんて趣味が悪いわね——!」

広範囲に広がる吹雪だが、霊夢は大きく弧を描くようにして回避する。

レミリアと霊夢、互いの距離が離れたことで一旦、仕切り直しとなった。

「どうだ？ 私の紅い吹雪は。弾幕の美しさでも私の勝ちだろう」

「だから趣味が悪いつて言ってるのよ。まったく人をイライラさせるのがうまいやつね」

「おやおや、先程の冷気を浴びていたほうが良かったんじゃないか？ 頭が冷えるぞ」

「——ぶっ潰す！」

——夢符「封魔陣」

お札による結界がレミリアを取り囲む。

結界が完成する前に逃れようとするが、博麗の霊力が込められたお札は直接接触れずとも退魔のチカラを放ち、レミリアの動きを阻害する。

「ちっ、厄介ね。逃れようとすればお札が邪魔をして、この場で留まれば結界が完成して更にひどいことになる——か」

「降参するかしら？ いまならボコボコにするだけで許してあげるわよ」

「ふふふ……お断りよ！」

レミリアの身体が発光すると、無数の蝙蝠に分かれて飛び立った。

「!?」

「キキキキキッ！」

どこからともなく紅い弾幕が発射される。密度はそれほどでもない為、霊夢は余裕をもつて避ける。

結界が完成したが肝心のレミリアは姿がなく、封印は不発に終わった。

封魔陣の発動時間が終わるころ、蝙蝠が集まりレミリアの姿になった。

「蝙蝠にはスペルカードも無効なのに攻撃も出来るって反則じゃない？」

「なあに。吸血鬼業界では普通のことだ」

「そう……ならこつちも同じようなことをしましょうか」

——「夢想天生」

霊夢がスペルカードを発動させると、彼女の存在が希薄となり、周囲に八つの陰陽玉が展開された。

——きたー！ 『ありとあらゆるものから浮く』無敵の能力！

試しにレミリアが霊夢に弾幕を放つが、当たっているのに何故かすり抜けた。そして周囲の陰陽玉からお札形の弾幕が発射され、レミリアを襲う。

「ふふふ……そつちの方がよほど反則じゃないか？」

本人は無敵状態で攻撃は自動という鬼畜仕様にさすがのレミリアも苦笑いをした。

——さて、どうするか。実のところ、霊夢の意思で解除できる時点で、厳密には真にすべてから浮いているわけじゃない。正面から夢想天生を突破するなら、その点が隙だが——まあここは順当に時間切れを待つか。

考えながらお札形の弾幕を回避するレミリアだが、やり過ぎたはずの弾幕が反転し

て追ってくる。

「むうっ！」

弾幕の速度はそれほどでもなく、躲すことは難しくない。だが、それ自体が意思を持つているかのように追尾してくるので、レミリアも気が抜けない。

——私を舐めるなよ！ 耐久スペルなら前世でいくらでも突破してきた！

反転して追尾してくる弾幕に備えていたレミリアだが、陰陽玉からも追加の弾幕が発射され、挟み撃ちとなっていた。

「これ初見だと完全回避は無理でしょ！」

前世も含めれば初見ではないレミリアは紙一重で躲していく。そしてようやく夢想天生の発動時間が過ぎた。

「やるわね。夢想天生を初見で凌いだのはあんたが初めてよ」

「当然だ。この私を凡百の妖怪と一緒にするなよ——さあ次はこちらの番だ！」

再びレミリアが無数の蝙蝠になり、姿を消した。先程と同じく、どこからともなく紅い弾幕が発射される。それに加えてレーザーも照射され、逃げ場をふさぐ。

「ちよつとこれスペルカードじゃないの!？」

スペルカード宣言も無しに、明らかに通常弾幕ではないレミリアの攻撃に霊夢が非難の声を上げる。

——魔符「全世界ナイトメア」

ようやくのスペルカード宣言と共に、蝙蝠が集まってレミリアが姿を現す。

「遅いわよー！」

霊夢の弾幕が次々と直撃するが、レミリアは止まらない。いや、止まらないどころか弾幕が命中するたびに「全世界ナイトメア」は激しさを増していく。

紅弾とレーザーはさながら世界を埋め尽くさんばかりの物量となつて、霊夢に襲い掛かる。

本来、避ける余地を残しておかなければならないスペルカードルールだが、時折このような不可能弾幕に近いものが発生したりもする。

「ふははははは！ 嵌ったな博麗の巫女！ このスペルカードは無暗に反撃すればこのよ
うな回避不能の状況に陥る！ 突破するには機をうかがうしかなかつたわけだ！」

勝利を確信したレミリアは撃墜しているであろう霊夢を探して視線を巡らせると——逃げ場を塞ぐように周囲をお札で囲まれた。

「!？」

「——あいにくだけど待つてられないの」

「は——!？」

まさかの声が聞こえた方を向けば霊夢が悠然と佇んでいた。

「な……ばかな！　いまのをどうやって躲したんだ!？」

「ゆつくりと動いただけよ」

「!?!」

——時間停止だとか超スピードだとか、そんなチャチなもんじゃあ断じてない。私
はもつと恐ろしいものの片鱗を味わっている——！

——霊符「夢想封印」

霊夢が最後のスペルカードを宣言した。

光弾の雨がレミリアに向かって放たれる。回避しようにも先手を取ってお札の結果
で逃げ道を塞がれ、次々と弾幕が命中する。

「ぐっ、がああああああっ——!」

再び蝙蝠に分裂して逃れようとするレミリアだが、妖怪を滅する博麗のチカラを食ら
い過ぎた影響か、うまく妖力が集まらない。

そして最後に一際巨大な光弾が炸裂し、眩い光が溢れた。

——これが博麗の巫女——これが博麗霊夢か……

夢想封印により撃墜され、霊夢のチカラを実感したレミリアは満足げに笑いながら落

ちていった。

第八話 『紅霧異変（エピソード）』

『博麗の巫女が紅霧異変を解決！』

先般、我ら天狗により懲らしめられた紅魔館の吸血鬼が再び異変を起こした。『紅霧異変』と名付けられたそれは、幻想郷全体を紅い霧で覆い、日光を遮るといったものだ。た。

吸血鬼の霧は妖気を帯びており、人間の中に体調を崩す者が現れた。妖怪にはさほど影響がないことを見るに、天狗の強大さを知った吸血鬼がターゲットを人間に絞ったと考えられる。

しかし、人間にも侮れない強者が存在している。そう、博麗神社の巫女である博麗霊夢である。人里の人間たちが家から出ることも出来なくなつた状況に憤怒した博麗の巫女はすぐさま飛び立った。そして持ち前の勘で元凶が紅魔館にいと察知する。

道中、吸血鬼の配下に成り下がった宵闇の妖怪や氷の妖精を蹴散らしながら巫女は紅魔館にたどり着く。

今回の異変では新しい決闘法であるスペルカードルールが用いられた。

吸血鬼側も数々のスペルカードを準備して万全の態勢で迎え撃った。だが、美しき弾

幕の雨が止んだ時、最後に立っていたのは博麗霊夢だった。幻想郷創世よりこの世界を守ってきた博麗の巫女——今代の博麗霊夢もその貫録を見せつけたと言えるだろう。

こうして吸血鬼の再度の幻想郷制圧の野望はくじかれた。連中もこの短期間で二度も敗北したことで流石に懲りたと思われる。もし吸血鬼が頭を垂れて天狗の下に付きたいと懇願するなら寛大な我らはそれを受け入れるだろう。

「おいおいおいおほ！ ふざけるな！ 私の活躍はどこにいったんだよ！」

紅霧異変が解決した記念に博麗神社では宴会が行われていた。

そこで文の新聞を読んだ魔理沙が怒りの声を上げる。

「あなたがいなかったことにされてるのは良いとして、盗っていった本までなかったことにはしないですよ」

パチュリーが半眼で魔理沙を見ながら言った。

「そりやないぜパチュリー。私たちの戦いもなかったことにされてるんだぜ」

「別にいいわ」

「つれない奴だぜ」

「けどさすがに天狗——というか文は調子に乗りすぎね。このレミリアが天狗の下に付きたいと言うはずがないでしょう。放置していれば侮られる。一度、お灸を据えるとし

ましよう」

「お、いいね。是非やってしまおうべきだ、レミリア」

「ちようど鶏肉を吊るす器具を手配したところだ。今度、あの烏天狗を紅魔館に呼んで活用するでしょう」

「そりゃいい。使うときは私も呼んでくれよ」

「ああ。私たちだけでは食いきれないからな」

「なんであいつらさっそく気が合ってるのよ」

霊夢がレミリアと魔理沙を眺めながらつぶやいた。

「お姉様と魔理沙、どっちも他に迷惑をかけまくるタイプの自由人だから波長が合うんじゃないの?」

「自分の姉にずいぶんと辛辣ね、あんた」

「お姉様のことは好きだけど、それはそれ、これはこれだから」

「あ、そう」

「私って吸血鬼の配下だったっけ?」

「レミリアお嬢様が夜の帝王なので、常闇の妖怪であるルーミアさんは広い意味では配

下みたいなものかと」

「そーなのカー」

「ルーミアさんが霊夢さんに退治された理由は進路上にいただけつて——交通事故みたいなものですね」

しれつと宴会に混ざっているルーミアに料理を出しながら咲夜と美鈴が答える。

「氷の妖精——チルノさんの方はどうなんでしょうね？ 咲夜さん」

「霧の湖がお嬢様の領地（みたいなもの）なのでそこに住むチルノさんも配下と呼んでも過言ではありません」

「いや、さすがに過言ですよ……」

——

数日後——

「この私に記事を書いてほしいとは紅魔館の皆さんも見る目がありますね」

上機嫌で紅魔館を訪れたのは烏天狗の射命丸文。

「紅魔館側としては自分たちに都合の良い記事を書いてほしいのでしょう。さぞや豪華な接待を準備しているに違いありません♪ しかし、そう簡単に懐柔される私ではあり

ませんよ」

「お嬢様。とりに……いえ、射命丸様が到着されました」

「射命丸専用の特別室にご案内してさしあげて」

「かしこまりました」

「わざわざ紅魔館へお越しいただき、ありがとうございます」

「いえいえ、お気になさらず。記事を書かせていただけるとあれば、地獄でも魔界でもどこでも行きますよ」

「それはよかったです」

「……そういえば吸血鬼異変でもこの廊下でお会いしましたね」

紅魔館の廊下を案内しながら、咲夜が文に話しかける。

「そうですね。あのときは招待状という名の挑戦状をいただいたので、妖怪の山から私
が派遣されたわけですが」

「その妖怪の山では射命丸様ほどの程度の地位にいますか？」

「おやおや、記者の私に逆に質問ですか。情報は財産ですが……まあ、その程度であれば

構いませんか」

「ありがとうございます」

「単純に地位でいえば私の上に大天狗様、さらにその上に山の頂点である天魔様が君臨しています」

——もつと言えば、真の山の支配者たる『鬼』という絶対強者もいますが、それは今はいいでしょう。あの方々が咲夜さんと関わることはないでしょうね。

「……あれほどの実力でせいぜい中間管理職なのです。正直、驚きますね」

「たはは、まあそうですね。とはいえ、大天狗様はだいぶ鈍っているので咲夜さんと戦えば負けてしまうかもしれません」

「そうなのですか——到着しました。こちらの部屋でお待ちください」

「はいはい」

文が案内された部屋はちよつとしたパーティーが開けそうな広さだった。

「豪華な部屋です。やはり相当なお金持ちですね。そういうえば霊夢さんが迷惑料を払ったとか言っていました、そのあたりの話も聞きましょうか」

文が部屋の中を眺めていると、奥にも扉があるのを見つけた。

「おや、奥にも部屋があるんですね」

文が何となく奥の扉を開けて中をチラリと見ると――

「こ、これは――!?」

部屋には血まみれの椅子に、煮えたぎる油の入った鍋、さらに天井に調理前のとり肉を吊るす器具が並んでいた。

「い、嫌な予感がします……ここは用事を思い出したとして帰るほうが良さそう――」

「どこへ行くこうというのかね？」

「!?」

文が後ろを振り向けば、いつの間にかレミリアが立っていた。

「こ、これはレミリアさん。ご招待ありがとうございます。ですが、急用を思いつきました……」

「それを言うなら思い出すだろう……まあそう慌てるな。咲夜に聞いたぞ、お前が行きたがっているとな。その手伝いをしてやる」

「行きたがる……? どこへですか」

「もちろん――地獄へだ」

その日の夜、紅魔館で烏の悲鳴が響き渡った。

――

「さて、紅霧異変も終わった。今のところ、概ね原作の流れを壊さずに来れているわ。次は春雪異変だけ……紅魔館からは咲夜が出勤して私の出番はないのよね」

レミリアは自室にて今後の動き方を考えていた。

「しばらく私はあそこで修行するのが良さそうね。なにせ今後出てくる連中が、鬼に月人二人——ふふふ、化け物揃いね」

いずれ相対する強敵を見据えてレミリアは静かに笑っていた。

第九話 『春雪異変』

紅霧異変が集結してからは大きな事件もなく、幻想郷は平和な日々が続いていた。

そしてその間、レミリア・スカーレットは——魔界にいた。

魔界は地上と比べて太陽の恵みがなく、常にうす暗い。その反面、大気は高濃度の魔力で満ちている為、魔法を扱う者にとっては何よりの修行場所となっている。

その魔界の空でレミリアは一人の少女と魔法戦を行っていた。

相手の少女は緑色の髪と瞳を持ち、ロングヘアの大人びた容姿をしている。そして特徴的なのは下半身で、まるで幽霊のように足がなかった。

「ライトニング・ボルト!」

レミリアの手から帯状の電撃が放たれる。それは対面の幽霊少女に真つすぐ向かっていった。

「ぬるいわ」

少女が三日月を象つたステッキを振ると、星形の光弾が発射されて電撃は迎撃された。

「やるわね!」 けどまだ続きがあるわよ——天の風琴が奏で流れ落ちる、その旋律、凄

惨にして蒼古なる雷——」

「ほう！　これは楽しめそうだ！」

レミリアから溢れ出る膨大な魔力が大気を揺らめかせる。

それに対抗して幽霊少女も自身の魔力を高めていく。

そして互いが大魔法を解き放とうとした、そのとき——

「ストップ！　ストトップ！　その魔法待つて——」

第三者が現れてレミリアと少女の間に割り込んだ。

「——なんだ、いったい。せつかく盛り上がってきたところだぞ。なあ？　魅魔」

魅魔と呼ばれた幽霊少女が答える。

「そうだねえ。あそこで止めるのは無粋つてもんさ、ユキ」

「場所を選びなさいよ！　場所を！　近くに魔界都市があるのよ!?　もし都市が崩壊で

もしたら、魔界神になんて言えばいいか——!!」

「大丈夫さ。魔界神——神綺のやつとは知り合いだからね。何かあったら私も謝つて

あげるよ」

「違う！　そうじゃない！」

「ハツハツハ！　ユキは熱いやつだな！」

「きいいい——！　こいつら——!!」

地団駄を踏みながら黒魔術師の少女——ユキが怒るが、レミアも魅魔もフリーダム
の塊なので気にしていなかった。

——

魔法戦を中断した二人とユキは近くの魔界都市で酒盛りをしていた。

「ほう？　魅魔は魔理沙の師匠のようなものなのか」

「ああ、そうさ。魔法使いとしてのね」

「魔理沙——あの魔女かく。人間なのに生身で魔界に乗り込んでくる常識外のやつ
だったな」

「あんたも魔理沙とは知り合いなんだっけ、ユキ」

「知り合いというか、ちよつかいをかけたら一方的にやられたというか」

「なるほど……そのときの姿が目には浮かぶな」

「いまの魔理沙はどれくらい強くなってるのかね」

「最近は会っていないのか？」

「あいつも魔法使いとしてそれなりになったからね。もう私の手からは離れたよ」

「たまには顔を見せてやらんとあいつも寂しいだろう。表面上はそんな素振りは見せない

いだろうがな」

「ん……まあ、そうさね。気が向いたらね」

——しかし、ちよつとは期待していたとはいえ、この広い魔界で魅魔に会えるとはラッキーだったわ。なにせ、霊夢も魔理沙も認める実力者。修行相手としてはこれ以上ないくらいね。

レミリアは紅霧異変が終わった後から密かに魔界に来ていた。

次は冬が終わらない異変——春雪異変が控えているが、それが解決するまで彼女の出番はない。その間に魔界で修行するという計画は以前から立てていた。

——さて、そろそろ春雪異変の時期だな。異変解決には出向かなくても紅魔館をずっと不在にするのは良くないわ。ひとまず地上に戻るか。

「修行に付き合ってくれてありがとう、魅魔。地上に来ることがあつたら紅魔館に来てくれ。歓迎しよう」

「なに、私もいい暇つぶしになったさ。地上に行ったら寄らせてもらおうよ」

「ああ、やつと帰ってくれるのね。これで魔界も静かになるわ」

「I, l l b e b a c k」

「え……ちよつと待って、レミリア。それ、どういう意味!?!」

「さあな……おつと、帰る前に魔界の酒を山ほど買わないとな」

「あんたの館ではそんなにお酒を飲むの？」

「いや、紅魔館の皆はそこまで酒豪じゃない。大酒飲みと会う予定があつてね」

「ふうん」

———

「私は帰ってきた」

「おかえ——」

「お帰りなさいませ、お嬢様」

レミリアが魔界から紅魔館に帰還すると、どこからともなく現れた咲夜が出迎えた。出迎えようとした美鈴は割り込まれて一瞬、固まっていた。

「はや！ 咲夜さん、速すぎます。私のお帰りのセリフが間に合いませんでしたよ！」

「お嬢様への最初のお帰りは渡しませんよ」

「なんの勝負なんですか……」

「帰ってきたはいいいけど、まだ吹雪いているのね。この月にこれはもはや異変じゃないかしらっ」

「はい。そのせいで冬用の燃料が切れかけています」

「これは——魔導書？　まさか魔界の？」

レミリアは大図書館でパチュリーに魔界土産を渡していた。

「そうよ。地上ではなかなか手に入らないものでしょ？」

「え、ええ……そうね」

パチュリーがやや興奮した様子で、お土産の魔導書を手に取っていた。

大図書館でしばらく本をめくる音が響く——

「ちよつと、パツチエさ〜ん」

魔導書に夢中のパチュリーにレミリアが後ろからのしかかり、肩に頭を乗せた。

「な……なによ、レミィ」

「さつそく読むのはいいけれど、お土産を持ってきた親友に何か言うことがあるんじゃないかしら？」

「う、あ……ありがとう……」

「ふふふ……まあ、私もそこまで喜んでもらえるなら、持って帰ってきた甲斐があるし？」

珍しく赤くなるパチュリーに、肩に頭を乗せたままのレミリアがニマニマしながら言った。

「くう……」

うっかり興奮した姿を見せてしまったパチュリーが悔しがるも、魔道の探査者として未知なる世界の魔導書への興味は隠し切れないのであった。

――

「咲夜に任せただけには、冬が終わらない異変はすぐに解決するわ。私は代わりに宴会の準備でもしていきましょう」

レミリアは知っていた。春雪異変があと一日で解決することを。

「長い冬が終われば短い春。その春の終わりに古の大妖が再び地上に現れる」

レミリアは知っていた。短い春に不満を持った鬼が異変を起こすことを。

「鬼と吸血鬼――東洋と西洋の違いはあれど、同じ字を持つ妖。仲良くしましょう……伊吹萃香」

第十話 『鬼の異変（前編）』

あらゆるものを焼き尽くす煉獄の吐息とすべてを凍てつかせる凍える吹雪が激突した。衝撃で周辺の地面はえぐれ、炎と吹雪の余波が地獄のような光景を生み出す。

「ハツハツハ！　口だけではないようだね！　吸血鬼って種族をちよつと見縊っていたよ」

小柄な少女だった。煉獄の吐息で地形を一変させたとは思えないほどに幼い容姿だが、明らかに人間とは異なる点がある。

頭の左右から生えた二本の角。

この国において最も有名ともいえる妖怪——鬼の特徴だった。

「ふっふっふ……当然だ。私は吸血鬼の女王だからな。そちらこそ伝説と謳われた鬼のチカラ、こんなものではないのだろうか？　もっと見せてくれ」

鬼に相対する吸血鬼——レミリア・スカーレットは傲然と言い放つ。

「言うじゃないか！　だが、吸血『鬼』と呼ばれるなら判るだろう。鬼とは強いものの代名詞。その本家本元の鬼の実力、とくと見せてやろう！」

鬼と吸血鬼の激突より半月前——

『博麗の巫女がまさかの通り魔！』

衝撃的な話が飛び込んできた。

冬の妖怪レティ・ホワイトロックが理由もなく人間に襲撃されたという。

問題はその人間が博麗の巫女、博麗霊夢であるという点だ。おそらく彼女は長い冬に苛立つて冬の妖怪に八つ当たりをしたのだろう。

幻想郷の秩序を守るべき博麗の巫女が、一時の感情で妖怪を攻撃するなど嘆かわしいことである。

一部では先日の冬の終わらない異変——春雪異変は博麗の巫女が解決したという話もあるが、天狗としては信じていない。

普通の魔法使い、霧雨魔理沙や紅魔館のメイド長、十六夜咲夜がそれに助力したとも聞くが、こちらも裏が取れなかったので怪しいものである。

春雪異変といえば、桜が咲く少し前に冥界のお嬢様の西行寺幽幽子が桜の花びらを蒔いているのを目撃したことがある。本人は春を返していると訳の分からないことを言っていた。花びらをどこから持ってきたかは不明だが、おそらく、春が待ちきれずに

桜の花びらで偽りの春を楽しもうとしたのだろう。

「ふくむ……いまいちですねえ」

射命丸文は作成途中の記事を読み返しながら呟いた。

「博麗の巫女が気まぐれで妖怪退治をするなんて、普通のことです。インパクトが足りません。ここは春雪異変の犯人はまさかの博麗の巫女!?! という方向にしましょうかね」

先日、節度のない記事を書いてレミリアにお仕置きされた文だが、まったく懲りていなかった。

「もしくは人間三人が起こした世にも珍しい異変というタイトルで……」

『相変わらずだねえ、文。 変わってなくて嬉しくなるよ』

「!?!」

誰もいない状況で声をかけられた文は驚愕して周囲を見渡す。

「誰……いや、この妖気はまさか——!」

『久しぶりに幻想郷に戻ってきたんだ。またよろしくね』

「……あなたほどの方が、ただ戻ってきたということもないでしょう。何をしようというのですか?」

『今年は春が短かっただろう? そのせいで私の好きな花見があまり出来なくてね。代わりに皆にたくさん宴会を開いてもらおうってわけさ』

「そうですか……私の立場からは何も言えませんが」

『堅苦しいなあ。もつと気楽にいきましょうよ』

「まあ……そうおっしゃるのであれば善処はします」

『宴会には文も是非来てね。じゃあまた』

「はあ……。また幻想郷が騒がしくなりますね。何だか新しい記事を書く気力がなくなってきました……」

———

「明日もまた宴会か」

ここ数日のレミリアは玉座に座りながら、異変解決者たちの動向を伺っていた。

「霊夢、魔理沙、咲夜……まだ誰も宴会を開かせている存在に気が付いていないようね」
 幻想郷中に広がる妖霧——それが皆を萃（あつ）めて三日置きに宴会を開かせていた。しかも、誰もそれに気が付いていない。

「人間トリオだけでなく、妖怪も萃めているようね。妖霧の影響がないのは紫くらいか……さすがにあいつは別格ね」

異変解決トリオが早々に気が付くなら任せるつもりだったレミリアだが、現在まで呑

気に宴会を開いているだけなので、自ら動くことにしたのだった。

「では行くか。次の宴会の主役はこのレミリアよ」

レミリアが幻想郷中を回るべく、紅魔館を飛び立った。

———

「おかしいな」

「なにがよ？ 魔理沙」

「文の新聞だ、霊夢。春雪異変の解決で、今度はどんなふざけた記事を書くかと思つたが

——— 異変には触れずに当たり障りのない無難な内容だった」

「あんた、あいつの記事を毎回チェックしてるの」

「まあな。次の異変の記事では私の活躍を書かせるつもりだからな。ちよつと前にレミ

リアと私でお灸をすえてやったから反省して自重したのかね」

「そんなタマじゃないでしょ、あいつは」

「うゝむ」

「それより宴会の片付けをあんたも手伝いなさいよ。みんな、好きに騒いで片付けもせ

ずに帰るんだから」

「私は幹事だからな。色々忙しいんだ。ただでさえ、最近は宴会が多いから」

「今日はレミリアが幹事をやるらしいじゃない。丑三つ時に神社まで言いに来たわよ。怒って叩き出そうとしたけど、寝起きだったし、うっかりやられちゃったわ」

「私のところにも夜中に来たぜ。今日の幹事は任せろって幻想郷中に言って回ってたらしよ」

「あいつも暇ねえ」

———

紅魔館から少し離れた草原——

「私を呼ぶなんて珍しいじゃない？ レミリア」

「ああ、紫。用件はわかっていると思うが」

「さて……ね。私も全知全能ではないから、言われないとわからないこともあるわよ？」

「ふん。頼みたいことは二つ」

「……一つなら良かったのですが、二つの時点で猛烈に嫌な予感がしてきました」

「ふふふふ……さすがだ。これだけでわかってくれるとはな。一つ目は幻想郷中に広がったコイツを萃めてくれ。境界を操作すれば可能だろう」

「よく気が付いたものですね。違和感を感じても、はつきりと認識した者はあなたの他にはいないでしょう」

「当然だ、私はレミリア・スカーレットだぞ。それでどうだ？」

「いいでしょう。やって差し上げますわ」

「ありがとう。ではさっそく頼む」

「わかりました」

紫が幻想郷中に広がった妖霧を、境界を一気に小さくすることで一つに萃めた。

「あ、あれ？ まだ宴会前なのになにするんだよ、紫〜」

大きく広がっていた妖霧が一つになると、そこには小柄な少女が立っていた。

頭には二本の角と大きな赤いリボン、手には鎖をつけた紫の瓢箪を持っている。

「こちらの吸血鬼のお嬢さんがあなたに用だそうよ、萃香」

「レミリア・スカーレットだ」

「んん……ああ、あんたか」

「おや、私を知っているのかな？」

「まあね。他の連中と違って、私の能力で萃められなかったから興味を持っていたんだ

」

「なるほど」

「それで？ 私を呼んでどうしようって言うの？」

「なに、そろそろこの三日置きの宴会も終わりにしようと思ってるね」

「ええ？ 花見の期間が短かった分、私はまだまだまだ宴会を楽しみたいのに」

「それなら最後にこの私が派手に遊んであげるわ」

「ふくん……吸血鬼風情に『鬼』たる私の遊び相手が務まるかねえ」

萃香の挑発には乗らず、レミリアは紫に話しかけた。

「ふつつつ……紫、あと一つの頼みの件だが」

「はいはい」

「派手に暴れるから、周囲に影響が出ないよう結界を張ってくれ」

「そこまでする必要があるかい？ スペルカードルールだっけ、あれならそう酷いことにはならないだろう？」

「スペルカードルールは争いを解決するには良い手段だが、これからするのは別に争いじゃない。私とお前の個人的な遊びだ。あのルールは使わない」

「鬼に喧嘩を売るなんて若者は命知らずだねえ」

「ふつつつ、わからないか？ 紫が私の頼みを拒否しない理由を」

「ん？」

「つまり紫はこう考えているわけだ。『萃香とレミリアが喧嘩をすれば、簡単には決着

がつかず、周囲への被害は甚大になる。だから結界を張るしかない——とな」

それを聞いた萃香が紫の方を向くが、彼女は否定せずに沈黙を保った。

「へえ……。ずいぶんとこの吸血鬼を買っているようだね、紫」

「さて、そろそろはじめよう。今日は最後の宴会がある。幹事として遅れるわけにはいかないからな」

「面白い……。この伊吹萃香に喧嘩を売るやつなんてどれくらいぶりだろう。ガツカリさせないでくれよ」

二人が睨み合う間、紫は周囲への被害を抑えるための結界を展開し始めた。

第十一話 『鬼の異変（後編）』

「そおおおらっ！」

萃香が石や岩を萃めた巨岩を投げつけてくる。

それをレミリアは回避——せずに自分から突っ込んだ。

「ん!？」

レミリアが岩を避けた瞬間に、追撃をしようと構えていた萃香は訝しんだ。

「たかが岩で私をどうにかできると思うな！」

翼で身体を包み、飛行しながら回転するレミリア。翼の先端がドリルのようになり、

巨岩を砕く。

「あっはっはっ！ そうきたか！」

巨岩を砕いたレミリアはその勢いそのまま萃香に迫る。

「ぬん！」

レミリアのドリル状の翼を萃香が正面から殴りつける。

ギャリリリイイ!

金属同士がぶつかるような音が鳴り響くが、鬼の拳はわずかも傷つくことはない。

徐々に回転が弱まり、上空に離脱するレミリア。

「鉄をも貫く私の翼で無傷なんて、さすがは鬼ね」

「鉄くらいと比べられちゃあ困る。せめて緋々色金あたりでないとね」

「ならばこれはどうかしら？ シャドウ・サーバント！」

レミリアの闇魔法が発動すると、地より湧き出したしもべたちが萃香に襲い掛かる。

「雑魚を呼び出しても無駄さー！」

萃香が大きく息を吸い、なぎ払うように煉獄の吐息を放った。

闇のしもべといえど、地獄の炎には敵わず消滅していく。

そのまま萃香はレミリアにも炎を吹いたが、彼女は動じず口を開けると、凍える吹雪を吐き出した。

煉獄の吐息と凍える吹雪が激突する。衝撃で周辺の地面はえぐれ、炎と吹雪の余波が地獄のような光景を生み出す。

紫が境界を張っていないければ、被害はここだけに留まらず、周囲の草原は生物の住めない死の大地になっていたことだろう。

「恐れ慄くがいい！ ミッシンググパープルパワー！」

萃香が全身に妖力を漲らせると、一回り身体が大きくなったように見えた。

「あまりの威圧感に相手が大きく見える錯覚——ではないわね」

レミリアが眩く間にも二回り、三回りと萃香が大きくなつていく。最終的に元のサイズから10倍以上になったところで、巨大化は止まった。

『さあ、レミリア。こうなつた私にどう攻める？』

「ふん、でかいだけの相手などただの的さ！ クイーン・オブ・ミッドナイト！」

レミリアが無数の闇色の光弾を放つ。確かにサイズの関係で、巨大萃香には適当に撃つても弾幕が当たる。しかし——

『追讎返しブラックホール』

萃香の前に漆黒の渦が現れる。

それはレミリアの光弾をあつさり飲み込み、無力化してしまった。

「ぬう——！」

——うおおお!? いや、存在は知つてたけど、実際にブラックホールを生み出すのを見ると驚くわ。紫のスキマとも違う根源的な怖さがあるわよね。吸い込まれた弾幕はどこに行つたのよ。

『さあ、反撃だ』

地響きを立てながら萃香が進撃する。あまりの巨体の為、歩くだけでもレミリアにとっては攻撃のようなものだ。

「弾幕はブラックホールで吸い込まれるから、否応なくこのでかいのと接近戦をする必要があるわけか」

『そういうこと！』

萃香が巨大な足で踏みつける。大きくなっても敏捷性に変わりはない。つまり、サイズの分だけ敵を捕らえやすくなっていた。

「ちっー」

レミリアが飛び上がり回避する。その動きを見た萃香は、口から霧を吐き出して視界を覆った。

霧が立ち込める中、萃香は再び石や岩を萃めて巨岩を造る。それはもはや岩ではなく山とも言えるようなサイズとなっていた。

『そらあああつ！』

上空目掛けて萃香が山を放り投げる。それは大きさからは信じられない速度でレミリアへと迫る。

「視界を悪くしたのはこれが狙いか！　だが、岩も山も私にとっては同じこと！　スピア・ザ・グングニル——！」

『ちっ！』

再びブラックホールを発生させようとする萃香だが、蝙蝠は凄まじい速度で距離を詰めると、巨体のいたるところに取り付いた。

「キキキッ！」

蝙蝠の牙では鬼の強靱な皮膚を破ることはできないが、接触した状態ならばエネルギーを吸い上げることが出来た。

蝙蝠たちがエナジードレインを開始する。

『!!』

身体から何かを吸われていると感じた萃香は、一瞬の判断で自身を妖霧へと変えて蝙蝠たちから逃れた。

「——ふうっ」

散っていた蝙蝠が集まって、再びレミアの姿になった。

——あ、危なかった……！　どんな術か思い出したから対応できたけど、わずかも遅れていたら魔力をごっそりと持っていかれていたわ。

一方の萃香も妖霧が萃まり、実体を取り戻していた。

「……やるね。いまので決まったかと思っただけど、蝙蝠変化——吸血鬼のお家芸ってわけだね」

「蝙蝠状態で先程の攻撃が出来るのはそういないがな」

「へえ、そうなのかい」

萃香が拳を握り、レミリアに相對する。

「さて次は何を見せてくれるんだ？」

「もう術はやめておく。ここからは純粹にこの肉体のみで相手をしよう」

「幾多の術を使う鬼だが、最後にして最強の武器は己の肉体か」

「そういうこと……さ！」

萃香が今まで以上の圧力をもって殴りかかるが、レミリアは腕から紅い巨爪を出して迎撃する。

—————

それから互いに無尽蔵ともいえる体力と再生力に任せて殴り、袂られ、吹き飛ばし合った。

「はあつ、はあつ……！ どうしたんだい、レミリア？ 息が上がっているんじゃない

か」

「はあつ、はあつ……！ それはお前だろう、萃香？ 見るからに呼吸が乱れているぞ」
長時間の戦いで二人とも全身から血を流し、肩で息をしていたがその目はいまだ戦意で滾っていた。

「ははっ、あははははははは！」

「ふふっ、ふふふふふふ！」

「まさかここまで本気で戦えるとは思っていなかった。楽しい……実に楽しい喧嘩だった」

「それは良かったわ」

「だけど、どれだけ楽しい祭りもいずれ終わる。だから——」

口調は穏やかだが、佇む萃香からかつてない程の膨大な妖力が感じられた。

「これで決着をつけよう、レミリア・スカーレット」

「望むところよ、伊吹萃香」

——必死に修業はしたけど、それでも腕力では鬼の四天王に及ばない。最終攻撃に正面からぶつかるのは愚かといえる。なら、距離をとる——？ ふふふ……無粋ね！

鬼の四天王の拳と吸血鬼の女王の爪が真っ向からぶつかり合った。

遠くで涙目の紫が何か叫んでいるのが見えた。

第十二話 『鬼の異変（エピローグ）』

レミリアと萃香は正座させられていた。

「ついカツとなつてやった、今は反省している」

「ごめ〜ん」

ピク……ピクツッ！

二人のミニマムほどこか反省が感じられない言葉に紫は無言で青筋を立てていた。

——キレゆか！ 怒ってる……これは怒ってるわよ……。

どこから持ってきたのかギプスをつけて巻き込まれアピールをしている紫。

戦っていた二人の方はすでに目に見える負傷はなくなっており、さすがの回復力で

あつた。

「ま……まあそう怒るな、紫。たしかに多少、羽目を外しすぎたが……」

「は？ 多少？ 周囲の惨状を見て言っていますか？」

紫が張った結界の中は見るに堪えないことになっていた。

草木はすべてチリと化し、いまだ消えぬ炎と冷気が荒れ狂う地獄。

そして最後にレミリアと萃香が奥義をぶつけ合った中心付近には底が見えない大穴

が開いていた。

「これを元に戻すのにどれほどの時間と労力がかかるとお思いで……？」

「う……ぐ……」

「まあまあ、紫。結界の外は被害がないんだから……」

「それは私が死ぬ気で結界を維持したからです。おかげでこのありさまですが」（ギプスアピール）

「悪かったと思うが、宴会の準備があつてな。そろそろ行かねば——」

「あ？」ビキビキ！

——ひいひい！

その後、レミアアが紅魔館の総力（主にパチュリー）で復旧を手伝うと約束して何とか紫を宥めることができた。

—————

その日の博麗神社の宴会には多くの人妖が集まり、盛り上がっていた。

常連の紅魔館勢だけでなく、アリス・マーガトロイドなど個人での参加や春雪異変後から博麗神社に来るようになった白玉楼の主従——西行寺幽々子に魂魄妖夢の姿も

見られた。

「拒否」

レミリアから喧嘩の後始末の話聞いた。パチュリーは秒速で断った。

「待ってくれ、パチエ！ 紅魔館の総力でと約束したんだ。私の名に懸けて反故にするわけにはいかない」

「知らないわよ。勝手に喧嘩してその後始末は任せる？ ふざけてるの？」

「い、いや……もちろん任せきりにはしないが」

「総力って言っても大地の復旧なんてほぼ私頼りでしょうが」

「う……そこをなんとか」

「いや。大体、あなたはいつもいつも……」

「うう……」

レミリアがパチュリーに怒られていると、宴会に新たな参加者が現れた。

「やあやあ、みんな。伊吹萃香だよ」

「おや……見ない顔だな。知ってるか？ フラン」

「知らないわ。というか顔の広い魔理沙が知らないなら私を知るわけないでしょ」

「それもそうか」

「おお、萃香！ 待っていたぞ」

パチュリーの説教から逃れられて嬉しそうなレミリアが近づく。

「やつほー、レミリア。宴会が待ち遠しかったよ」

「うむ。今日は古今東西の酒を用意してある。大いに楽しんでいってくれ」

「いいね、いいね。浴びるほど飲むぞ〜」

「そいつは誰だ？ レミリアの友達か？」

「その通りだ、魔理沙。皆に紹介しよう。我が友、伊吹萃香だ」

「昔は幻想郷にいたんだけど、しばらく離れていてね。最近帰って来たんだ。よろしく」

「おう、よろしく。私は霧雨魔理沙だ」

「フランドールよ。お姉様はいつの間にか友達になったのよ」

「まあ、ちよつとな」

「号外——！ 号外ですよ——！」

文が宴会場に号外記事をばら撒きながら現れた。

神社に記事を散らされた霊夢は不満そうだ。

「ゴミを巻き散らかさないで」

「ゴミとは失礼ですね！ とっておきの記事なんですよ！」

「とっておきとは……どれどれ」

興味をひかれた妖夢が記事を読み出した。

『地底世界から大怪獣現る！』

その光景を見たとき、この射命丸文——心底震えた。

霧の湖から少し離れたところにある草原が荒野へと変わっていたのだ。

しかもただの荒野ではない、消えない炎と吹雪が荒れ狂う死の荒野だ。

いったい何者の仕業かと周囲を探索したところ、底が見えない大穴を発見することができた。間違いなく、この惨状を生み出した元凶はここから出現したのだ。

穴の大きさと周囲の惨状から、出現した者は極めて大きな巨軀を持ち、炎と吹雪を吐く大怪獣だと推測できる。

付近で大型の飛行生物の目撃情報はなく、荒野の外に移動する足跡もない。おそらく大怪獣は上半身を穴から出した状態で暴れ、その後地下へと戻ったのだろう。

穴の先には旧地獄か、それとも未知の大洞窟が広がっているのか興味は尽きない。

残念ながらあまりにも危険すぎるため、そこで調査は打ち切った。

突如として幻想郷に現れた未知の大怪獣。その姿を見れなかったことは逆に幸運だったかもしれない。もし出会ってしまえば命はないであろうから——。

「地底からの大怪獣ですって、幽々子様！ 恐ろしいですね〜」

「そうね、妖夢。近づかないようにしなきゃね」

「大怪獣だったよ！ どうする!?! 霊夢!」

「どうもしないわよ」

「なんだよ、ノリが悪いなあ。お前たちは興味あるよな?」

「え? そ、そうね。興味あるわよ。ねえ、萃香?」

「うん!?!……そ、そうだな。興味があるよ、レミリア」

「だよな〜」

同意が得られて嬉し気な魔理沙だが、横にいるフランドールは何かに気が付いたのか胡乱げな目でレミリアと萃香を見ていた。

「ど、どうしたのかしら、フラン? 何か言いたいことでもあるの?」

「別に? ただ、お姉様を買ってほしいものがあるかな〜ってね」

「うぐ……いい、いいわよ。可愛い妹のおねだりだしね」

「ふふふ……さっすが、お姉さま♪」

フランドールのおねだりにレミリアは快く(?)頷いた。

「ちゃっかりしてるね、レミリアの妹……」

それを見た萃香が呆れて眩いていた。

「どうですか、皆さん！ この記事は！」

「珍しく面白い記事だぜ。怪獣の写真とかないのか？」

「残念ながらありません。しかし、私としては旧地獄で飼っていた巨大生物が逃げ出したのではと睨んでいます」

「なるほど。ありえる話ですね」

追加の料理を並べていた咲夜も少し興味を持って新聞を見ていた。

「この草原だと紅魔館から結構近いですね。怪獣が来ないか心配です」

「私も美鈴に加勢するとして、ナイフが通用する相手なのかしら」

この状況で犯人は自分たちと白状すれば、興醒めすることは確実。怪獣の話題で盛り上がる皆をレミリアと萃香は冷や汗をかきながら眺めるしかなかった。

「盛り上がっていますね」

スキマから現れたのは八雲紫。ギプスは外していた。

「珍しいわね、紫。あんたが来るなんて」

「今日が一番盛り上がる宴会でしょうし、たまにはね」

「ちようどいいわ。片付けも手伝っていつてね」

「……」

「ちよつと、なんで無言なのよ！」

片付けを手伝う気がない紫に霊夢が怒りだすが――

「まあまあ、霊夢。紫も疲れているんだろう。片付けなら、私が手伝ってやるから」

「は？ あんたが？ 熱でもあるんじゃないの、レミリア」

「失礼なやつだな」

「ささ、紫。この萃香が酌をしようじゃないか。たつぷりと飲んでくれ」

「これはどうも」

「なんかあいつら妙に紫に優しくないか？」

「あやしいわね。というかレミリアが片付けを手伝うなんて異変よ、異変」

「お姉様もたまには片付けくらい……やらないかな」

この日を境に博麗神社での三日置きの宴会は終わった。

幹事のレミリアが用意した古今東西の酒や珍味もあり、皆も大いに盛り上がって今年最後の花見を楽しむのだった。

――

文句を言いつつも復旧現場に来てくれたパチユリーだが――

「ロイヤルフレアツ！」

「ぐわああああああ！」

予想より5倍はひどい惨状を見て、まずレミアアにお仕置きを食らわせた。

第十三話 『永夜異変（上編）』

ギヤアアアアアア——

ミスティア・ローレライが焼き鳥になりながら落下していく。

「あいにくだが、今は焼き鳥ではなくフライドチキンの気分だな。これ以上お前の相手を

してられない」

「容赦ないですね。レミリアお嬢様」

「咲夜が夜を止めているとはいえ、この異変は早く解決する必要がある。そんなときにちよつかいをかけてきた夜雀が悪いのよ」

「それもそうですね」

「今の鳥もその前の虫も圧倒的な格上に挑んでくるなんて、長生きできないわね」

「お嬢様の言う偽物の月の影響でしょうか？」

「さあねえ。元から鈍いやつらだったのかもしいわね」

—————

夜雀を焼き鳥にする数時間前——

「……なるほど。今宵の月——確かにあれは紛い物だわ」

レミリアが夜空を——満月を見上げながら呟いた。

「咲夜」

レミリアが腹心たるメイド長を呼ぶと、時間差なく返答があった。

「お呼びですか、お嬢様」

「異変よ。出発の準備をしなさい。私も出るわ」

「え？ 異変ですか？ いったいどのような……」

「月よ。咲夜にはどう見える？」

「綺麗な満月——どこもおかしくないように見えますが……」

「いいえ。あれは何者かによつてすり替えられた偽物の月。人間には知覚しにくいと思
うけど、夜の女王たる私にはすぐに分かるわ」

「あの月が偽物……では本物を隠した犯人を懲らしめるわけですか？」

「そういうことよ」

「それでしたら春雪異変のように私に命じてくだされば、解決してまいります」

「無理よ」

「え？」

「無理と言ったのよ、咲夜。今回の相手は強敵よ。それこそ私でも一人では勝てるか分からぬほどに」

「そ、それほどなのですか？ 元から西洋では無敵だったお嬢様ですが、この地に来て以降、更に強くなっています。そんなお嬢様が苦戦するなど……」

——そう、確かに私は強くなったわ。幻想郷に来る前からずっと自らを鍛えてきた。そして強敵との戦いを経るたびに自分が成長していく実感もあった。それでもどうなるか分からないのが月人という存在よ。

「それほどの手相手よ。だから私とあなたで行くというわけ、いいかしら？」

「——かしこまりました。準備には文字通り、時間はかかりません。すぐに出発は可能です」

「グッドよ、咲夜。さあ、こんな異変は夜を止めてでも今夜中に解決するわよ」

——

夜の幻想郷を二人が飛行していると咲夜がぽつりと呟いた。

「おかしいですね」

「なにがおかしいの？ 咲夜」

「ここには人間の里があつたはず。私は買い物でよく来るので覚えています」

「ふむ……」

レミリアが探るように周囲を見回していると、声をかけてくるものがあつた。

「ここには何も無かつた。お前たちの見ている通りだ」

その女性は一見、人間のようだった。だが、空を飛んでいる時点で一般人ではない。

「！ あなたは確か寺子屋の——」

「教師をしている上白沢慧音だ」

慧音と名乗つた女性は長い銀髪、スカートと一体になつた青い服と幻想郷の住人にしては普通の格好をしている。だが、帽子だけは特徴的でドーム、あるいは一軒家のようなそれを一度見れば忘れることはないだろう。

「その寺子屋の先生が何か用かしら？」

「用があるのはお前たちの方だろう。だが、ここには何も無い。そう見えるだろう？」

不埒なことを企んでいたのだろうが、それも出来ない」

「……いや、見えるよ。たしかにそこに人間たちがいるね」

——私の地力が上がった影響かしら？ その気になれば解除もできるわね、これ。

やるつもりはないけどさ。

「!? バカな、お前ただの妖怪じゃないな！」

「当たり前だ。私は吸血鬼の女王にして永遠に紅い幼き月、レミアア・スカーレットだからな」

「あの紅魔館の吸血鬼だと！」

「ご安心ください。我らは人里に害をなしに来たわけではありません」

「こんな不穏な満月の夜に、吸血鬼を伴ってきてよく言えるな！ まったく信用できんぞー！」

「それはまあ……否定できませんが」

「否定してよ、咲夜」

「くっ、里には指一本触れさせん！ 返り討ちにしてやる！」

「お嬢様、ここは私が」

「ええ。任せたわよ、咲夜」

十六夜咲夜は戦い、そして勝った。

「そして時は動き出す」

「ぐあああああああつ！」

——キング・クリムゾン並にすっ飛ばして終わったわね。

「ぐ……こんな不完全な満月でなければ、こうも容易くは……」

「満月だと何かあるのですか？」

「こいつはワーハクタク。月が真円を描く時に本領を發揮すると聞くわ。その強さは通常時の10倍だとか」

「10倍！ それは凄いですね」

「いや、流星にそこまでは変わらんぞ！ 別の種族の話が混じってないか!？」

「私たちは満月の異変を解決するために動いているのよ」

「なに？ そうなのか……それならそうと言えればいいじゃないか」

「一回、撃墜してから話し合うのが幻想郷流でしょ」

「それはごく一部の紅白巫女とか白黒魔法使いだけが……。まあいい、満月の異変は迷いの竹林のあいづらが原因だろう」

「ほう？」

「それ以外にここまでのことが出来て、実行に移すやつなんて私は知らない」

「迷いの竹林とは厄介な場所ですね」

「竹林の中に古いが大きな屋敷が建っている。連中はそこにいる」

「情報感謝する。お礼として寺子屋を廃業したら紅魔館で雇ってやつてもいいぞ」

「不吉なことを言わないでくれ……」

「そこまでよ！ 時間の流れがおかしいと思つたら、やっぱりあんたらか！」

竹林を目指して飛んでいると、紅白巫女とスキマ妖怪が飛来してきた。特に驚きもせず、レミリアも返事をする。

「霊夢とゆかりん。奇遇だな」

「誰がゆかりんですか、誰が」

「ゆかりん……ぶふっ」

思わずふき出した霊夢を紫がじろりと睨む。

「ごほん！ とにかく、夜を止めている犯人はあんたらね！」

「Exactly（そのとおりでございます）」

「いぐ……？ おかしな言葉を使つても誤魔化されないわよ！ まるで紅い霧のあの時みたいに大きなことをしてるわね！ 退治よ、退治！」

「まあ待て、霊夢。別に私たちは——」

「問答無用！ 館まで行く手間が省けたわ。この場で時刻の進みを正常に戻させる！」

——仕方ないか。傍から見たら夜を止めている吸血鬼一派って、完全に異変の元凶

だからね。けど当然、紫は月の異変に気が付いてるはずだけど。

霊夢を止めるよう紫をチラリと見るが、本人は口出しする気がなさそうだった。

——とりあえず霊夢には好きに一戦させるつもりか。まあ、止まりそうにないものね。

レミリアが思案していると、咲夜も応戦の構えをとった。

「いいでしょう。いつぞやの借りをここで返すとしましょう」

「さあ！ 覚悟なさい！」

うおらあああああ!!!

とても少女とは思えない雄叫びを上げながら霊夢が咲夜に襲い掛かった。レミリアは紫と並んでそれを見物していた。

「行くべきところは分かっているのか？」

「ええ、もちろんです。あなたこそ分かっているのですか？」

「竹林にある屋敷だろう」

「へえ。それもあなたの運命を操るといふ能力の一環ですか？」

「それもあるが、人里の方でワーハクタクが教えてくれたぞ」

「なるほど。上白沢慧音ですか」

「今回の元凶はずいぶんと手強いらしいな。お前が霊夢と手を組んでまで解決に動くほ

どこに」

「満月に干渉するほどの術者です。ただ者ではないでしょう」

「うむ……そういえばお前と共同戦線を張るのは初めてだな」

「そうですね……。基本的にあなたが騒ぎを起こして私がその後始末、というのが多かったですからね」

「んん……（ん）ほん（ん）ほ——！」

レミリアが誤魔化そうと咳ばらいをしていると、彼方から目も眩むほどの派手なレーザーが発射され、竹林を薙ぎ払っていった。

「魔理沙のマスタースパーク？ あいつも来ているのか」

「ではその相手は……なるほど、わざわざ冥界から出てきたのですね」

魔理沙がマスタースパークを放った相手は魂魄妖夢。

その近くには妖夢の主である西行寺幽々子が、反対に魔理沙の側にはアリス・マーガトロイドがいた。

「ちようどいい。そろそろ咲夜と霊夢も止めて、皆に倒すべき相手は別にいると教えてやるとしよう」

「ええ、それがよいでしょう」

その後、紫が異変の元凶は別にいると伝えることで、何とか霊夢や魔理沙たちを落ち

着かせることが出来た。

――

竹林の奥を目指して飛びながら、レミリアがアリスに話しかけていた。

「お前がアリスか。たまに宴会で見かけていたが、話すのは初めてだな」

「まあ、あなたと私では接点がないからね」

「そうだ。お前の主だという女に魔界であつたぞ」

「魔界で……？ でも主？」

「なんでもメイドとして使つてやつたとか言つてたな」

「ぶっ!? まさかそいつつて……いや、確かに無理矢理メイドをさせられたことはある

けど、もう昔の話よ！」

「そのうち紅魔館に遊びに来るだろうから、そのときはお前も招待しよう」

「行かないわよ！」

その話を聞いていた魔理沙がレミリアに問いかける。

「なあレミリア。その女つてもしかして……」

「おしゃべりはそこまでにしましょう。着きましたよ」

紫が注意を促すが、それがなくとも各々、空気が変わったことを肌で感じていた。

目の前には竹取物語にでも出てきそうな古風な屋敷。

まるでそこだけ時間の流れから取り残されたかのようにだった。

そこには紅霧異変、春雪異変の元凶と解決者が手を組んで挑むほどの相手——月の民が待っている。

第十四話 『永夜異変（中編）』

「では行くぞ、諸君。異変の首謀者を懲らしめにな」

「はい、お嬢様」

「あんたが仕切ってんじゃないわよ」

文句を言う霊夢だが、首謀者を懲らしめるといふ点には同意なようで竹林に立つ屋敷を睨みつけていた。

「マスタースパークで入口を吹き飛ばして宣戦布告の代わりにするか？」

「やめなさい……まずは私の人形たちを偵察に行かせてはどうかしら？」

物騒な発言をする魔理沙に対してアリスは慎重策を提案する。

「どちらも不要ですわ。この屋敷の住人なら私たちが来たことに気が付いています。普通に入口を開けて入りましょう」

「さてさて、ここの住人は龍料理を出してくれるかしらね」

「そんな高いの出してくれるわけじゃないじゃないですか、幽々子様」

紫が冷静に告げて、屋敷の中に入っていく。

おかしなことを言いながら幽々子と妖夢もそれに続いていく。

「しまった、一番乗りを取られたわ」

「本当だ！ ずるいぜ、紫！」

「それはいけません。お嬢様こそが何でも一番であるべきなのです」

「魔理沙だけでもアレなのにレミリアもいると二乗で疲れるわね……」

「あんたら遊びに来たの……？」

のんきな三人が紫たちを急いで追いかけて、呆れるアリスと霊夢が最後に屋敷に突入する。

――

屋敷の内装は外観と同じく古い時代の日本を感じさせるものだった。

外観と異なるのはその広大さ。

入口から真つすぐ進むと左右に襖が並ぶ廊下に出るが、その幅も高さも巨人が暮らせるほどに大きい。

更に廊下はどこまでも続いており、奥まで見通しても果ては見えない。

「内部の空間を操作して、外から見るよりも広くする……紅魔館のパクリがきたわね。

このネタはすでに使ったのよ」

「おかしいわね。庭師をクビにしたわけではないのだけれど」

「ふははは！ 斬——むっ!？」

ゴウツ！

斬りながら先頭を進む妖夢だが、一際大きな妖力弾が襲ってきたために、急制動をかけて横に避けてやり過ぎした。

「ほほう……ウサギの親玉が来ましたか」

その少女は先程のウサギたちとさほど変わらない見た目をしていたが、身体から感じる妖気は長い年月を生きた妖怪のものだった。

「ひどいやつらだねえ。いたいけなウサギを容赦なく斬りまくるなんて」

「勘違いしないでよね。斬っていたのはその刀を持つてるやつだけよ」

妖怪ウサギの長の言葉に、一緒にされてはたまらないと霊夢が反論する。

「さあ、ウサギの親玉よ！ 斬られる前にここの主のところ以案内しなさい！」

「私たちも鬼じゃない。素直にしゃべるならこれ以上の惨劇は起こらないだろうぜ。さあ、どうするっ？」

「怖い怖い。けれどお師匠様から言われてるんでね。そう簡単には進ませられない——」

「ならば斬るのみ！」

「ちよ、お前、もう少し駆け引きとか」

魔理沙の制止も無視した妖夢が、親玉ウサギに突撃を仕掛けた。

「もうー！ まだしゃべってる途中でしようがー！」

親玉ウサギは迎撃のスペルカードを発動する。

——脱兎「フラスターエスケープ」

「さつそくスペルカードを切つてきましたか！ 望むところです！」

「お前が突つ込みに戻るのには珍しいな、魔理沙」

「あいつは脳筋すぎるぜ、レミリア」

「遅い！ その程度では私を捕らえられません！」

親玉ウサギのスペルカードは逃げ回るウサギを模した曲線を描く弾幕だったが、スピードは大したことがなく、妖夢は簡単に躲し切った。

「さあ反撃ですー！」

——劍伎「桜花閃々」

妖夢が高速で移動し、親玉ウサギをすり抜けた。

「え？ 外した……のか？」

「貴方はすでに斬られています」

「なにを——ぐあああああつー！」

妖夢が通過した跡を無数の桜の花びらが舞い踊り、それが親玉ウサギを切り刻む。

「うむ……美しい」

「妖夢のスペルカードの半分くらいがただ斬ってるだけなんだが、あれは確かに良いよな」

感心して見物するレミリアと魔理沙。

「やられた〜」

親玉ウサギは倒れて起き上がってこない。

「おや？ もう降参ですか」

「ああ、降参だよ。これだけ働けば、もう十分に義理は果たしたさね」

「そうですか……」

妖夢は斬り足りないのか微妙に残念そうだ。

「私は因幡てゐ。迷いの竹林は私の縄張りでね。竹林に建つこの永遠亭の住人とは協力関係にあるのさ」

「協力関係ということとは、別にこの永遠亭とやらの主に忠誠を誓ってるわけではないのね？」

決着がついたとみて、レミリアたちも近寄ってきた。

「そういうことさね。まあお師匠様と呼んでいる方はいるけど、一応は対等な契約相

手つてとこころさ」

「そのへんの話はどうでもいいわ。負けを認めたなら黒幕のところに案内しなさい」

「それは無理だよ。私はこの回廊の前半で時間稼ぎを依頼されてるだけで、これより奥は担当外だから。どうなってるかも分からない」

「それは本当でしょうね？ ウソをついていたことがわかったら、幽々子様の夕食の食卓に加えますよ」

「じゆる」

「ひいっ！ 本当だつて！ 連中への義理は果たしたつて言ってるでしょ！」

刀で脅す妖夢と、どこまで本気かわからないが、ウサギ料理に期待する幽々子にてもが慌てて言う。

「時間稼ぎということは敵はこの先に踏み込まれたくないと考えているわけね、紫？」
「そういうことです。急いだほうが良さそうです、レミリア」

――

「うわ、もう侵入者が！ 扉の封印はまだ完了してないのに！ てゐのやつ、ちゃんと仕事したの!？」

永遠亭の回廊をひたすら進んでいくと、今までの妖怪ウサギとは違うタイプの少女が待っていた。瞳こそ紅いものの、頭のうさ耳以外はほぼ人間に見える。

「あいつなら十分に頑張ったぜ。ただ、私たちが強すぎるだけだ。なあ、レミリア？」

「そういうことね。お前も同じ目にあいたくなかったら素直になることだ」

「あ、あんたたち、まさかてゐを……」

「あいつがどうなったかは自分の目で確かめるといいぜ」

「ふふふ……悪趣味ね、魔理沙」

特に戦っていない二人が大きな態度でうさ耳少女に降伏勧告をするが、彼女はそれに震えて答えた。

「てゐ……悪戯ばかりでどうしようもないやつだったけど、あんたの仇はこの鈴仙・優曇華院・イナバがとるわ！」

「あの馬鹿二人を先に退治した方がいいんじゃないの？」

「あれも相手を怒らせて平常心を奪うというお嬢様たちの策……」

「そんなわけあるか」

悪ノリが過ぎるレミ魔理のフォローを咲夜がするが、霊夢にバツサリと切られた。

「私は斬りに行かなくてよいのでしょうか？ 幽々子様」

「あんまり大人数で囲んでも同士討ちになるからね。あの二人に任せておいていいんじゃないかしら。ねえ、紫？」

「そうですね。実力は申し分ないですからね。実力だけは……」

——生薬「国土無双の薬」

「師匠特製のこの薬を飲めば、地上の妖怪になど負けるはずがない！」

鈴仙が怪しげな液体をぐびりと飲むと、全身が緑色に発光し始めた。

「はあああああ——85、86、87、88%……！」

「ほう！　これは!?!」

「おおおおお!?!」

「レミリアに魔理沙！　何故あからさまなパワーアップを放置するのです!?!」

鈴仙が妖気を高めていくが、目を輝かせて見てるだけのレミ魔理に紫が怒りの声を上げる。

「様式美というものよ。ここで手を出すのは三流だ」

「そういうことだぜ。さすがレミリアはわかっているな」

「こ、こいつら……時間が無いというのに」

「——はあああああ!!!」

そうこうしている間に鈴仙のパワーアップは完了した。

「……わざわざ待つてくれるなんて、余裕のつもり？」

「無論そうだ。私のような絶対強者は常に余裕と美学を心に行動するのさ」

「うひょー、シビれる！ シビれるねー、レミリア！」

「その余裕が崩れる時が楽しみだ……わ！」

鈴仙がその瞳をカッと見開くと、レミリアたちに紅い衝撃波が飛来する。

「うおっと！ 眼から弾幕!？」

「そのようだな」

「目力だけで衝撃波を出すとか、凄いもんだ」

鈴仙が次々と紅い衝撃波を放つてくるが、二人は軽やかに避けて会話する余裕すらあった。

「つとお！ なかなかの威力の弾幕だな！ ちょっとウサギの妖怪つてのを見くびつていたぜ」

「ウサギはウサギでも、こいつは先程の因幡てみるとは異なる種族のようだがな」

「ん……どうということだ？」

「おそらくこいつは地上の妖怪ではなく——」

「そう、私は玉兔——月のウサギよ」

「へえ、月のウサギね。なるほど、満月の異変の元凶としちやあ納得だな」

「あいにく満月に干渉しているのは師匠の八意永琳よ。あの方は月の頭脳と謳われるほどの超越者。地上の妖怪が敵う相手ではないわ」

「なんだ。お前もただの下っ端か」

「その下っ端にあなたたちは倒されるのよ」

——幻朧月睨（ルナティックレッドアイズ）

鈴仙を中心に衝撃波の嵐が吹き荒れる。

「ちっ！」

「うおおおー！」

衝撃波は回廊に逃げ場がないほどの規模だったが、スピード自慢の二人だけあって、咄嗟に距離をとることでやり過ぎした。

「やってくれるな、今度はこちらの番だ。私の速さについてくれるかな？」

——彗星「ブレイジングスター」

魔理沙がマスタースパークを後方に放ち、それを推進力にして超高速で鈴仙に体当たりを仕掛ける。

「これが避けられるか!？」

まさしく彗星のごとき突進に鈴仙も微動だに出来ず直撃——かに見えたが、魔理沙は

そのまますり抜けていってしまった。

「なにっ!？」

あまりの速度で飛行していた魔理沙は急には止まれずに、かなり遠くまで飛んで行ってしまった。

「……」

「ふふふふ。相方は勝手にどこかに行っちゃったわよ?」

「誰が相方ですか! お嬢様の相方はこの十六夜咲夜です!」

「あんたややこしくなるから黙ってなさい!」

レミリアは無言で鈴仙に向かって、弾幕を放った。

しかし、それも先程のブレイジングスターと同じようにすり抜けてしまった。

「ふふふ、どこを狙っているのかしら?」

「……なるほど、先程の一撃はただの攻撃ではなかったわけか。衝撃波を躲したにも関わらず、感覚が狂わされている」

「へえ? よく気が付いたわね。けどそれだけじゃないわ。ここに来るまでの長い廊下が感覚を狂わせる下地になっていたのよ。あなたたちはもう私の術中よ」

「薬のチカラも借りているとはいえ、このレミリアに術をかけるとは大したものだ」

「あら、ずいぶん素直ね」

「ふふふふ、だがお前に対して狙いが定まらないなら、狙いをつけなければいいだけだ」

「え？ それはどういう——」

——核爆 「テイルトウエイト」

ズガアアアアアアアアアアアンツツツ!!!

「きゃあああああ——!!」

レミリアを中心に核融合爆発魔法が炸裂した。

鈴仙の衝撃波もかなりの広範囲に渡ったが、この魔法はその比ではなく、あまりに巨大なエネルギーが回廊全体を揺るがすほどだった。

「あ、あ、あんた殺す気!?!」

「いまのは核融合の爆発……無茶苦茶しますね。放射線は大丈夫なのですか?」

離れていてもかなりの余波を受けた霊夢が怒り心頭でレミリアに詰め寄る。

紫は使用された魔法の方が気がかりのようだった。

「安心しろ。スペルカード仕様だから殺傷力は抑えてある。魔法自体は異界で発動させ

ているからこの世界に放射線の影響もない」

「スペルカードってつけければいいわけでも——」

「それならいいのですが」

「——つて、いいの!?!」

箒に乗った魔理沙が戻ってきて、爆発に巻き込まれ倒れている鈴仙を見つけていた。

「すごい爆発だったな。レミリアの魔法か？　おいしいところを取られちゃったか」

「ふふふ、早い者勝ちさ」

「では進みましょう。あなたたちが遊んでいたのもあつて余計な時間を食いました」

「そう言うなよ、紫。あの鈴仙という玉兎はなかなかの実力だったぞ」

「私もそう思うぜ。幻想郷内でも結構いい線いくんじやないか？」

「この先に待っている術者はなかなかの実力などではありません。それこそ玉兎がただ

のウサギに見えるレベルでしょう」

「マジかよ」

「ふふふ………楽しみだな」

—————

その術者を見たとき、皆が先程の紫の言葉が決して大げさなものではないと感じた。回廊の最奥に佇む一人の女性。

上の服は右が赤で左が青、スカートは逆に右が青で左が赤という配色をしている。特に妖気を放っているわけではない。

だが、その姿を見ただけで全員が理解した。

彼女こそ鈴仙の言う師匠——八意永琳であり、満月を奪うという途方もない術を行使した存在。

「……」

屋敷内にも関わらず、上を見上げれば妖しく輝く巨大な満月。

一行が前まで来ると、満月を眺めていた永琳はゆっくりと振り向いた。

「遅かったわね。すでに全ての扉は封印した。何人たりとも姫を連れ出すことはできないわ」

紫と霊夢が前に出て永琳と対峙する。

「姫？ 姫なんて興味は無いわ」

「月よ、月。元に戻しなさい。すぐに返せば、ほどほどの退治で勘弁してあげる」

「朝まで待ちなさい。そうすれば元通りにするわ」

「待てないわね。私の勘が言ってるわ。あんたの言う通りにしたら碌なことがないって

ね」

「せっかちな娘ね」

「どうしたレミリア？ 黙ったままなんてらしくないぜ」

永琳との会話に参加せず周囲を眺めていたレミリアだが、ある一点を指差して口を開いた。

「そこだな。その扉から真なる月を感じるわ」

「え？」

「!？」

レミリアの言葉に霊夢は怪訝そうに、永琳は驚愕を浮かべた。

「その永琳とかいうのが呑気にしゃべっているのは時間稼ぎ。つまり、封印とやらはまだ終わっていない」

その言葉を即座に理解した紫は、すぐさまレミリアの示した扉に向かう。

「行かせません！」

扉をくぐろうとする紫たちに、輝く弓矢を構える永琳。

「行かせるさ」

ゴウッ！

レミリアが腕から紅い巨爪を繰り出して、永琳を切り裂く。

「くっ！」

弓で紅い爪を防ぐ永琳。

扉をくぐる紫と一瞬、視線が交差したレミリアはニヤリと笑いそれを見送った。

「吸血鬼ごときが——！」

怒りを露わにする永琳だが扉の方を注視しているため、レミリアには攻撃をしない。

「私もいるぜ！」

——星符「ドラゴンメテオ」

「ぐあああっ！」

魔理沙の空対地マスタースパークが炸裂する。

まともに食らった永琳は紫たちへ追撃が出来ない。

その間に紫、霊夢、幽々子、妖夢の四人は扉の奥に進んでいった。

「む……扉が閉まるか。ギリギリだったようだな」

「そうですね、お嬢様」

「扉の方に行かなくてよかったの？ 魔理沙」

「ここは任せて先に行けつてのも悪くないポジションだ。あつちは霊夢たちに任せる

「や」

この場に残ったレミリア、咲夜、アリス、魔理沙が永琳と向かい合う。

彼女は誰が見ても明らかかなほど憤怒していた。

「地上の妖怪や魔法使い風情がやってくれたわね。姫を危険にさらす大罪……生きて帰れるとは思わぬことです！」

「おいおい、私のドラゴンメテオが効いてないのかよ。どうなってるんだ」

「ふふふふ、そうこなくてはな」

激怒する月の頭脳がいよいよレミリアたちにその矛先を向ける。

第十五話 『永夜異変（底編）』

扉が完全に封印されたことで、周囲の景色も変わっていった。

先程までは室内にいたはずだが、周囲は広大な星空になっている。

彼方には地球を模した天体が、対面には巨大な満月が浮かぶ。

レミリアたちは地球を背に、永琳は月を背に対峙する。

「見たことのない景色になったぜ。ここは宇宙……？」

「宇宙を模した空間ね。地上とあの偽の月の間にある狭間の世界ってところか」

「凄いことをしますね。私も空間を操りますが、ここまでのことは出来ません」

「確かにすごけれど、それでもあれは偽物の月。懲らしめて本物を取り返すわよ。戦闘

準備よ、私の人形たち——！」

アリスが6体の剣を持った人形——リトルレギオンを呼び出す。

「不埒者が四人も姫のところへ行ってしまった。こいつらをすぐに排除して後を追わな

いと……」

「余裕ね。私のレギオンを気にもしないなんて」

「こっちは眼中にないってか？ ずいぶんと舐められたもんだな」

「……」

「だんまりか。なら私たちの実力を思い知らせて——」

魔理沙がミニ八卦炉を向けて魔法を放とうとするが、それより早く永琳は光の矢を放った。

「え？」

いつの間にか発射された矢は魔理沙の眉間目掛け高速で飛来する。

矢が到達するまで一瞬の出来事だが、彼女はまるで走馬灯のようにその動きを感じていた。

あっけなく魔理沙が命を失う寸前で、矢はナイフによって切り払われた。

バシユツ！

「集中しなさい。いまので一回死んでいたわよ」

「——っ！ すまん。助かったぜ、咲夜」

「……」

命を拾った魔理沙、矢を弾いた咲夜、その二人を永琳はまるで路傍の石でも見るように眺めていた。

——マジかよ、こいつ。確かに弾幕ごっこは運が悪いと死者も出る。けれど、いきなり殺しに来るのは普通じゃないぜ。

今までいくつもの異変に関わってきた霧雨魔理沙。その中で命を落とす可能性もあつただろう。だが、ここまで無造作に殺されかけたのは今回が初めてだった。

——ちよつと甘く見てたかな。これが月の民か。地上人のことなんざ何とも思っていないってか。

「気に入らないな……」

明確な「死」を感じた魔理沙だが、それで委縮することはなかった。

それどころか逆に、自分たちを見下す月の民に一泡吹かせるといふ気持ちが燃え上がった。

「気合い入ったぜ！ 目に物見せてやる、月の頭脳さんよ！」

「……決戦用の人形を持ってきてよかったわ」

「ナイスフオローよ、咲夜。引き続き頼むわね」

「お任せください、お嬢様」

「行きなさい！」

アリスがレギオンを差し向ける。

「たかが人形に何ができるのです」

永琳が光の矢を放つと、一本だったそれは無数の矢に分裂して降り注いだ。次々と人

形は粉碎される。

相手に触れることもなく全滅したレギオンだが、アリスはその前に次の人形を繰り出していた。

「レミングスパレード！」

先程の3倍もの数の人形が永琳に突撃する。

「無駄です」

再び矢の雨で人形たちを撃墜すると——貫かれた人形が爆発した。

その威力は大きく、距離のあった永琳にも爆風は及んでいた。

「いまだ——マスタースパーク！」

隙ありと見た魔理沙はいきなり切り札である極大レーザーを放った。

先程、殺されかけたことでやはり頭に来ているようだ。

タイミング的に回避は難しく、魔理沙は命中を確信した。

永琳は慌てず掌を上に向けると、こぶし大の光球を生み出した。

軽く手を前に振ると、ゆっくりと光球が進んでいく。

ズオッ！

光球がマスタースパークに飲み込まれた——かに見えたが、それは消えていなかった。

いや、消えないどころか、マスタースパークをその場に押しとどめている。

「な!? 私マスタースパークが!」

「うそでしょ!」

自慢の魔砲が小さな光球と直角という現実には、術者とそれを食らったことがある人形使いが驚きの声を上げる。

「ぐ……ぐぐぐぐ——!」

しばらく拮抗していたが、ついにその均衡が崩れる。光球が徐々にマスタースパークを押しつけながら、魔理沙の方に向かい始めた。

「ふ、ふざけるな! 私の魔砲は妖怪も人間も吹き飛ばす! それが……!」

光球がとうとうマスタースパークの大半を消し去って、ゆつくりと魔理沙に迫る。

「くっ——!」

ドオン!

レミアアが横から魔力弾をぶつける。

軌道を逸らされた光球は彼方へと飛んで行った。

——さすがは月の頭脳。なんなのあれ、デスポール? 私が永琳の情報を知っているのに対して、向こうはこちらが何をできるか知らない。その点を活かした奇襲しかないわね。

「……レミリア」

「いまので分かったわね、魔理沙、アリス、咲夜。あの月の頭脳とやらは一人で挑むには荷が重い相手よ」

「……ああ、わかったぜ。私はまだまだ甘く見ていたようだ」

悔し気に唇を噛み、手を握り締める魔理沙だが、目から戦意は消えていなかった。

「あの怪物の魔力は異常よ。私以外だと一発食らっただけでアウトね。距離をとって攻めなさい」

「了解だ」

「ええ、わかったわ」

「承知いたしました、お嬢様」

「では、いくぞー！」

レミリアが高速で飛翔し、突撃する。

対して永琳は上空に向かって光の矢を放つ。

一本の矢は分裂して、無数の矢の雨となる。

それはまるで天が与える罰かのようにレミリアに襲い掛かった。

「！」

——食らわなくてもわかるわ。この矢は吸血鬼の私にも十分にダメージになる！
必死に回避しながら、永琳との距離を詰めるレミリア。

——覚神「神代の記憶」

矢の雨が降り注ぐ中、永琳がレーザーによる攻撃も追加する。

このレーザーも一本が二本、二本が四本に拡散していく。

あまりにも広範囲に渡るレーザーを前に、レミリアはついに被弾してしまった。

「ぐあつー！」

動きが止まったことで、矢の雨にも身体を貫かれる。

そこで一旦、永琳への接近を諦めて距離をとった。

「ちいつ……い！」

レミリアが全身から血を流しながら、永琳を睨みつける。

「お嬢様！」

「おい、大丈夫かよ!？」

「問題ない。この程度ならすぐに元通りよ」

その言葉に嘘はなく、レミリアの傷は音を立てながら目に見えてわかる速度で治っていく。

「……さすがにお前も化け物だな」

「これじゃあ近づけないわね。どうする？ レミリア」

「やることは変わらない。私が同じように突っ込むから、お前らもその隙に攻めろ」

「それでいいの？」

「ああ。あいつの魔力も無尽蔵じゃない。間断なく攻めることに勝機がある」

「……わかったわ」

「気をつけろよ、レミリア。いくらお前が頑丈でも限度がある」

「誰に言っている。私は不死身と名高い吸血鬼の女王だぞ」

そう言うレミリアは咲夜にチラリと視線をやった。

それを受けてハッとされた彼女はこくりと頷いた。

再び、光矢の雨の中を突き進んでいくレミリア。

術も用いて撃墜しようとする永琳だが、二方向からレーザーが飛来した。

「ちっ！」

魔理沙とアリス（の人形）によるレーザーを結界で防いだが、瞬く間にレミリアが近づいてくる。

どちらを優先するか瞬時に決断した永琳は、結界を維持しながらレミリアを滅すべ

く、術を行使する。

「いい加減に消えなさい、吸血鬼」

——神符「天人の系譜」

先程のものを超える規模のレーザーが照射される。

それは延々と増え続け、無限に広がるが如き勢いだった。

その間も魔理沙とアリスの攻撃は結界を打ち続けている。

純粹な魔力では自身に及ばないとはいえ、火力はなかなかのもので、このままでは突

破されそうだった。

ならばその前に吸血鬼を墮とす、と永琳の攻撃は激しさを増す。

無謀にも正面からレーザーの雨を突破しようとするレミリアはいくつもの直撃を受ける。

「ぬっ——ぐうああああああ！」

決死の突撃を続けるが、永琳に到達するまでに無数のレーザーに覆いつくされてしまった。

「ようやく仕留めたかしら……？」

光に飲み込まれたレミリアの身体は靄となり、やがて消えていった。

「レミリア!？」

「余所見をしてる場合じゃないわ、魔理沙！　また殺されかけるわよ！」
「くっ……！」

魔理沙は切り替えて再び永琳へと攻撃を仕掛ける。

焦る魔理沙とは対照的に、意外にも咲夜は冷静だった。

彼女は永琳たちから離れたところに立ち、自らの服に手を当てて能力を行使した。

「時は加速する」

咲夜の服の中で、何かが動いたとき——彼女の姿は永琳の傍にあった。

「いつの間にな！」

「ひゃっほおおおおおおお！」

「なっ——ぐああああ！」

永琳の驚きは二度。

一度目は気が付いたら人間のメイドがすぐ近くにいたこと。

二度目は倒したと思つた吸血鬼が、メイドの服の中から飛び出してきたこと。

奇襲を仕掛けたレミリアはグングニルを投擲する。

それは魔理沙たちの砲撃で崩壊寸前だった結界を貫き、見事に永琳の右腕を切断した。

「おお、レミリア！ 無事だったか！」

「なんであれで平気なのよ」

「これが月の血か……。神の系譜とはいえ、地上の民と同じように血は赤いのね」
もぎ取った腕の血を味見するレミリア。

「……!? あれだけ打ち据えた吸血鬼が完全に回復している?」

——上位の吸血鬼は自身の魔力を込めた棺桶や邪な^{アンホーリーソイル}土で休めば一晩で復活する
というが……。いくら何でも速すぎる。

「……舐めた血から記憶を探ってみたが、あいつはただの月の民じゃない」

「どういうことだ?」

「おそらく噂に聞く“蓬莱人”というやつよ」

「蓬莱人? なんだそりゃ」

「飲むと不死になる禁忌の薬を飲んだ者たちのことよ」

「不死……。つまりあいつは死なないのか?」

「普通の手段ではまず無理ね」

「ますます反則だろ」

「……レミリア。その不死というのはどの程度のものなの？」

「文字通りだ。仮に肉体が消滅しても魂を核に復活する」

「……そう。なら、私の切り札を使うわ」

「ほう？」

「あまりにも威力があるから、人形たちの前面には出ないようにして。巻き込まれるわよ」

「オーケーだ」

「アリスの切り札か、何だろうな」

「私は同じように全体のフォローをします」

レミリアたちが作戦を立てている間に、永琳は自身に術をかけて右腕を再生させていた。

「せっかくお嬢様が奪った片腕が、治ってしまいましたね」

「まあいい。与えたダメージ、減らした魔力に意味はある。少しずつ追い詰めていけばいいだけだ」

「見せてくれよ、アリス。その切り札ってのを」

「ええ、任せて」

その人形は変わっていた。

大きさはアリスの他の人形と同じだが、見た目は可愛らしい少女ではなく、黒い燕尾服を着けた道化師のような姿、その顔には笑みを浮かべた仮面があった。

不気味な道化師は爆発する人形軍団の中にひっそりと紛れていた。

人形の爆発は並の妖怪には脅威になるが、永琳にとつてはさほど警戒に値しない。それよりは自身の腕をもぎ取った吸血鬼の方を注視して、人形たちは適当な距離で迎撃するだけになっていた。

その中で道化師人形も矢で貫かれた。

『KILL YOU……』

宇宙を覆うほどの閃光がほとばしると、永琳の肉体は消滅した。

――

ありえないほどの巨大な爆発が起こり、その側にいた永琳は一溜まりもなかった。

「……な……なんだよ、あれ？」

あまりの驚愕に魔理沙は呆然としていた。

何が起こるか知っていたアリスは淡々という。

「私の切り札。死神人形よ」

「いや、下手すれば私たちもチリになる威力だぞ?!」

「威力は極大だけど、規模は抑えるように調整しているから大丈夫よ」

「なあ、アリス。私は魔界で聞いたことがあるんだが、あれはまさか……」

「そう。魔界でのみ採れる、魔力を無尽蔵に吸収する黒魔晶という石。それを加工した

超爆弾——『黒の核晶（コア）』よ」

「やはりか。とんでもないものを持ち出してきたな」

——黒の核晶は込める魔力によって威力が変わる。あの人形に仕込めるサイズでも核兵器すら凌駕できる。その気になれば日本列島くらい吹き飛ばす。アリスは怒らせない方が良さそうだ……。

「なあ……。いくら月の民でも、あなつちやあ流石に終わり——」

そのとき、魔理沙はある地点で何かが発光しているのを見つけた。

「おい、あれは……」

その光は段々と人間の形を成していき、最後には一人の女性——八意永琳の姿となつ

た。

「うおお!? 復活しやがった!」

「本当に不死身なのね」

「だから言っただろう。あれが蓬莱人だ」

「はあつ、はあつ……! やつてくれますね!」

「一発目はいいが、次からは向こうも警戒している。そうそう死神人形を近寄らせてはくれんぞ」

「ええ、それも想定通りよ」

「……そうか、なるほど。賢い手を考える」

「お褒めに預かり恐悦至極」

レミリアの言う通り、永琳は死神人形を警戒して、それ以降はすべての人形を遠距離で迎撃し出した。

「! 二度目はありません! はああああ!」

近寄る人形軍団の中に死神人形を見つけた永琳は巨大な光球を投げつけて、一網打尽

にした。

「……爆発が小さい？ 不発だったの？」

訝しむ永琳だが、再び人形軍団が迫る。その中には当然のように死神人形もいる。その数は3体。

「さっ……む、無駄です！」

永琳の放った光球が人形たちを飲み込む。爆発が巻き起こるが、それは普通の爆弾人形の規模だった。

「……また小規模の爆発」

「隙あり！」

「がふっ!？」

死神人形に気を取られていた永琳に別方向から迫ったレミリアのグングニルが突き刺さる。

「い、の……!？」

反撃に術を行使しようとする永琳だが、すぐにレミリアは反転して遠ざかっていった。

そして入れ替わるように死神を擁する人形たちがやってくる。

「こ、これが狙いですか……！ 私を死神人形への疑心暗鬼に……!？」

いまだかつて一瞬で肉体を吹き飛ばされた経験などなかった永琳。

たとえ死なないとわかっていても、先程の一発は永琳にトラウマを植え付けていた。

——あの大爆発を起こす人形はさっきの一体だけ？ いや、そんな保証はない。それに普通の見た目でも大爆発を起こすやつがいるかもしれない。やはり全ての人形を近づかせずに粉碎しなければ……！

限りなく不滅に近い蓬莱人だが、短期的に見ればその復活には限界がある。滅びはしなくとも、無力化することは可能。それを永琳は誰よりもわかっていた。

——最も警戒するのは人形使いの爆弾。そして個のチカラが最も高い吸血鬼。こいつらを要注意とし、それ以外の連中——特に人間の魔法使いは軽視して問題ない。

永琳が冷静に戦力分析をした結果、魔理沙への注意を疎かにした。

その瞬間——

「ほらよっ！ お届け物だぜ！」

『K I L L Y O U ……』

「!?!」

本日、二度目の黒の核晶が炸裂した。

——

一度目は人形軍団の中に紛れて爆発。

二度目は人間の魔法使いが配達して爆発。

三度目はいつの間にか傍に置かれていて爆発。(おそらくメイドの仕業)

一日に三発の黒の核晶を受けた存在など、魔界を含めて初めてかもしれない。

流石の永琳もこれにより大幅に消耗をさせられていた。

「はあつ、はあつ、はあつ……！」

消耗も問題だが、人間の魔法使いとメイドの動きにも注意を払わないといけないのが厄介だった。

正面からは変わらず吸血鬼が攻めてくるが、他の三人を放置することは死神人形への警戒を解くということ。それは出来なかった。

「そろそろ心が折れそうになっているんじゃない？ エーりん？」

「私の心が折れる時は姫様がいなくなった時のみ！」

だが、永琳は焦っていた。心こそ折れてはいないが、自分がこの連中に手こずっているとこの事実が彼女から余裕を失わせていた。

永琳の主である姫は強い。そこらの地上の民になど負けはしない。だが、目の前の四人を見ていると、姫が不覚を取る可能性も考えずにはいられなかった。そのことが思考

を鈍らせ、動きも精彩を欠くという悪循環に陥っていた。
精神を攻める。

これは再生力の高い妖怪に有効な戦法だが、不死の蓬莱人にも効果的だった。

再びレミリアが高速で突撃を仕掛ける。

対して永琳は大秘術を行使する。

この一撃で決めると決断したのか、永琳からは今まで以上に強大な魔力が感じられる。

それは天に刃向かう愚か者を滅する光の裁き。

いかなレミリアとてまともに食らえば、消滅も覚悟しなければならぬほどの魔力が込められていた。

しかし、吸血鬼は止まらずに一直線に月の頭脳に迫る。

レミリアの手からは魔力が発せられている。弾幕で突破しようというのだろうか。

自分の大秘術をそれで打ち破れるはずもないと、冷笑した永琳は天の裁きを解き放つた。

「——天網蜘蛛捕蝶の法！」

逃れようもない光の網がレミリアに襲い掛かる。

速度を落とさず高速飛行していた彼女に回避する術はなかった——が、レミリアが溜めていた魔力を自身にかざすと、輝く光の壁があらわれた。

「石凝姥命いしりよめのみことの八咫の鏡——!?!」

光の壁が永琳の秘術をはね返した。

「覚えておくのね、これが魔法マホカンタ反射だ……!」

「——ぐっああああああ!」

永琳が反射された大秘術に飲み込まれた。

強大過ぎる魔力が、それを放った術者に襲い掛かる。

「これで——終わりよっ!」

「がっ!」

満を持してレミリアのツメが腹部に突き刺さり、エナジードレインが存在のすべてを

吸収にかかると。

「おおおおお!」

「ぎいっ——ああああああああ!!!」

幻想郷にて初めて全力で行使された紅い悪魔のエナジードレイン。

永琳の悲鳴が段々と小さくなっていく。

「——あああああああ………」

「ふうふう……何とか勝てたか」

永琳が完全に沈黙したことを見届けたレミリアはエナジードレインをやめて、彼女を解放した。

「……あれだけ消耗させても吸収できた量が半端じゃない。万全の状態だと明らかに許容量オーバーね。ふふふ、私もまだまだ鍛えないと。さて——咲夜！」

「はっ、お嬢様」

「こいつが気絶している間に拘束しておきなさい」

「かしこまりました」

咲夜が永琳を無力化していると、魔理沙とアリスもやってきた。

「やったんだなレミリア！」

「うむ。みんなの勝利というやつだ。誰かが欠けてもこの結果はなかっただろう」

「なんだよ、なんだよ。ずいぶん素直じゃないか」

「……それほどの相手だったからね。そんな気分にもなるさ」

「正直、大赤字だわ」

「お前、無茶苦茶するな。黒の核晶なんて一日に何度も使うものじゃないだろうに」

「その通りよ……。ああ、これが知られたらお母さんに怒られる」

ゴゴ……！

「おい、この変な宇宙が歪んでいつてるぞ」

「術者が倒れたことで狭間の世界が崩壊していくか。脱出して霊夢たちと合流するぞ」

「オーケーだ」

序盤は落ち着き払って隙が無かった永琳だが、戦いが長引くにつれて焦りが生まれていった。

それはすべて自らの存在意義と決めた主——姫を想うからこそ。

だが、それにより先の行動が読みやすくなり、レミリアたちは勝利を手繰り寄せるところが出来た。

それが彼女の真のチカラ——運命を操る程度の能力だったのか、それは本人にしか分からないことだった。

第十六話 『永夜異変（エピローグ）』

『神をも恐れぬ永夜異変！ 犯人はまたあの吸血鬼一派！』

この幻想郷の妖怪で知らぬ者なき大異変——永夜異変。

その名の通り、夜が明けず、月の進行が止まるという異常事態だった。

それもただの月夜ではなく、満月の夜のことだった。

月の影響が大きい妖怪たちはこの異常事態に震撼した。

いったい誰が、何の目的で起こした異変なのか。

この私、射命丸文は地道な聞き込みと推理によって、ついに異変の主を突き止めた。

なぜ誰も気が付かなかったのか？ 満月の夜が続くことは、かの種族の天下を意味する

というのに。

そう、吸血鬼。

元凶はまたしてもあのお騒がせ幼女、レミリア・スカーレットである。

私は果敢にも悪の巣窟、紅魔館に乗り込んだ。

立ちふさがる門番や配下の妖精メイドを蹴散らし、逃亡を図るメイド長——十六夜咲

夜を追い詰めることに成功！

彼女に夜を止めたのか問いたただしたところ、「そうだけど」と自供した。

私の圧倒的な推理を前に観念するしかなかったようだ。

過去にもレミリアは自分に有利な記事を捏造しろ、さもなければ焼き鳥にすると脅してきたことがある。

もちろん、清く正しい新聞記者たる私はそんな脅迫に屈しなかった。

あのどうしようもないお子様吸血鬼は

※ ここで記事が終わっている。なにかの血が飛び散っているようだ。

――

「ふむ、なかなか美味いわね。これが八目鰻か」

「そうでしょう、吸血鬼のお姉さん。屋台で焼き鳥なんてもう古いですよ」

レミリアはミスティア・ローレライ（夜雀）の屋台で酒を飲んでいた。異変の時は一悶着あつた二人だが、解決した後は普通の客と店主である。

「ところでその手に持つてる紙はなんなの？」

「書きかけの新聞よ。いるかしら？　ちよつと、鳥の血が付いちやつてるけど」

「新聞紙はよく油を吸うから重宝してるけど、血がついてるのはちよつとね」

「なら捨てとくわ。……そういえば、店主は今日の宴会に来るのかしら？」

「ああ、迷いの竹林でやるやつ？ 行くつもりだよ。こんな機会でもない竹林にある屋敷なんて行けないからね」

「そう。もちろん私も行くわ。鳥料理が出ないといいわね」

「竹林だと何が名物なんだろう。ウサギ料理とか？」

「それが一番出ないと思うぞ」

———

夜が明けない大異変が解決してから一か月後。

本物の満月の光が照らす中、迷いの竹林にある永遠亭では宴会が開かれていた。

月の民——永琳が満月を偽物の月とすり替えたとき、夜の間異変を解決すべく、夜を長引かせていたのだが、大多数のものはその事実を知らない。

その為、世間では夜の明けなかった点だけに注目して、永夜異変の名で記憶に残っていた。

永遠亭が宴会を開いた名目も異変を起こしたお詫びではなく、幻想郷の仲間入りをお祝いするというものだった。

紅魔王従は永遠亭の入り口で八雲紫とばったりと会っていた。

「あら、紫」

「奇遇ですね、二人とも」

「霊夢は一緒ではないのですか？」

「誘ったのですけどね。異変も終わったし、妖怪と一緒に行くなんてダメと断られました」

「妙に固いですね、霊夢」

「普段の妖怪神社を見てると忘れるけど、巫女としてはそれが普通なんじゃないの？」

「あの異変の最後にレミリアたちが合流してきたときは、本当に驚きました」

「あら、私が勝つとは思ってなかったの？ 紫」

「あなたの実力は認めています、それ以上に月の民の強さも知っています。正直、足止めが精一杯と考えていました。まさか倒して連れてくるなんて」

「ふふふふ、もつと褒めていいのよ」

「お嬢様が月人にとどめの一撃を与えたあの雄姿。この咲夜のお嬢様メモリー398章にしつかりと残してあります」

「ねえそれって例えよね？ 本当に映像か何か？ 398章分もあるわけじゃないわよね

「？」

「……」

「ちよつと、なんで無言なの!？」

——相変わらず、このお嬢様の平常時はカリスマがオフ……。従者に揶揄われる姿だけ見れば、とてもそれほどの妖だと思えませんね。

「永遠亭へようこそ」

レミリアたちを出迎えたのは長い黒髪の少女。

手が見えないほど長い袖、スカートも地面に広がり、足も隠れていた。

腋も足も丸出しの某巫女も見習ってほしい慎重深さである。

「よく来てくれたわね、歓迎するわ」

「姫自ら出迎えとは光栄だな」

彼女こそ永琳の主にして月の姫——蓬莱山輝夜。

月の使者は月の都から幻想郷への移動に満月を利用する。

八意永琳は月に帰りたくない輝夜を使者から守るため、偽の月と本物の月をすり替える異変を起こしたのだ。

「さあ、こつちよ。会場までの案内は鈴仙がやってくれるわ」

「ようこそ、お客様！ 会場はこちら——げっ!？」

鈴仙が案内にやってくるが、それがレミアたちと気が付いて顔を引きつらせる。

「おやおや、永遠亭では客にこんな態度で対応するよう教えているのか？」

「鈴仙、永琳に報告しておくから」

「師匠に!? 待つて、待つてください、姫様！ 謝りますから！」

「謝るのは失礼な態度をとったお客様に対してでしょう。私に謝ってどうするの」

「う……も、申し訳ありません。お客様」

「私は寛大だから許すさ。ゆかりんは激怒しているがな」

「してませんよ。私を何だと思っているのですか。あと、呼び方」

「私は別のお客様の出迎えをするから、きちんと案内しなさい」

「わ、わかりました」

まだぎこちない鈴仙に案内されて会場に着いた一行に、因幡てるが飲み物を渡してくれた。彼女は配下の妖怪ウサギと一緒に配膳を行っているようだ。

「どうぞ、永遠亭特製のお酒だよ」

「ありがとう」

「……」

「おや、鈴仙。まだ、ギクシヤクしてるのかい？」

「別に……そんなことないわよ」

「ちよつと手ひどくやられてからつて、あまり根に持つのはよくないよ」

「ふん……！」

「まあそう言うな。こいつはお前が私たちにやられたと思つて、友のために本気で怒つてくれたぞで」

「なっ!？」

「へえ〜？ なになに、鈴仙。心配してくれてたの？」

「う、うるさい！」

赤くなる鈴仙をニヤニヤと揶揄いながらも、どこか嬉しそうなウサギの親玉。

「う〜い、少し酔っちゃつたぜ……おや、お前たちか」

「あら、先日振りね」

「魔理沙とアリスか。二人とも早いわね」

「ちよつどあの異変のときの五人が揃いましたね」

「あとの三人だと霊夢も先に始めてるよ。冥界の主従は知らんがな」

「幽々子と妖夢はゆつくり来るでしょうね」

「しかし、宴会が始まる前に飲み過ぎじゃない？ 特に魔理沙」

「私たちは予定が詰まっています……お宝さがしとか」

「ちよつと、あんたまさか永遠亭の……」

「いやいや、なんでもないぜ」

——完全に狙つてるでしょ。この屋敷のお宝とか古い魔道具とかを。

「じゃあもう行くぜ。輝夜に秘宝をどこにしまっているか聞かないといけないからな」

魔理沙とアリスは泥棒をしに輝夜を探しにふらふらと行つてしまった。

「紅魔館の物は盗られてないかしら？ 咲夜」

「パチュリー様の本以外は大丈夫です」

「なら問題ないわね」

「いやいや、あなたの親友のものでしょう。それも守つてあげなさいよ」

「あれは魔理沙とパチエの勝負だから手を出すのは無粋よ」

「そういうものですか……」

「ようこそ、永遠亭へ」

レミリアたちを出迎えに永琳もやつて来た。

あの夜、永琳は月から幻想郷への移動を妨害する為、異変を起こした。

だが元々、幻想郷は博麗大結界に守られていて、月からの追手が入ってこれない。自分の起こした異変が意味のないものだったと理解した永琳は月を還し、幻想郷側と和解したのである。

「案内に不手際はなかったかしら？」

「ん？……ふっふっふ」

レミリアは会場の入口付近で来客の相手をしている鈴仙をチラリと見て言った。

「ああ。特に問題はなかったな」

「ふふ……それなら良かったわ。私も弟子をお仕置きしなくて済みそうね」

「今日はずいぶんと穏やかですね。そちらが素なのでしょいか」

「どちらも本当の私よ。今は懸念が解消されて気が抜けていることは否定できないけど」

「あのときは盛り上がったな。激しく熱い夜だった」

「いや、盛り上がったとかいうレベルじゃないんだけど。あなたの感覚はどうなってるの」

「幻想郷ではこれが普通さ」

「いえ、お嬢様はかなり変わっている方かと」

「……まあ、それはともかく。私はあなたたちと（嫌というほど）濃い時間を過ごしたけ

ど、姫様とはあまり話せてないでしょう。彼女、楽しみにしていたわよ」
「ああ、私もだ」

「変わった酒だな。美味しいが、どこか物足りないというか」

「それが月の味よ。雑味が完全にないから、そんな味になるのよ」

「月か……。やはりこの酒のようなどころなのか？」

「ええ、そうよ。穢れなき月の都。だからこそ退屈なところよ」

「お前はあまり好きではないようだが、私も一度くらい行ってみようと思っている」

「言つたでしょ、月の都は穢れを嫌うのよ。穢れの塊みたいな吸血鬼がそうそう入れる場所じゃないわ」

「私を病原菌みたいに言うな」

「昔、地上の妖怪軍団が月の都を攻めたけど、完膚なきまでに返り討ちにあつたらしいわよ」

「ほお、そうなのか」

——まあ、知ってるんだけどね。ほら、紫がその話には触れるなって嫌そうな顔をしているわ。

「だいたい、どうやって月に行くつもり？」

「我が紅魔館には頼れる魔女がいてな。そいつに任せれば大丈夫さ」

「月に行くですか……また、パチュリー様にお仕置きされますよ、お嬢様」

「んん……ごほん。ま、まあパチエを説得する方法はよく考えるわ、うん」

「……その魔女さんは苦勞してそうね」

「とにかく近いうちに乗り込んでやるわよ」

「月の都は技術が地上より進んでるだけでなく、怖い番人がいるわよ」

「ほほう、それは楽しみだ。余計燃えるじゃないか」

「たしかにあなたも強いみたいだけど。まさかあの八意永琳ともあろう者が不覺を取るなんて」

「ふっふっふ……まあな」

「いったいどうやったの？ 永琳はあのと時の話になると口数が少なくなるから、詳細を知らないのよね」

「一つ言うなら、あいつには道化師の人形でもプレゼントしてやれば喜ぶだろうということだ」

「はあ……？」

「お前の方はどうだったんだ？ 輝夜」

「そりやもう、物の見事にフルボッコにされたわ。いくら私が月人って言ってもあれは

過剰戦力じゃない？」

「うゝむ……まあ、そうかもな」

——霊夢、紫、妖夢（殺し屋）、幽々子の四人か。なるほど、これはダメだな。

宴もたけなわになっていると、輝夜が唐突に妙なことを言い出した。

「余興として肝試しをやってみない？」

「やりません……！」

妖夢は考えることもなく却下した。

「ちよつと、内容も聞かないでひどいじゃない！」

「わざわざ怖いところに行く人の気がしれません」

「妖夢は怖い物が苦手なのよね。私はやってもいいんだけど」

「ええ……」

思わぬ妖夢の反応に困った輝夜がレミリアにこそそと相談する。

「ちよつと、ちよつと。あの半人半霊が話に聞いていたよりチキンなんだけど。容赦ない殺し屋じゃなかったの？」

「刀を抜くと殺し屋モードになるから、無理やり連れて行けばいいんじゃない？」

「二重人格ってやつね。やっぱり幻想郷には面白いやつが多いわね」

「まあ二重人格は言い過ぎかもしれないけど」

「肝試しねえ。怖れるもの無き、この霧雨魔理沙にはあんまり向かないな」

お宝探しを切り上げたのか、魔理沙とアリスも話を聞きに来た。

「安心なさい。そこでは本当の恐怖が味わえるわよ」

「へえ……。そう言われると興味が出てくるな。行ってみようぜ、アリス」

「まあいいけど」

「私は行かな——」

「面白そうですね。私と霊夢も参加しますわ」

「ちよつと、紫！ なに勝手なことを言ってるのよ！」

興味なさげにひたすら酒と食事を流し込んでいた霊夢が文句を言う。

「この流れで一人だけ行かないなんてダメですわ。ねえ、レミリア？」

「うむ、まったくくだな。そんなだから博麗神社には賽銭が入らないんだ」

「うるさいわよ。賽銭とこれに何の関係があるのよ」

「お嬢様が行かれるのであれば、もちろん私に否はありません」

満月の下、草木も眠る丑三つ時。

物見遊山で出かける8人。

待ち受けるは蓬萊の人の形。

肝を試されるのは果たしてどちらか――。

第十七話 『花の異変』

「私の扱い悪くありませんか？」

烏天狗がレミリアに何か言い始めた。

「悪くないわよ」

「いや、悪い！　悪いですね！　この前だって新聞を執筆している最中に襲い掛かってきて——私の傑作はどこにやったんですか!？」

「夜雀にもゴミ扱いされたから燃やしておいたぞ」

「人の新聞に何てことしてくれるんですか！　言論弾圧は許されませんよ！」

二人がいるのは人里の団子屋。

余計な騒ぎを起こさないため、レミリアは羽を隠して人間のふりをしている。

文の方は人里にもそれなりに馴染んでいるので烏天狗の姿そのままだった。

「ふざけたことを書いているから、お灸を据えたただけだ。お前ももう少し節度を持ってだな——」

「チカラに屈して書かされた記事に何の価値がありません。私は常に心のまま書きたいものを書くのです！」

「その心意気には同意するけどね」

「そうでしよう。流石に分かっていらっしやる」

「まあ、ムカつく記事を見つけたら燃やすけど」

「ひどい！ 私の心意気を買ってくれたはずでは!？」

「それはそれ、これはこれよ」

レミ文がギャーギャーと団子屋で騒いでいると、暴力巫女の声が聞こえた。

「見つけたわ、妖怪！ さあ、さっさと私に退治されなさい！」

「え、なんですか？」

「なんで妖怪退治モードになってるの？ 霊夢」

「決まってるでしょ、異変解決よ。幻想郷中に四季すべての花が咲き誇る異変が起こっ

ているのよ」

「ほほお、花の異変!？ これは取材しなければ！」

「だからこっちはいつも通り、目についた妖怪を退治していつてるのよ」

——ああ、もうそんな時期か。六十年目の東京裁判、いや東方裁判か。

「こうしてはいられません！ では皆さん、ごきげんよう！」

文は目にも止まらぬ速さで飛び去ってしまった。

「こらあつ！ 退治されてからいきなさい！」

颯爽と離脱した文に怒りをぶつける霊夢だが、追い付けないと考えたのか、レミリアの方をキッと睨みつけてきた。

「あんたは逃がさないわよ。さあ、表に出なさい！」

「……（もぐもぐ）」

「……？　ちよつと、食べてないで早くしなさいよ」

「いやよ。見てわかるでしょ、お団子を食べるのに忙しいのよ」

「店の中にいられたら退治できないでしょ！　ほら、さつさと出・な・さ・い！」

「いやああああ！　博麗の巫女が無理矢理——っ！」

「ちよつ、あんた!？」

レミリアが悲鳴を上げていると、団子屋の店主が奥から飛び出してきた。

「霊夢さん！　そんな小さい子に何をしてるんですか!？」

「いや、だってこいつは……」

「里の自警団に通報しますよ。それにもし店で暴れて備品を壊したら、その分を神社に請求させてもらいますからね」

「!？」

神社に請求と聞いて戦慄する霊夢を、店主の後ろに隠れながらレミリアがニヤニヤ見ている。

「こ、こいつ——！」

「ほら、何も買わないなら帰った、帰った」

「ぐ……お、覚えてなさいよ！ レミリア！」

「怖——い♪」

「このガキ……！」

閻魔も怯みそうな形相でレミリアを睨みつけた霊夢は渋々と団子屋を立ち去った。

「ふ、虚しい勝利ね……。あ、おっちゃん。お土産用にそれぞれ包んでちょうだい」

「あいよ」

—————

「パツチエさん、お土産の団子です」

「そこに置いといて」

「はい……」

妙に下手に出ているレミリアの方を向きもせず、パチュリーは何か調べ物をしていった。

「と、ところで、パチエ。例の件の進捗は……」

ギロツ！

「う……」

「月に行くなんて突拍子もないことが、すぐどうにかなると思ってるの？」

「いえ、思っていないです」

最近のパチュリーはレミアアの月に行くという野望を叶えるために、ロケットの研究に時間を取られていた。

「ほ、ほら、肩でも揉むから」

もみもみ……

「……ふう。問題は推進力ね。現状だと決め手に欠けるわ」

「魔理沙で代用するという手はどうかしら？」

「ある程度の距離ならそれも可能でしょうけど、さすがに魔力も体力も持たないわよ」

——魔理沙ロケット……。冗談だったんだけど、パチエの計算だと魔理沙が複数いたら月に行けるのか。

「……そういうえば霊夢が言ってたけど、また異変が起こってるみたいね」

「へえ……レミイたちが解決した月の異変みたいな大掛かりなやつ？」

「あそこまではそうないでしょ。なんでも四季の花が一斉に咲く異変だそうよ」

「たしかに異常なことだけど、それで誰か困るの？」

「いや、特別誰かが困ってるわけじゃない……かな」

「なら放っておいていいんじゃない？」

「そうね。霊夢は怠け巫女の名で呼ばれないように、積極的に動いてるみたいけど」
「ふ〜ん」

今回の異変は時間が経てば勝手に解決する。それを知っているレミリアとしては率先して何かする気はなかった。

「さて、私は修行のために出かけてくるわ」

「また？ 鬼とも五分で渡り合ったんだし、すでに十分強いでしょ」

「いや、まだまださ。月の民と戦って自分の未熟さを痛感したよ。そういう意味でも永夜異変はよい経験になった」

「月の民……それほどの存在なのね」

「ああ。だから月に行く前に更なる地力の向上をしてくる」

「そう……。まあ、せいぜい頑張って」
「ええ」

—————

文は花の異変を記事にするために、ネタ集めに奔走していた。

「ネーター、ネーター、どこですかー？」

「わかっているなら実行しなさい！」

「すみません！ すみません！」

「おや、あのガミガミ叱ってるのと叱られてるのは……閻魔様と死神？」

「……小町への説教はこれくらいにしておきましょう。私の説教を必要としている者はまだ大勢いるのです」

「閻魔様に捕まったらネタ集めの時間がなくなります。ここは今のうちに……あ、死神と目があつた——」

ヒュンッ

「おっと、どこに行くんだい？」

「速い!? 幻想郷最速の私の前を塞ぐとは!」

「単純な速度ならあんただろうけど、あたいに距離は関係ないからね」

「そこにいるのは烏天狗の新聞記者。ちやうどよかった、探していたのです。貴方にも説教が必要ですからね」

「ちよつと、何てことしてくれるんですか!」

「ふふん、あんたも四季様のありがたい説教を受ければいいさ」

「では早速始めますよ」

「私などより閻魔様の説教が必要な方はたくさんいますよ! 例えば紅魔館のレミリアさんとか!」

「そう、貴方の言う通り。彼女は少し暴れ過ぎている。この後は紅魔館に行くつもりです」

「やっぱりそうですよね!」

「けど、まずは貴方から。そう、貴方は少し好奇心が旺盛すぎる——」

「あああああ」

——

魔界——

「なるほどね。それでまたこっちに來たのかい」

「そうよ、魅魔。ここなら大暴れしても大丈夫だからね」

確かに魔界規模で見れば、そう簡単には壊れないが、それでもレミアアや魅魔のような実力者が戦闘をすれば周囲の被害は甚大なことになる。

もつとも二人はそこまで気にしていないようだが。

「そうだ。アリスにあんたのことを話したけど、メイド契約はもう無効とか言ってたわよ」

「困った娘だねえ。いまでもあいつは私のメイドだつてのに」

「それとやっぱり魔理沙はあんたのことを気にしてたわよ」

「う……私としては黙って離れたこともあつて気まずいんだけどね」

「まあ、そのうち会つてやりなさいよ」

「……そうだね」

「さてと、修行を始めようかな」

「何かに絞つてやるのかい？」

「地力の向上は今まで通りだけど、それに加えて太陽の光への対策ね」

「太陽の光？今のお前さんなら並の吸血鬼と比べて、ほとんど弱点にもなつてないだろう」

「それでも多少は火傷もするし、光系統の術はやっぱり痛いわ」

「ふむ。手は考えているのかい？」

「ええ。私に相應しいのをね——」

レミリアは着々と月に向けての準備を整えつつあった。

紅い吸血鬼が月の地を踏む日は近い——。

第十八話 『月の異変（上編）』

「パチュリー様。これが香霖堂で購入した月ロケットの資料です」

「ありがと、咲夜」

パチュリーは月に行くというレミアアの無茶振りに応えるため、日々、ロケットの開発を進めていた。

「ふむふむ……これが外の世界のロケットか」

「その資料は役に立ちそうですか？」

「ええ。どうやらロケットは3段で構成されているらしいわ。外枠はただの筒状としか認識してなかったから、これは大きな一歩ね」

「それは良かったです。お嬢様はお喜びになりますね」

「そのレミアイの計画が無茶なのよね。いくら紫より先に月に行きたいからって、冬までに完成させるだなんて」

「冬ですか。先月、八雲の式に勧誘された例の計画のことですね」

「ええ、そうよ」

——1か月前

その日は珍しく八雲紫の式たる八雲藍が紅魔館を訪れていた。

応対するのはレミリアで、後ろには咲夜とパチュリーが控えている。

「月の都への侵入ねえ」

「紫様は過去にもその技術を狙って月に侵攻したが、不慮の事故で撤退した。今回は二度目の挑戦ということになるな」

「不慮の事故って普通に負けたんでしょ。その後は月の賢者の策に嵌って撤退もおぼつかなかつたらしいじゃない」

「んん……。私も当時の詳細は知らないので何とも言えんな」

「ま、そういうことにしておくわ」

「とにかく紫様はお前のことを買っているのだ。今回の再侵攻ではそのチカラを頼りにしたいと」

「ふーん」

——私の記憶にある会談と微妙に違う……？ もつと藍は煽ってくる感じだったと思うけど。まあ、私はゆかりんとも上手くやってるから、そのへんが影響してるのかな。

本人は上手くやってるつもりで、実際に紫との仲は悪くないが、お騒がせ度が尋常じゃないので、八雲一家要注意リストの上位に名前が載せられていることをレミリアは

知らない。

「紫様にかかれば月に行くだけなら造作もない。湖に映った幻の満月と本物の満月の境界を弄り、湖から月に行けるようにするのだ」

「ほーお、さすがに紫の能力は便利ね。その入口から月に軍勢を送り込むってわけ？」

「いや、全面戦争はこちらも望んでいない。紫様はその通路を維持するので、お前にはその間に月の都に侵入して指定するお宝を入手してもらいたい」

「このレミリアにコソ泥の真似事をしろって？」

「そうじゃない。規模は小さいが、これは紛れもなく戦なのだ」

「……たしかに私も月には興味があるわ」

「では協力してもらえるのかな？ 出発は今年の冬を予定している」

「生憎だけど断るわ」

「ほう……やはりこっそり忍び込むのは性に合わないか？」

「それもあるけど、月の地を踏むのなら、それは紅魔館の名で行くと決まっているのよ」

「月までの距離は理解しているのか？ 独力で行くのは難しいぞ」

「問題ないわ。私の親友たる魔女が何とでもしてくれる」

完全に丸投げなその言葉を聞いて、咲夜と並んで後ろに控えているパチュリーが微妙に嫌そうな顔をしていた。

「ふう……仕方ないな」

「ま、そつちの邪魔もしないから、お互い好きにやりましょう」

「やれやれ、紫様に怒られてしまうな」

「別にゆかりんは怒ったりしないですよ。断られるのも想定内でしょうしね」

「そんな名前で呼ばれていることを知ったら怒りそうだが」

「大丈夫だつて。何回か呼んでるけど、むしろ本人は喜んでたわよ」

「え……ウソだろう?」

「ホント、ホント。一度、呼んでみたら?」

「それは……いや、でもなあ……」

結局、藍はレミリアの協力が得られずに、紫のもとに帰還することとなった。

ちなみに後日、試しにゆかりんと呼んでみたところ、にっこり笑った紫に傘で折檻されたとか。

「あれから一か月……資料不足で煮詰まってたけど、ようやく進みそうね」

「そういえばお嬢様はどうしたのでしょうか? 最近は毎日、図書館にロケットの開発具

合を確認しに来ていたのに」

「なんか月に行つた後の準備をしてくるから、月に行く準備は任せるとか言つて出掛け
たわ」

「行くための準備ではなく、行つた後……ですか」

「いつもながらレミイには何かが見えてるんじゃない？　あまり気にしても仕方ないわ
よ。必要なことなら言つてくるでしょ」

「それもそうですね」

———

「たのもー」

レミアアが永遠亭の外から声をかけると、鈴仙が出迎えに出てきた。

「はーい……つて、ええええ!？」

「いつもながら良いリアクションね」

「あ、あんた……何しに来たのよ？」

「ここは薬屋を始めたんだらう？　薬を買いに来たに決まっている」

「えええ。あんたが？」

明らかに疑っていますよ、という顔で鈴仙が見てくるが、レミアアは気にした様子も

なく屋敷の中に入っていく。

「ほらほら、さっさと永琳のところに案内しなさい」

「普通の薬なら私が持つてくるけど？」

「このレミリアがわざわざ買いに来た薬よ。普通じゃないに決まっている」

「そんな自信満々に言われても困るんだけど」

「そういうわけで、特別な薬を作つてほしいのよ」

「珍しいお客さんだと思つたら、ずいぶんと単刀直入ね」

八意永琳は苦笑しながらも、穏やかな笑みを浮かべながら対応していた。

「いまのあなたは竹林の薬屋さんだから、薬の注文はおかしくくないでしょ？」

「まあね。けど、あなたはどこも悪いようには見えないけど」

「何かの治療つてわけじゃないのよ」

「へえ、じゃあなに？　胡蝶夢丸ナイトメアタイプで悪夢でも見たいの？」

「それはそれで興味があるけど、私が欲しいのは『穢れを消す薬』よ」

「――！」

一瞬でその場の空気が変わった。

永琳の目つきは鋭くなり、先程までの優しい薬屋さんの雰囲気は消え去っていた。

「穢れを消すといっても完全に消去する必要はないわ。一定期間、抑える程度でいい。あなたなら作れるわよね？」

「……作ることは出来るわ」

「さすがね」

「けど、作るとは言ってないわよ。いったい、それを使ってどうするつもりなの？」

「安心しろ、悪用するつもりはない」

「そう簡単には信用できないわね」

「むしろそれを用意するのは気を遣っているからだ」

「気を遣う……？」

「私は近いうちにある地に降り立つだろう。だが、その住人は穢れを嫌うと聞く。マナーとしてその地にいる間くらいは、穢れを抑えておこうと思ったわけだ」

「……なるほど。それは良い心がけね」

「どう？ 作ってくれるかしら？」

「……」

「そんなに心配するな。そこに行く計画については、そのうち幻想郷中の人妖を招いて記念パーティーをするつもりだ。特にやましいことはない」

「む……」

「お礼は弾むわよ」

「……わかりました。ただし、その薬で穢れを抑えることが出来ても、気配などを消すことはできませんよ」

「問題ないわ。どっかの泥棒魔法使いじゃないんだから、気配を消して盗みなんてしないわよ」

「それならば良いでしょう」

「決まりね」

「ただし、私へのお礼ですがお金ではなく——」

——

紫は湖の上にスキマを呼び出して、そこに腰かけた状態で藍からの報告を聞いていた。

「そう。レミリアは独力で月まで行くつもりなのね」

「はい。こちらの邪魔もしないから、お互い好きにやろうとのことですよ」

「ふふふ、彼女らしいわね」

「ですが、たとえ外の技術を真似たとて、月に到達するのは難しいと思いますよ」

「そうねえ。さすがに今年の冬までという期限付きでは達成は難しいでしょうね。誰か
が入れ知恵でもしない限り」

「そちらの方も抜かりありません」

「ご苦労様」

妖怪の賢者は湖に映る月を見上げる。

「……」

かつてはチカラで上をいかれ、策でも上をいかれた屈辱の地。

純粹な武力ではまだ敵わないだろう。

だが知略では負けるつもりはない。

今回、嵌めるのはこちらの方だ。

「さあ、始めるわよ。美しき幻想の闘い、第二次月面戦争を——！」

第十九話 『月の異変（中編）』

「美鈴がいないわね。花壇かしら？」

紅魔館に帰還したレミリアは門番がいないのであたりを見回したが、どこにも姿はなかった。

「帰ったわよ……あれ？」

屋敷の中に入ると、先程いなかった美鈴だけでなく、咲夜、フレンドール、パチュリーが揃っていた。

「お、お帰りなさいませ、お嬢様」

咲夜は珍しくやや焦ったような声でレミリアを出迎えた。

「みんな揃ってどうしたの？ なにかあった？」

「ええ、まあ……何かはありました」

それに答えたのは美鈴。いつも快活な彼女にしては歯切れが悪かった。

「何があったかはお姉様が一番よく分かっているんじゃないの？」

フレンドールがジト目で姉に言った。

「いえ、全然分らないわ。いったいどうしたのよう？　ねえ、パチエ——」

先程から一言も発さないパチユリーにレミリアが視線を向けるが言葉に詰まった。

紅魔館の誇る魔女は笑顔だが、なぜか異様な威圧感を放っていたからだ。

「ぱ、パチエ……？」

「ねえ、レミイ」

「な、なに？」

「金庫を確認したら、中身がごっそりとなくなっていたんだけど、理由を知らないかしら？」

「——！」

「そういえばレミイの持っているカバン……不必要に大きいわよね。なぜ外出するのにそのカバンが必要だったの？」

「それは……」

「言ったわよね。あまり度を過ぎた無駄遣いはしないようにって」

「……」

「……」

「バツ！」

レミリアは にげだした！

しかし まわりこまれてしまった!

「ちよつ、咲夜! なぜ主の邪魔をするの!」

「申し訳ありません。さすがにこれは看過できないかと……」

「そうですね。ただでさえ、最近のパチュリー様は月ロケットの開発で忙しいのに」

「美鈴まで! フランは私の味方よね……?」

「聞きたいんだけどさ、お姉様」

「な、なにかしら」

「普段は興味もないし、気にしてなかったけど、外で何か欲しいならお金がいるじゃない

?」

「まあ、そうね」

「紅魔館って色々と物があるけどさ、それを手に入れるお金ってどうしてるの?」

「ある程度は材料があればパチエが作れるし、お金もパチエが生み出したものを売って

稼いでいるわ」

「なるほど、パチュリーに頼りすぎ。100%、お姉様が悪いね」

「待ちなさい! そう判断するのは早——!」

「!」……!

レミリアが振り向くと、パチュリーが灼熱の業火を呼び出していた。

「アグニシャイン!!!」

「あああああああー!!!」

「うう……結局、お金は使わなかったのにひどい仕打ちよ。とつさにカバンを投げなかつたら、いっしょに燃え尽きていたわよ」

焼け焦げたレミリアはパチュリーに正座をさせられていた。

「それは結果論でしょ。必要なら全部使うつもりだったわよね？」

「それは否定しないが」

「否定しなさいよ。反省の色が見えないわね」

「反省してるから許してよ」

「はあ……。まあ、使つてないんならもういいわ」

「お、さっすがパチュエ♪ 愛してるわ」

調子のいいレミリアはさっそく正座をやめてパチュリーに抱き着いていた。

「何だかんだでパチュリーってお姉様に甘いよね」

「そりゃまあ、私たちは親友だからね」

「うっとおしいわね、離れて」

「ひどいな」

「パチユリー様が一番お嬢様たちとの付き合いが長いですもんね。最初から今のよう
仲が良かったんですか？」

「いや、パチエと私の最初は殺し合いだったぞ」

「ええっ!？」

「そうだったわね……ずいぶん昔に思えるわ」

「まあ、その話をするとな長くなるからまた今度ね」

「ええ。気になりますよ」

——

——数か月後

「霊夢が呼び出す神をロケットの推進力にする——か」

「ええ、それも航海を司る神よ。うわつつのおのみこと上筒男命、なかつつのおのみこと中筒男命、そこつつのおのみこと底筒男命の三柱併せて住吉

さんと呼ばれているらしいわ」

「これで月ロケットは完成か！」

「そうよ。三段で構成されたロケットに三柱の神を載せる——プロジェクトスマッシュ住吉月面侵略計画。この

名を冠することで、ついに我々は月にたどり着く」

「素晴らしいわ、パチエ！」

「まあ、私だけのチカラじゃないけどね。咲夜が資料や情報を集めてくれたから。住吉さんの話も彼女が仕入れてきたのよ」

「咲夜にも感謝を。有能な従者をもって私は幸せだわ。ふふふ、ついに我が夢のフロンティア、月の都に行く時が来たか。せっかくの機会よ、パチエは本当に行かなくていいの？」

「いかない」

「つれないわね」

「月まで導く魔法はロケットの外からしか出来ないからね。ま、お土産を期待してるわ」「わかったわ。月の石とか色々もらってくるとしよう」

「期待しないで待ってるわ」

「さあ、忙しくなるぞ！ まずは記念パーティーの準備だ！」

—————

月ロケットの完成を祝った記念パーティーが紅魔館で開かれていた。

幻想郷の主だった人妖が招かれたそこに姿が見えないのは八雲紫くらいだろうか。

先頃、外の世界からやってきて妖怪の山に住み着いた守矢神社の一行も参加してい

る。

「——そしてこれが月に乗り込むためのロケットよ！」

レミリアが月ロケットの模型の前で自慢げに解説している。

「……というわけで、このロケットの愛称を募集するわ！」

「ロケットの愛称募集だってよ。私たちも何か考えようぜ」

「それに乗り込むんだから変な名前はやめてよね」

「……マスパ、ムソーフーイン、リーインカーネーションとかどうだ？」

「絶対やめて」

魔理沙と霊夢がロケットの名前で盛り上がっていると、永琳がやって来た。

「ロケットに付けるいい愛称があるんだけど、それを提案してはどうかしら？」

「あんたがレミリアに言えばいいんじゃないの？」

「どうせなら乗り込む人間が名付ける方が良いでしょう」

「わかったぜ！　なら私が提案してくる。教えてくれ」

「それでは——」

「三段ロケットの愛称は、上から『ミンタカ』、『アルニタク』、『アルニラム』に決定した

わー！」

おおーと会場は盛り上がる。

「三段ロケットか。月になんて行けるものなのねえ」

魔界出身のアリスが月へ行くことに半信半疑で呟いていた。

おそらく同様の感想はここにいる人妖の半数が抱いているものだったろう。

外の世界的には異界に存在している魔界に行く方が、月に行くよりも難易度は高いが、幻想郷的には違うようだ。

そんなアリスに永遠亭の薬師が声をかける。

「お久しぶり。異変後の宴会以来かしら」

「あら、たしかに久しぶりね。まあ、私が薬屋さんのお世話になることはそうないだろうしね」

「魔理沙みたいな人間魔法使いと違って、種族としての魔法使いならそうでしょうね……ところで、あなたはあれに乗らないの？」

「あれってロケット？ 乗らないわよ。魔理沙には自慢されたけどね」

「そうなの」

どうやらウソでもなさそうで、永琳は内心ほつとする。

永夜異変で魔理沙とコンビを組んだアリスも月に行くのではないかと警戒していたからだ。正確には警戒しているのはアリス個人ではなく、彼女の操る死神人形キルエーリィンだが。あんなものを月で爆発させられたら、どれほどの被害が出るか分からない。

「そういえば月はあなたの故郷だっけ」

「第二の故郷ですね。第一の故郷は地球なので」

「あら、そうなの」

アリスは問題なさそうだったので、次に永琳は紫と仲の良い幽々子を探りを入れようかと考えた。だが、白玉楼の主従は一通り飲み食いしたらすぐに会場を後にしたように、姿が見えなかった。

—————

「霊夢に何かあったら、あんたが代わりにロケットを飛ばすのよ」

「私がつて……まさかマスターズパークでか!?!」

「その通りよ」

「じよ、冗談だよな……?!」

パチュリーはにっこりほほえんでいる。

「いやいやいや」

「魔理沙がロケットに乗るのにあっさりOKしたと思ったらそういうことか」
「そういうことです」

焦る魔理沙に霊夢と咲夜も追撃を入れる。

「お前らもかよ！　　っていうか本気じゃないよな？」

「さあどうかしら？　でも魔理沙ロケットの発案はお嬢様なので、そういう運命も見え
たってことじゃない？」

「レミリアが!?　まさか運命を操る程度の能力で……」

「パチュリー様、月ロケットへの物資の積み込みが完了しました。もういつでも乗り込
めます」

和気あいあいと盛り上がっている間に、準備が整ったと美鈴が呼びに来た。

「わかったわ。では行きましょうか」

「魔理沙をからかっている間に準備が終わったわね」

「やっぱりかよ、咲夜！」

「……（私は割と本気だったけど）」

紅魔館の月ロケットは赤道を模した赤い線の上に設置されている。

外の世界のロケットは赤道上かそれに近い場所から発射すると必要なエネルギーが少なくなる。これはその原理を魔術的に再現したものだ。

「実物はなかなか大きいな」

「意外と中也広いのね」

レイマリが月ロケットに乗り込みながら、感想を述べる。

「結構な長旅になるからね。積み込む食料も考えたらこれくらいになるそうよ」

「長旅つてもしかして泊りになるの？」

「だいたい往復で半月から一月くらいかかるらしいわ」

「半月も？ 聞いてないけど」

「まあ、月まで行くならそれくらいはかかるだろ」

「追加の巫女代を請求しないと割に合わないわ」

「おう、そうだな（なんだ巫女代って）」

「ほうほう、この私を称える赤絨毯ってわけね」

「ま、そんなところね」

見当違いなことを言いながら現れたレミリアに適当に答えるパチュリー。

「待たせたわね！ さっそく出発するわよ！」

「じゃあ霊夢、頼んだわ。ロケットには神棚も用意してあるから」

「はいはい」

「いよいよか、緊張するぜ」

「……」

霊夢が座禅を組んで、神降ろしを始める。

あたりに神力が満ち始め、船体が振動する。

「ロケットが動き出すわ。天井を開きなさい」

パチュリーが指示を出すと、妖精メイドたちが慌てて大図書館の天井を開いた。

紅魔館地下にある大図書館だが、発射台は地表に近い場所にあったのか、数層の屋根を開くとすぐに空が見えた。時刻は夜になっているようで、空には三日月が浮かんでいる。

「いってらっしゃい。幸運を祈るわ」

空飛ぶ神社と化したロケットが紅魔館から飛び立った。

——

「紫様。ロケットは無事に月に向けて出発しました」

「ご苦労様」

「搭乗者は霊夢、魔理沙、咲夜、そしてレミリアです」

正確には妖精メイドも三匹ほど乗っているが、藍は省略した。

「月の都を攻めるには明らかに戦力不足だけど、それでも放置できない面々ね」

「はい。月側にも動きがあると思われれます」

「では私たちも手筈通りに」

「承知いたしました」

—————

——ロケットが出発してから6日目

紅魔館の大図書館を蓬莱山輝夜と八意永琳が訪れていた。

「月までの行程は半分は過ぎたころね」

「あんな木製のロケットでそんなに早く着くものなの？」

輝夜がパチュリーの言葉に疑問を覚えるが、永琳が補足する。

「月までの距離は見る人によって変わります。住吉三神の加護がある、あのロケットな

らばそれくらいで辿り着けるでしょう」

「それを計算して三日月の夜に出発したのよ。満月になれば、月の都への道が開くらしいから」

「詳しいですね。どこからそれほど情報を？」

「さあね」

「……」

永琳は微笑みながらもどこか威圧感を漂わせてパチュリーを見るが、彼女は気にせず顔を本に向けていた。輝夜はその空気に居心地が悪そうだ。

「……レミリアに聞いているかしら？ 彼女が先日、私に薬の調合を依頼してきてね」

「あまり詳しい話は聞いてないわ。患者の個人情報と話していいの？」

「普段は話しませんよ。……彼女が依頼してきたのは『穢れを消す薬』です」

「穢れを消す……」

「悪用はしないと誓ってくれましたが、彼女自身がそう考えていても、他者からの干渉で結果的に良くないことが起こらないかと心配していました」

「なるほど。要するに過去にも月にちよつかいを出した、古くて困った妖怪が裏から何をしているか気になっているのね」

「そういうことです」

「まあ、短期間で月に行くための新情報が次から次へと手に入ったからねえ。私もレミイも利用されてることくらい理解してるわよ」

「利用されてるとわかって従っていたの?」

輝夜が不思議そうに問いかける。

「こつちとしても都合だったからね。つまり、私たちは自分の好きなようにやってるだけ。向こうが何を考えているかは知らないし、興味もないってことよ」

「……そうですか」

「ま、レミイは放つといっても大丈夫よ。それよりは八雲某さんを警戒したら?」

「なにがしつて……名前言ってるじゃない」

「ふうむ……」

——レミイは本人の実力に加えて、未来が見えるチツクな能力もあるせいで、勘違いされがちだけど。私に言わせれば、勝手に周りが深読みしているだけね。

さすがに親友たるパチュリーはレミリアのことをよく理解していたが、そこまで教えてあげる義理もないので黙っているのだった。

——

——ロケットが出発してから12日目

途中で咲夜がロケットの窓を開けるといった珍事があつたものの、それ以外はトラブルもなく、順調に月を目指して飛んでいた。

「退屈過ぎるぜ。宇宙旅行っていつても、ずっと同じ景色ばかりだしな」

「そうねえ。暇つぶしに持ってきた遊び道具も、ずっとやってたら飽きちゃったしね」

「予定ではもうそろそろ——お嬢様！ 窓の外をご覧ください！」

レミリアたちが窓の外を見ると、景色が一変していた。

眼下に広がっているのは木も水もない一面の土塊——ではなく、広大な海と砂浜、近くには果物がなつた森も見つけることが出来た。

「月には石以外に何も無いって聞いたけど、ウソだったみたいだな」

——これが裏側の月。本当に大きな海がある……。

ガクン！

レミリアたちが初めての光景に見とれていると、大きな振動が襲つた。

着陸態勢に入っていたロケットが、月に近づくと上下逆さまになっていたのだ。

「うおおおお！ ちゃんと操縦しろよ霊夢——！」

「ここに来るまで私の役割は終わったわ！ あとは知らないわよ！」

ロケットは頭から月の海に突つ込む。

その衝撃で船体は見事にバラバラになつたが、一行はなんとか浜辺までたどり着い

た。全員、ずぶ濡れになっていたが。

「ひどい目にあつたぜ。つていうかロケットが壊れちゃったけど、帰りはどうするんだ？」

「さあ？ まあ何とかなるんじゃない」

「お前はいつもお気楽だな」

魔理沙と霊夢が浜辺で黄昏ていると、レミリアが待ちきれないとばかりに行動を開始した。

「さあ、二人とも！ 月探検を始めるわよ！」

「お前は元気だなあ、レミリア」

「あつたりまえよ。念願の月に来たのよ。黄昏ている場合じゃないわ」

「せっかく海があるんだし、釣りでもしようかな」

「そいつはいい考えだ。海には大きな魚が棲んでいるつて聞くしな」

「あんたら月に来てまで釣りつて……」

「残念ね。豊かの海には何も棲んでいないわ」

「そうなのか……つていまの誰だ？」

かけられた声の方を向くと、森から見たことのない人物が姿を現した。

「生命の海は穢れの海。月の海には生き物は棲んでいないのです」

そこにいたのは一人の少女。

長い髪をポニーテールにして纏め、頭には大きめの黄色のリボンを付けていた。何より目立つのはその手に持つ刀。

少女が持つには不釣り合いに大きく、刀身はレミリアの背丈よりも長かった。

——来たわね、よつちゃん！

心の宿敵の登場にレミリアは寧猛な笑みを浮かべていた。

第二十話 『月の異変（底編）』

——魔砲「ファイナルスパーク」

霧雨魔理沙がお得意のスペルカードを発動する。

轟音と共に月の空を翔ける極太レーザー。

綿月依姫は微動だにせず、ファイナルスパークが直撃したかに見えた——が煙が晴れたそこには無傷の彼女が立っていた。

「避けたようにも見えなかったが、いったいどんなカラクリだ？」

「不思議なことではありません。私にとって光を斬るのは水を斬るよりも容易いことですから」

——見てから私のマスパを斬ったのか？ 刀を前に立てればそれも可能かもしれないが……。

「けどな、この世に光の速さより速い物は存在しないんだぜ——この私を除いてな！」

——恋心「ダブルスパーク」

再び放たれる極太レーザーだが、今度は二連射。

一発目が依姫に届く前に、魔理沙はわずかに移動して二発目を放った。

マスタースパークが光速なら彼女は宣言通り、光より速く動いたのだろうか。

時間差で放たれた二つのマスタースパークが依姫に迫る。

しかし、彼女は慌てることなく新たな神を降ろしていた。

「石凝姥命いしこりめのみことよ。三種の神器の一つ、八咫鏡やたのかがみの靈威を見せよ！」

神秘的な鏡を携えた女神が顕現する。

一本目のマスタースパークは依姫が刀で斬り、二本目は石凝姥命が八咫鏡により反射した。

「それは前にレミリアが使った——くっ！」

返されたマスタースパークを間一髪で回避した魔理沙。

「ふいふい。危なかったぜ」

「よく避けましたね。今のは当たるかと思いましたが」

「前に似たようなのを見たことがあってな。おかげで咄嗟に回避できたぜ」

「そうなのですか。地上にもそのような技術が……」

魔理沙の説明に感心する依姫だが、その技術とやはレミリアが前世の記憶をもとに作った魔法だとは流石に想像もしていなかった。

——しかし、思ったより地上の者たちは強いですね。予想より時間がかかったので、八意様に連絡が出来そうにありません。代わりに玉兔の誰かを遣わしましょうか。

「……残念だが降参だ。私の負けだぜ」

「あら。私の番が回ってくる前に終わりですか」

「咲夜に続いて魔理沙も敗北か。あの依姫とやら、幻想郷の誇る異変解決者を相手にやるものだ」

「彼女は強いです。まさか自分の投げたナイフにやられるとは思いませんでした」

月に乗り込んだ幻想郷勢とそれを出迎えた月の姫にして使者である依姫は一触即発の状態だったが、魔理沙が提案したスペルカード戦が受け入れられたことで、概ね平和的に事態は推移していた。

無駄な血が流れないのは好ましいとの理由から始まったスペルカード戦なので、幻想郷勢が全敗したら大人しく帰るが、誰かが勝てば手土産をもらうとのなんとも緩い条件となっている。

状況は魔理沙が敗れたことで彼女たちの二連敗。

一戦目の十六夜咲夜は時間を操る程度の能力を駆使して戦ったが、反射された自身のナイフと雷によって逃げ場を塞がれ敗北した。

神降ろしの能力もさることながら、わずかの間に相手の能力をあらかじめ看破した洞察力も依姫の強さの要因だった。

「あんたはあいつに勝てると思う？」

「当たり前だ。霊夢にしては弱気だな」

「いつもの妖怪退治なら負ける気しないんだけどね」

「私は勝つさ。お前の勘もそう言っていないか？」

「……わかんない。あつさり負ける気もするし、違う気もする」

「ふふ……そうか」

ニヤリと笑いながら依姫のもとに向かうレミリア。

それを霊夢はやる気なさげに見送った。

「次はあなたですか」

「そう、次はこのレミリア・スカーレットだ。そして私の次はない」

「ほう？ それは残った紅白の巫女が戦わないからですか？ それとも——」

「無論、この私が完璧に勝つからだ！ 綿月依姫！」

レミリアが紅い弾幕を乱射するが、依姫は一步も動かさずに刀で次々と斬り捨てる。切断された弾幕は周囲に着弾し、爆風が巻き起こった。

吸血鬼の女王と月の姫の戦いが開始された。

――

藍と共に月の海上を飛ぶ紫。

「さあ、頼もしい仲間たちが敵戦力を引きつけているうちに、急いで行きましょう。悠長にしていれば月の賢者が仕掛けたトラップが作動するわ」

「頼もしい仲間とは言っても、ロケットに乗ってきた連中はこちらのことを知らないはずですが」

「それでいいのよ。互いに深く干渉しない仲間というのもありでしょう」

「まあ、そうですね」

レミリア一行が依姫と戦っている間に、境界を操る程度の能力で月に侵入した八雲主従は暗躍を開始する。

太古の昔、月は丁度、二十八日で一周する物だった。

だが、あるとき月の賢者の手によって自転運動が狂い、公転周期が歪められる。

それにより、月の公転周期は二十七日と三分の一日となった。

月の賢者は何故そのようなことをしたのか？

それは満月を頼りに月に侵入してくる妖怪を捕らえるため。

気が付かないうちに十五夜は満月とは限らない夜となっていた。

予想よりも早く満月が閉じてしまったことで、それを出入り口としていた妖怪は退路を塞がれることになった。

かつて満月を頼りに月に侵入した妖怪は八雲紫。

そして、彼女を罠に嵌めて見事に捕らえた月の賢者——その名を八意永琳という。

たしかに昔の自分は己の頭脳と能力を過信し、増長していた。

それは認めよう。

興味本位で月に攻め入って敗北した。

これも自業自得。

だが、今回のことは幻想郷の管理者として必要な行動。

その結果、たまたま月の賢者に雪辱を果たしたとしても——

「——仕方ないわよねえ」

八雲紫は妖しくほほえむ。

——

「……いつは……どうだっ！」

レミリアがグングニルを投擲する。

ザンツ!

強力な紅い槍も通常弾幕と同じように、あっさりとは斬り落とす依姫。

「やるわね。私のグングニルをこうも簡単に叩き落とすなんて」

「それなりに威力はあるようですが、速さは先ほどの魔法使いのレーザーの方が上です。対処することは造作ありません」

「いやゝ。それほどでもあるぜ」

「なに喜んでんのよ。ようするにどっちも楽勝って言われてるのよ」

褒められて割と嬉しげな魔理沙をやれやれといった目で見る霊夢。

「気に入ったぞ依姫よ。特別に私をレミリアと呼び捨てにすることを許そう! これはなかなか無いことだぞ!」

「あなたのお仲間は普通に呼び捨てにしているようですが……」

バカな話をしているレミリアだが、その羽からチリチリと焼ける音がしていた。

「あなた、羽から煙が出ていますわよ?」

「んん?——おっと、咲夜!」

「はい、お嬢様!」

咲夜が投げた日傘を素早く開くレミリア。

「我らの一族は日光の下では長くは生きられないのだ。強過ぎるその代償としてな」
「傘が小さすぎて、はみ出た羽がまだ燃えているようですが……」

「やつぱりレミリアも吸血鬼なんだな。あいつが光に焼かれているところは初めて見たよ」

「そういえばそうね。普通に日中も出歩いているしね」

魔力操作の応用で弱点である太陽光にも耐性を得ているレミリア。

彼女たちの言うとおり、その気になれば日の光に焼かれることはない。

だが今はあえて魔力を抑えることで、普段よりも光に弱い状態となっていた。それを見る者に自身の弱点を印象付けるために――。

「しかし、ずいぶんと刀の使い方が上手いな。知り合いの妖夢殺し屋にも指導してやってくれ」

「殺し屋？ 穢れを拒む月の民がそんな物騒な輩に教えるわけがないでしょう」

「それは残念――だっ！」

レミリアの口から灼熱の炎が吐き出された。

「――はっ！」

わずかに驚いた依姫だったが、炎すら真つ二つに斬り払った。

「レミリアのやつ火を吐きやがったぞ!? あんなことも出来たのか」

「あれ急にやってくるから卑怯よね。私の時は吹雪だったけど」

「火を吐くとは多芸ですね。では私もお返しに神の火をご覧にいます」

「神の火? たしか最初、咲夜に使ったやつよね」

「その通りです。あのときは脅しでしたが、あなたには特別に直に味わわせてあげましょう」

「それは楽しみね」

「——火之迦具土神よ。ひのかぐつちのかみすべてを焼き尽くす火で夜の眷属を打ち落とせ!」

愛宕様をその身に降ろした依姫が腕を振るうと、小ぶりだが凄まじい熱量のこもった火がレミリアに迫る。

「ちっ!」

上空に高速で回避するが、神の火はどこまでも追ってくる。

——カグツチといえはイザナミを焼き殺した火神だったはず。つまりこれは神殺しの火。生半可な弾幕では迎撃できない。ならばこちらにも神殺しの大魔法で対抗するの

み！

「闇の深淵にて重苦にもがき蠢く雷よ、彼の者に驟雨の如く打ち付けよ！」

レミリアが深淵より闇の雷を呼び寄せる。

「なんとというおぞましいチカラ——！」

「グラビティブレス!!!」

レミリアの大魔法によって発生した超重力が愛宕様の火を捕らえ、そこに闇の雷が襲い掛かる。

チカラとチカラの激突に、強大な力場が発生し、付近の木々は根こそぎ吹き飛び、更地となっていく。

「無茶苦茶だぜ！ この場を離れないと私たちも危ないぞ！」

「お嬢様——！」

「いいからあんたも避難するわよ！」

余波に巻き込まれる前にその場から離れる三馬鹿トリオ。

様子をうかがっていた紅魔館の妖精メイドや玉兎兵たちも急いで逃げていく。

——()だ！

躊躇いなく火と雷が荒れ狂う中に突撃するレミリア。同時に低下していた光への耐性を元に戻す。

——紅霧「永遠に紅い幼き月」

レミリアの全身から紅い魔力がほとばしる。

魔力は霧に変換され、爆発したかのように噴き出された。

後方に噴射された紅い霧は推進力となり、レミリアは瞬く間に加速する。

バシユツ!!

衝撃で愛傘がはじけ飛んだ。

ゴオオオオオオオオツツツ!!!

「その中を突っ込んでできますか! しかし、いかに火や雷に強かろうとも、太陽神の威光の前にはなすすべがないでしょう!」

——本来は正式な手順で呼びたいところですが、この吸血鬼は油断できません。弱点の光を浴びせてここで撃墜します。

「天照大御神よ! 圧倒的な光でこの世から夜をなくせ!」

カッ!!

目も眩むような大いなる光がレミリアを浄化する。

「ぐ——あああああああ!」

ただの日光であれば、今のレミリアにはダメージにもなり得ない。

だが、太陽神による直接の浄化は耐え難い痛みを与えていた。

レミリアの全身から焼け焦げた煙が上がる。

だが、それでも彼女の速度は緩まない。それどころか尚も加速して依姫へと向かう。

天照大御神の浄化は確かに効いている。

しかし、絶え間なく噴出される紅い霧がそれに抗う。

紅霧は推進力だけでなく、鎧ともなつてレミリアを守る。

すべてはこの日、この瞬間の為。

鍛え上げた体力と魔力が空になるまで彼女が止まることはない。

天照大神の光が収まったとき、吸血鬼は一撃のもとに倒れ伏している。

依姫はそう確信していた。

ゴウツ!!

「なっ!?!」

だが、レミリアは倒れてなどいなかった。

それどころか全身が焼け爛れながらも、速度が落ちることなく突き進む。

「これが紅魔館の——」

相手の能力を読み、弱点を看破し、常に後の先を取る綿月依姫の動きが一瞬止まった。

「レミリア・スカーレットだあああああああ————！」

「ぐふうあああああああつ!!!」

攻防一体の紅い霧を身に纏った、文字通り最強の体当たりが依姫を直撃した。

レミリアの渾身の一撃を食らった彼女はロケットのように吹き飛び、背後の森に突っ込んだ。いくつかの木を粉碎し、森の奥深くまで来たところでようやく依姫は止まった。

————

————体が痛くて起き上がれない。特に鳩尾のあたりが……私は何をして

……

「——はっ!?!」

森の中で仰向けに倒れていた依姫だったが、意識が戻り、両目を見開いた。

「私は——」

「あれだけ吹っ飛んだのにもう目が覚めたの? 頑丈ねえ、よっちゃん」

「!」

声の方に顔だけ向けると、吸血鬼が見下ろしていた。

「私の勝ちね、よっちゃん」

レミリアは待望の勝利を嘯みしめていた。

この世界に生まれてから、目標の一つとしていた戦い。

それに勝利することが出来たのだ。

「こ、この私が負けた……？」

「短い間とはいえ、気絶してたんだから、そりゃ負けでしょ」

「こ、これでは八意様に顔向けができない……」

敗北の事実よりも、師である永琳への申し訳なきに狼狽える依姫。

「あ、そうそう。永琳といえば、あなたに渡すよう頼まれていた手紙があったわ」

「え……八意様から？」

「はい、これ」

「……しかし、何故このタイミングで？」

「なんか月に行けばあなたと会うだろうから、そのときは落ち着いたら渡してとか言つてたけど」

痛む体に顔を擧めつつ、ゆっくりと上体を起こす依姫。

レミリアから手紙を受け取り、封を開けると、空中に「1」と描かれた。

「すごいわね、これ。開けたのが1回目ってことね」

「当然です。これも八意様が発明したものです。この量子印はあの方にしか作れないので、本人確認にもなっているのです」

「あなた、永琳のこと大好きね」

「尊敬する師ですから」

答えながら依姫はいそいそと手紙を読み始める。

嬉し気に読んでいた彼女だが、だんだんと驚きが顔に現れ、手紙とレミリアを交互に見比べていた。

「ちよつと、人の顔をじろじろ見るなんて失礼じゃない」

「あ、申し訳ありません」

「手紙にはなんて書いてあったのよ？」

「……月の内部に関わることは話せませんが、貴方のことも書いてありました」

「へえ？」

「地上での諍いで八意様が不覚を取ったと」

「ああ、あつたわね。まあ、私だけじゃなく仲間もいたけどね」

「そして仮に私も貴方に不覚をとるようなことがあっても、それは良い勉強になりこそすれ、恥でも何でもない……と」

「……なるほど、さすがは永琳ね。どこまで読んでるのかしら」

——意外と永琳からの評価が高いわね。私の記憶だと依姫と私たちの戦力差は絶対とか言ってた気がするけど、どうやら頑張ってきた甲斐があったようね。けど実際、どの程度の確率を見込んでいたのかしら。

「八意様……」

1000年以上離れていても、弟子を気遣ってくれる永琳に依姫は感動していた。

「確かにいい師匠ねえ」

「私の出番がなかったじゃない」

「あの状態の依姫さんに弾幕ごっこを仕掛けるほど霊夢も鬼ではありませんでしたか」

「人を何だと思ってるのよ」

「鬼巫女ですが」

「あ？」

「もし霊夢があいつと戦ってたら、どんな手を使ったんだ？」

「そうねえ……。大禍津日神を呼んで穢れでも撒こうかしら。あいつら極端に穢れを嫌

うらしいから」

「すげえぜ。圧倒的に悪役の行動だな」

自分の番が回ってこなかった霊夢が文句を言いながらやって来た。咲夜と魔理沙も続いている。

「お見事でした、お嬢様」

「まあ私くらいは勝たないとね」

「くう……私もまだまだ修行が足りません」

「弾幕ごっこが初めてで、私たち相手に2勝1敗なら十分すぎる戦績よ。下手をすれば危うく3タテだったわ」

「そうだな。レミリアが1勝してくれてよかったぜ。何とか幻想郷の面目も立ったな」

「ま、もし幻想郷に来ることがあるなら紅魔館を訪ねてきなさい。よっちゃんなら歓迎するわ。再戦も受け付けるしね」

「なるほど……。そのときはお言葉に甘えましょう」

——え……。軽い感じで言っただけで、よっちゃん結構本気？ いや、来るぶんには歓迎するんだけど、速攻で再戦を挑みに来たりしないわよね……？

意外と前向きな依姫に心の中でやや焦り気味のレミリア。

「ところで先程から気になっていたのですが、よっちゃんとは何ですか？」

「ん？ そりゃ、あなたの渾名よ。私をレミリアと呼び捨てにする代わりに、依姫をよっしゃんと呼ぶとそう言ったじゃない」

「え?!」

言われた依姫がレミリアとの会話を思い出していくが、そのような記憶は見つからなかった。

「い、いえ。やはりそんな会話はしていませんよ」

「しました。頭を打って軽い記憶喪失になってるのね」

「ええ？ まさか……いえ……でも……」

「まあまあ。どっちでもいいじゃないか。私は良い渾名だと思っただけ、よっしゃん」

乗ってきた魔理沙もよっしゃん呼びを始めた。

「あなたもですか」

—————

弾幕ごっこも終わったことで、幻想郷組は地上に送り返してもらえたことになった。

「ですが、貴方には別の仕事がありますので、しばらく月の都に残っていただきます」

「あー？ 私だけ？」

自分だけ残れと言われた霊夢が怪訝そうに唸る。

「貴方がいろいろな神様を呼んでいたことで、私が謀反を疑われているのです。そんなことが出来るのは私くらいなので。つまり、その疑いを晴らすのに協力してもらいたいのよ」

「ふーん」

「それが終われば貴方も無事に地上まで送り届けるわ」

「……ま、しようがないか。ロケットが壊れて自力じゃあ帰れそうにないしね」

「ふっふっふ、安心しろ霊夢」

「なにがよ？ レミリア」

「一人だけ未知の地に残されては不安だろう。私も一緒に月の都に行つてやるさ」

「え？」

「は？」

霊夢と依姫の二人が、唐突な提案に意表を突かれて固まった。

第二十一話 『月の異変（エピローグA 月の都）』

「ちよ、ちよつと待つてください！ 用もないのに部外者を月の都にいれるわけにはいきませんよ」

自分も月の都に行くと言い出したレミリアに依姫が慌てる。

「用はあるわよ。スペルカード戦の戦利品としてお土産をもらいに行くというね」

「う……あ、そうです。そのスペルカード戦の前に言っただけです。私に勝っても都には入れないと」

「そのつもりだったけどね。でも霊夢は入るんでしょ？」

「それはそうですが……」

「ならついでに私が行っても問題ないわよね」

「いえ、問題はあります。多量の穢れを持つ者は月の都に入ってはいけません。種族差別をするつもりはありませんが、決まりですので……」

「ああ、そこは大丈夫。永琳に許可をもらってるし」

「八意様が!? そ、そんなウソは通じませんよ！ あの方の名を出して私を騙そうとしても——」

「咲夜、あの薬出して」

「はい、お嬢様」

「薬……?」

咲夜が取り出したのは薬瓶。

瓶にはひっくり返した湯呑に顔をつけて永琳の帽子を被らせた珍妙なキャラクターが描かれている。

「む……そのヤゴコロ印は確かに八意様お手製の証」

「お、おい霊夢。あの変なキャラはそんな権威あるやつなのか?」

「知らないわよ」

「これを月の都に入るために永琳にもらったのよ。どんな薬だと思う?」

「貴方が月の都に入るための薬……まさか!？」

「察しがいいわね。ずばり“穢れを消す薬”よ」

「——!」

「ま、あくまで一時的にだけどね」

「なんと……」

「これでわかったでしょ？ 永琳がこれをくれたたってことは、穢れを抑制したら月の都に入ってもいいということよ」

「むう……確かにそのようですね。まさか、八意様がそのようなものまで渡しているとは」

「まあ、これは私から永琳に頼んだんだけどね。月の民は穢れを嫌うつて聞いたから」

「……わかりました。そこまで考えているのであれば良いでしょう。貴方も月の都までご案内します」

「そうこなくっちゃ！」

——永琳の許可が出てると知れば即Ok。それを利用して私が言うのもなんだけど、私情入りまくりよね。

「よーし、よっちゃんの許可も出たことだし、月の都で観光よ、みんなー！」

「おう！ 月の都に入れるとはついてるな！」

「お嬢様に感謝しなさいよ、魔理沙」

「やれやれ。高いお酒でもお土産にもらわないとやってられないわ」

「え……みんな？ え……え??」

その後、上手いこと言いくるめられた依姫はしぶしぶ全員を月の都に案内することになった。

――
月の都は遙かな昔から月の裏側に存在する大都市である。

建物は1000年ほど昔の中国大陸で見られたような様式だが、その合間に現代でも再現不可能な構造をした高層ビルが並んでいる。

その月の都に幻想郷よりやって来た吸血鬼十三馬鹿トリオが足を踏み入れた。

「いいですか、皆さん。ここでは私の指示をよく聞いて、勝手な行動は――」

「ひゃっほう！ 探検よー！」

「お宝が私を呼んでるぜー！」

レミリアと魔理沙がさっそく勝手な行動を始めた。

「言ってるそばから!! ころあああああつ！ 人の話を聞きなさい!!」

バカ二人は依姫からめちやくちや叱られていた。

「まったく貴方たちは団体行動というものをですね――！」

ガミガミガミ！

「ついカツとなってやった、今は反省している（次はどこに行こうかしら）」

「ついカツとなつてやった、今は反省している（お宝が見つからなかった）」

「本当に反省していますか!？」

「もちろんだ」

「私たちは何日くらい滞在する予定なの？」

「二人のフリーダムはいつものことなので、自然に流した霊夢が依姫に問いかける。

「ん……そうですね。おおよそ10日といったところでしょうか」

「微妙に長いわね」

「幻想郷まで帰りは一瞬と聞いてますが、それでも行きの日数と合わせると約一か月。これだけ紅魔館を空けると何だか不安になりますね」

「10日！ その間に行けるところはすべて行くわよ！」

「10日かく。お宝をゲットするには十分すぎる時間だぜ」

「貴方たち本当に、本当に反省してるんでしょね!？」

「もちろんだ」

——

綿月姉妹の家

「まさか依姫がお友達をこんなに連れてくるなんて思わなかったわね。驚いたけど、姉

として嬉しいわ」

海と山を繋ぐ月の姫にして依姫の姉——綿月豊姫はうんうんと頷いていた。

「いえお姉さま、私としてもこんな予定では……」

「そう！ このレミリアとよっちゃんは激闘を繰り広げた好敵手^ととして友誼を結んだのよー」

「よっちゃん!? なにその呼び方！ 姉である私を差し置いてそんな愛称を許すなんてずるいわよ、依姫ー」

「いや、許したというか、許させられたというか……」

「まあまあ、そのあたりの話は酒でも飲みながら話そうじゃないか。まずは乾杯というぜ」

「なんであなたが仕切ってるのよ」

魔理沙と霊夢は勧められる前に勝手に席に座っていた。

「あんたたちはどこでも平常運転ね」

「咲夜の主には負けるぜ」

「魔法使いさんの言う通りね。まずはこの出会いに乾杯といきましょう」

「うむうむ。話せるわね、豊姫。さあ、我が紅魔館からヴァインテージ物（咲夜製）のワインを出すわよ」

「ええ！ 依姫負けちゃったの!？」

「う……悔しいですが、不覚を取りました」

「とはいえ戦績で言えば一勝二敗で私たちの負け越しだな。三戦目でようやく一勝と
いったところだ」

「それでも凄いわよ。てつきり侵入者を全員叩きのめしたのかと思ってたから」

「ぐぬぬ……。そのうち借りは返しに行きますからね」

「え!? ……う、うん。いつでも歓迎するわ」

「それはいいわね。私も八意様に会いたいし、そのときは一緒に行くわ」

「永琳は地上に逃亡中で追われる身なんですよ？ 気軽に会いに来ていいの?」

「もちろん、本当はよくありません。八意様の討伐は月の使者のリーダーである私たちの
仕事の一つでもありますので」

「ま、しよせん建前で、そんな日は永遠に来ないけどね。バレなければいいのよ」

「そう……」

意外とゆるゆるな月の姫たちにやや呆れ気味のレミリア。

「そういえば魔理沙は?」

靈夢がきよろきよろと見渡すが、白黒魔女はいつの間にか姿を消していた。

「この館を宝探^{探検}ししてくるって出ていったわよ」

何でもないように咲夜が報告する。

「初対面の相手の家でもこれか。あんたも止めなさいよ。家主を怒らせて月から帰れなくなっても知らないわよ」

「まあ流石の魔理沙も限度は弁えてるでしょ」

「弁えてると思う?」

「……」

皆で気分よく酒を飲んでいる間に外はすっかり暗くなっていた。

ぼおつと窓の外を見ていたレミリアが、唐突にひらひらと手を振る。

まるでそこに知り合いでも見つけたかのように。

——

——綿月姉妹の家に滞在二日目

レミリアと魔理沙は月の都を探検。

咲夜はお土産になりそうなものを探して出歩いていた。

その間、霊夢は依姫と共に各地で神降ろしを披露していたが、一人だけ仕事をさせられてかなり不満そうだ。

「中華風の建物が多いけど、たまに惑星フリーザにあるような未来的な建造物があるのが面白いわね」

適当に探索しているようで、実は運命を操る程度の能力を使つて、面白そうな道を選んでいたレミリアは、いつしか人気のない場所に入り込んでいた。

やがて辿り着いたのは大きな建物。

入り口には門番の姿もあつたが、透明化魔法^{レムオ}を駆使して難なく突破している。

「ずいぶんと緩い警備ねえ。まあ、侵入者なんていないんだろうけど」

実際、この建物が建造されてから侵入者は元より関係者以外で近づこうとする者すら一人もいなかった。門番の配置もほぼ形式的なものと誰もが考えていたくらいだ。

建物の中に入ると、横幅の広い廊下が続いている。

左右にドアもなく、奥まで一本道のようなようだ。

「変な建物ね。けどちよつと永遠亭に似てるかも?」

レミリアが長い廊下を進んでいくと、最奥に一つだけ大きな部屋を見つけた。豪華な作りだが、入口が鉄格子で封じられていることから牢屋だと思われる。

「この建物にある部屋がこの牢屋一つ?」

「……玉兔以外がここに来るとは珍しいな」

その声は牢屋の奥から聞こえた。目を向けると人影が見えるが、御簾のようなもので遮られて姿はわからない。ただ、声色からすると女性のようだ。

「月の都にも罪人はいるのね」

「私ほどの罪人は珍しいがね。そのようなことを言う貴方はもしや地上の民なのか？」

「そうよ」

「地上の民がここまで入り込むとは驚いた。いったいどうやって私のもとまで辿り着いたのだ？」

「運命の導くままに」

「詩人だな、地上の者よ」

「私はレミリア・スカーレットよ。レミリアでいいわ」

「レミリアか。私は×」

「ふむ？」

「レミリアには慣れない発音だったかな。地上の者からはこう呼ばれることもある——

——『嫦娥』と」

第二十二話 『月の異変（エピローグB 帰還）』

「レミリアさんたちがロケットで月に行ってから早25日。いまだ帰ってこないのは……やはりそういうことでしょうか」

射命丸文は月での体験を記事にしようとして紅魔館前で待ち構えていたが、いつまでたつてもレミリアたちが帰ってこないのを諦めムードになっていた。

陽気な烏天狗には珍しく、やや寂し気に独り言を続ける。

「次の新聞のタイトルは決まりましたね。『吸血鬼一派、スペースデブリになる』――

――知った相手がいなくなるのはいつになっても悲しいものですねえ……」

「お前をスペースデブリにしてやろうか？」

「!？」

バツと振り向けば、そこにはレミリア、咲夜、霊夢、魔理沙（十妖精メイドたち）が勢ぞろいしていた。海と山を繋ぐという綿月豊姫の能力で幻想郷まで送ってもらったのだろう。

「おお！ レミリアさん。私は無事を信じていましたよ」

「あんた、さっき私たちは宇宙のチリになった的なこと言ってたじゃない」

「あやややや。誰ですかそんなことを言ったのは？ ひどい話ですね〜」

「……つたく、まあいいわ。まずは美鈴たちに無事の帰宅を知らせないとね」

「じゃあな、レミリア。帰還記念パーティーの時間にまた来るぜ」

「良いものを食べさせなさいよ」

魔理沙と霊夢は一度、自宅に戻っていった。

——

「お帰りなさい！ お嬢様！ 咲夜さん！」

咲夜に代わって館内の取りまとめをしていた美鈴が出迎える。

「ただいま。留守番ご苦労様、美鈴」

「ただいま、美鈴。私とお嬢様がない間に問題はなかったかしら？」

「ここ最近は何さんが毎日様子を見に来る以外は侵入者もなく平和そのものでした」

「あなた毎日来ていたんですか？ 暇ですね」

「スクープを独占するために、誰よりも先に接触する必要がありますからね」

「お前も相変わらずだな」

——実はちよつと心配してたとか？ この烏天狗に限ってそんなわけないか。

「月はどんなところだったの？」

フランドールが興味津々でレミリアと咲夜に問いかける。

パチュリーもさすがに月には興味があるようで、じつと二人の話聞いていた。

「月自体は静かなところだったわ。広い海には生き物一匹いやしない」

「ただ森の木には桃が生っていて、鳥の姿も確認できました」

「ふむふむ、なるほど！」

やつとインタビューが出来た文は猛烈な勢いでメモをしていく。

「さほど刺激的なものはないけど、フランも一度は行ってみるといいわ」

「そうだね。次の機会があれば行こうかな」

「月の姫二人とは友達になったから、そのうち遊びに来るかもね」

「へえ〜」

「レミリアさん！ そのときは是非私を呼んでくださいね！ 取材したいので」

「嫌よ。幻想郷にマイナスイメージを持たれるじゃない」

「ひどい！」

——月からの帰還記念パーティー会場

「久しぶりだな」

「ええ、お久しぶりね、吸血鬼さん」

レミリアと幽々子が挨拶を交わすが、妖夢は焦ったような顔をしている。

実は紫の策によって白玉楼の主従は月の都に潜入していた。

そのことは永琳や綿月姉妹にも気づかれていない。

ただし、綿月の屋敷に滞在しているときに、レミリアだけは二人の姿を目撃しているのだった。

(霊夢も視界には入れていたが、はっきり幽々子たちとは認識していない)

「どこまで分かっていたの?」

「なんのことだ? ハッキリ言ってもらわないと分からないな」

幽々子が問いかけてもレミリアはニヤリと笑って返すだけだった。

「まあ、どうでもいいじゃないか。互いに好きにやっていただけだろう。なあ、紫?」

幽々子の後ろから紫と藍もやって来た。

「ふふ……そうですね」

紫も笑って返すが、それはいつもの胡散臭い笑みではなく、悪戯が成功した子供のような笑みだった。

「ま、それもそうね」

幽々子もそれ以上の追及はせず、おっとり微笑んだ。

「それでよっちゃん——綿月依姫とスペルカード戦をすることになったのよ」

「いや、手強い相手だったな。この百戦錬磨の魔理沙さんが負けるとは思わなかったぜ。まさかマスタースパークを斬るとはな」

「ほう……。あれを斬るとは凄いです。一度、腕試しをしてみたいですね」

同じ剣士として興味を引かれる妖夢。

「お前みたいな殺し屋とは会いたくないと言っていたぞ」

「誰が殺し屋ですか！」

「次に会ったらスピード重視の戦法で再戦を挑むぜ。パワーは向こうでもスピードは私の方が上だからな。なにせ私は世界一だから」

「おや？ それを言うなら世界二では？」

スピードに自信のある文がそれを訂正しようとする。

「いやいや、私はこの星で唯一、空を超え月に至った人間の魔法使い。それ以外のスピード自慢はすべて二番手以下だぜ」

「——その挑戦受けました。オマケでロケットに乗せてもらえた分際で増長しているよ

うですね」

「挑戦とは格下がするもんだぜ。私は受ける側だ」

バチバチと火花を散らしながら外に出て行った魔理沙と文。

「何してるのあいつら」

霊夢は呆れて見送った。この巫女には宴会の酒と食事の方が重要そうだった。

「その劍士さんに魔理沙は負けたとのことですが、他の三人はどうだったんですか？」

「咲夜も負けたけど、私は戦ってないわ。その前にレミリアが暴れまくって依姫も消耗してましたね」

「仕方ないだろう。あれくらいじゃないとよっちゃんには勝てなかったぞ」

それを聞いた紫がブホッと酒を嘔き出した。

「ゴホツゴホツ——！」

「紫様大丈夫ですか？ そんな強い酒でもないのに珍しいですね」

藍が微妙にズレた心配をしているが紫はそれどころではない。

「ちよ、ちよつと待って、レミリア。あなたはあの月の使者に勝ったというの？」

「まあ何とかね」

「さすがはお嬢様だと、感激で震えました。あの戦いは何度見ても飽きません」

「ねえ咲夜、まさかまた録画とかしてないわよね？」

咲夜はにっこりほほえんで答えない。

「ええ、この従者……」

トントンと紫が咲夜の肩を叩いてこっそり呼ぶ。

「（ねえ、メイド長さん。もし録画してるなら私にも見せてくれない？）」

「（ダメです。私の宝物ですから）」

「（お礼はしますので、そこを何とか……）」

紫と咲夜が密談を始めていると、新たに宴会に呼ばれた者たちがやってきた。

蓬萊山輝夜と八意永琳の二人だ。

「四人とも無事に月から戻って来たようですね」

「なかなか楽しかったぞ。お陰様で月の都にも入れたしな」

「それは良かったです」

「お待ちしております」

紫は行儀よく二人を出迎える。

「今日はこういう風の吹き回しかしら？ 八雲紫」

「普段の労をねぎらい、お酒でもと思いまして」

紫は不気味な笑みを浮かべ、永琳を伴って移動する。

「あなた月の都に入ったの？ てつきり手前で追い返されるだろうと思ったけど」
輝夜が意外そうにレミリアに問いかける。

「番人の依姫やその姉の豊姫と仲良くなつてな。私だけでなく四人全員で都に滞在していた」

「へえ。豊姫はともかく、あの堅物の依姫とよく友達になれたわね」

「まあ、一度スペルカード戦をすれば友誼を結ぶのは簡単だ」

「そういうもんかな。けど、月の都なんて地上と比べたら刺激もないし、退屈だったでしよ？」

「たしかに刺激は少ないし、ずっといると飽きそうだが、10日程度の観光にはちようどよかったよ」

そのうち紫と酒を飲んでいた永琳がやって来たが、何やら顔色が良くなかった。

まるで人間が未知の怪物に出会ったかのような雰囲気であり、月の頭脳とまで呼ばれる彼女にしては珍しいことだった。

——どうやら紫の思惑通り、永琳に一杯食わせたようね。

幻想郷は妖怪と人間の世界である。

妖怪は人間を襲い、人間は妖怪に恐怖し、退治する。

しかし永遠亭の月人は人間社会で生きることを選んだにも関わらず、妖怪に恐怖しい。それは納税の義務を果たしていない状態だ。

そこで紫は今回の月の異変を通じて永琳から徴税したのだ。

正体の判らない者への恐怖という形で。

「そういえば穢れなき月の都の割に、普通に牢屋があつたのは意外だったわね」

「牢屋？ そんなのあつたかしら」

「……！ まさか……」

輝夜はピンときていないようだが、永琳は何かに気が付いたようで、驚いてレミリアの方を向く。

「あんた私が仕事させられている間に、そんなところにも行つてたの？」

「ふふふ、まあな。牢屋とはいっても大きな建物に囚人一人という変わったものだったが」

「レミリア……まさかとは思うけど、その牢屋の中に入ったの？」

囚人が一人だけの建物。永琳にはそれに思い当たる節があつた。

だが、本来は地上の民が入れるところではないはずだが――

「牢屋というか、建物の中には入つたぞ。その囚人とは鉄格子を挟んでいろいろ話をしたな」

「ええ……」

「警備にも止められることもなく、ひょいっとね。なかなか話せるやつだったわよ、その囚人——嫦娥は」

「嫦娥……」

その名を聞き、さすがに輝夜も驚愕を隠せない。

玉兎たちの真の主にして、自分や永琳と同じく蓬莱の薬を飲んだ罪人。

また、彼女を恨む神霊などが月の都を襲撃する理由にもなっている、いろんな意味で月における重要人物。

その話を聞いて頭が痛くなってきた永琳は月夜見に警備体制の問題について手紙を送ろうと考えていた。

一応、レミリアは透明化魔法なども使っていたが、それを差し引いても緩い警備だったことは間違いない。

「嫦娥ねえ」

何気なくレミリアから月の重要人物の名を聞いた霊夢。

本来の歴史ではここで彼女が知るはずもない名前だった。

これが未来にどのような影響するのかは誰にもわからない——

第二十三話 『風神録異変 裏ボス（前編）』

「今日も平和ね……」

月から帰って以降、レミリアはだらけていた。

目標としていた綿月依姫との戦いに勝利したことで燃え尽きた——とまでは言わな
いが、気が抜けていることは間違いない。

「思いつきり緩んでいるわね」

その親友の姿に嫌そうな顔をするパチュリー。

「永夜異変からの野望だった月に行ったことだしね。いまは充電期間というわけよ」

「無駄にハイテンションなのも面倒だけど、明らかにやる気のない姿を見せられるのも、鬱陶しいわね」

「ひどい言い草だな、パチエ」

——ま、たしかに緩み過ぎるのも良くないけどね。修行をさぼっていると、よつちや
んが再戦に来た時にポコポコにされてしまうわ。

「あ、そうだわ」

「なに？ また妙なことを思いついたの？」

「ほら、妖怪の山。あそこに新しい神社ができたらしいじゃない？」

「ああ、前に烏天狗から聞いたわ。私たちみたいに外の世界からやって来たそうね」

「そうそう。でも無礼なことに私に挨拶に来てないのよね。ここは一度、ガツンと礼儀を教えてあげるべきだと思おうでしょ？」

「思わない。余計な騒ぎを起こさないで」

「ノリが悪いわね」

「だいたい、あの神社にはかなりの格の神が二柱もいるらしいわよ。わざわざ、吸血鬼なんか挨拶に来るわけじゃないでしょ」

「うぐ……そこは幻想郷の先輩としてね」

「新しい神社は妖怪の山の頂上付近にあるそうよ。勝手に入ったら天狗が騒ぐわよ」

「ふっふっふ、そこは大丈夫だ。伝手があるからな」

———

——人里

「——それで私に頼みに来たわけですか」

「そう、妖怪の山でも古参の文なら簡単でしょ」

レミリアは人里をうろついていた射命丸文に神社への案内を頼んでいた。

「簡単ではないですよ。勝手に余所者を入れると、私が怒られるんですから」

「私は隠れてついていくから、あなたは先導してくれるだけでいいわ」

「ええ、どうしようかな？　もう少し私への扱いが良くなるなら考えないでもないですけど？」

文はニヤニヤしながら、ここぞとばかりにレミリアに待遇改善を要求した。

——イラッ！

「あれあれ？　そんな態度でいいんですかね？」

—— Be Cool……！ Be Coolよ、レミリア。頼みごとをしているのはこっち。烏天狗の態度がウザイのは間違いないけど。

「……わかったわ。次に紅魔館に来るときは賓客として迎えると約束しましょう」

「むふふ、悪くないですね。でももう一声！」

「月から友人たちが来た時の独占取材権！」

「乗った！」

レミリアと文が道端でわちゃわちゃしていると、注意する者があった。

「お前たち、往來の真ん中で騒いで迷惑になっているぞ」

「おや、失礼しました慧音さん。話が盛り上がって気が付きませんで」

二人に声をかけてきたのは寺子屋の教師、上白沢慧音。彼女は白沢と人間のハーフだが人間の味方であり、人里を脅かす者に目を光らせている。

「烏天狗の新聞記者。いくらお前が里に慣れているとはいえ、妖怪を怖がる人間は大勢——」

そこまで言ったところで、レミリアの姿を見て言葉を止めた。

「お前……そうか！ あの夜に会った紅魔館の吸血鬼！」

「正解よ、ワーハクタク」

「レミリアさん、慧音さんと知り合いませんか？」

「前に一度、咲夜が弾幕ごっこをしてね。私は見ているだけだったけど」

「そうなんですか」

「人間に化けて今度は何を企んでいる？」

「文を探しに来ただけよ。あなたと会った夜も別に里には何もしなかったでしょ」

「……まあそうだな」

「どうした慧音。なにか厄介なことか？」

慧音に続いて現れたのは、腰よりも長い白銀色の髪をした女性だ。下にはもんぺのような赤いズボンをサスペンダーで吊っている。

「妹紅か。いや、問題はないようだ」

「あら、肝試しのときの人間じゃない。こんなところで奇遇ね」

「ん？ お前は——あのときの妖怪!？」

彼女は藤原妹紅。

蓬萊山輝夜の喧嘩友達で、永遠亭での宴会の夜にレミリアたちと戦った。そのときは妹紅対8人（レミリア・咲夜・霊夢・紫・魔理沙・アリス・幽々子・妖夢）という多勢に無勢だったの、ひどいことになった。

「意外と知り合いが多いですね、レミリアさん」

「まあね」

「ここで会ったが百年目！ この間の借りを返すぞ！ さあ、勝負だ!」

「なにを言ってるの。こんなところで戦ったら周りの迷惑よ。そうでしょ？ 慧音先生」

「え、あ……ああ、そうだな。ダメだぞ、妹紅」

「お………そうか、そうだな………?」

「………（レミリアさんには周りの迷惑とか言われたくないですねえ）」

「じゃ、私と文はもう行くから」

「ああ、そうか………」

「——いや、ちよつと待て！」

「人里の外まで追いかけてきて、どうしたの？」

「どうしたじゃない！ この前の借りを返すと言っただろう！」

「あのときは輝夜が肝試しをしましょうって誘うから8人で行ったのよ。文句なら輝夜に言つて」

「輝夜！ やはりあいつの嫌がらせか！」

「分かったならもういいわね。私たちはこれから妖怪の山に登るから忙しいのよ」

「なに？ 妖怪の山……あそこにか……」

「なにか気になることでもあるんですか？」

「……ちようどいい。私も同行させてもらおう」

「は？ なにを言っているんですか？」

「あの山に住む不死を司る神——石長姫に用があつてな。天狗や河童が入れてくれないから困つてたんだが、烏天狗が一緒なら大丈夫だろう」

「いやいや、待つてください。そんな勝手に——」

「いいんじゃない？ せっかくだし、三人で行きましょう」

「よし、決まりだ」

「ちよつとー!？」

結局、妹紅も一緒に妖怪の山に行くことになった。

――

――妖怪の山

「ここが妖怪の山か」

「悪くないところね」

「なぜこんなことに……」

レミリアと妹紅、そして文は妖怪の山の麓に堂々と立っていた。

最初は文が先導してレミリアは隠れてついていく計画だったが、妹紅は蝙蝠変化も透明化も出来ないの、結局は正面から行くことになった。

「ほら行くわよ。あなた妖怪の山の重鎮なんだから、誰もその歩みを邪魔しないでしょ」

「古株ではあっても重鎮じゃないですよ。ああ、絶対後で怒られる」

「苦情は私に挨拶に来ない守矢神社とやらに出しといて」

「そんなことしたらまた揉め事になりますよ」

「このまま山頂まで行くのか？」

「いや、中腹より上の天狗の縄張りに入ったら流石に止められるでしょ」

「わかってるじゃないですか。策はあるんですか？」

「そうね……。たしかここにはあの便利屋たちも住んでたわよね？」

「おや、よくご存じですね。なるほど……。都合の良い道具を譲ってもらおうというわけですか」

「便利屋……？」

一行は妖怪の山を進み、未踏の渓谷までやってきていた。

そこにいる便利屋——幻想郷の技術者集団である河童から姿を誤魔化せるアイテムを入手するためだ。

——ここまでは割と簡単に來れたわね。文と一緒にいるからか秋姉妹や厄神さんが絡んでこなかったのもあるか。

「光学迷彩ーっ」

「ほほう、お目が高いね。けどお値段の方はちよつと張るよ」

レミリアと商談しているのは河童の河城にとり。河童というが、頭は青髪のツインテールに帽子を被せているため、皿があるかどうかは見えない。背中には甲羅の代わり？にリュックサックを背負っているので、種族は言われないとわからないだろう。

「コーがくめーさい？　なんだそりゃ」

「姿を消せる道具よ。半分冗談だったんだけどね。いくら河童とはいえ驚いたわ」

「当然さ。私をそこらのモブ河童と一緒にしないでもらおうか。この河城にとりに作れないものなど、あんまり無い！」

「どこかで聞いたような台詞ねえ。ところでおいくらかしら？」

「うくん、試作用の光学迷彩スーツ一着で530000円つてところかな」

「たつか!? ぼったくりだろう！」

「いやいや、私の超技術が入った最新の発明だからね。本来は100万以上は確実なんだけど、ちょうど試作品をいくつか作ったところだから、大サービスしてるよ」

「試作品つてことだけど、ちゃんと作動するんでしょね？」

「ああ。テストは終了してるから問題ないよ」

「なら、買うわ。今は手持ちがないから後払いでお願いね」

「ええく？ お嬢さん、このへんで見ない顔じゃないか。そんな相手に後払いはちよつとね」

「そこは大丈夫。この射命丸文が保証してくれるわ」

「文さんが? ……まあそれならいいか」

「すいませんね、にとりさん（後でちゃんと払ってくださいよ、レミリアさん）」

「（私の名に懸けて約束しよう）」

「おいおい、そんな簡単に……。金持ちなのか？ レミリア」

「このくらいポンと出せる程度には余裕があるわ」 ※ 後でパチュリーに叱られます

「そうなのか……」

「ではこちらが商品になります (レミリア？ どこかで聞いた名前……)」

———

妖怪の山を登っていくと、雄大な滝が流れる地に辿り着いた。

九天の滝と呼ばれるここは天狗のテリトリー内だが、特に妨害を受けることもなく進んでいく。

『こちらを伺う気配を感じるけど、邪魔しては来ないわね』

『さすがに仲間の烏天狗にはいちいち絡んでこないか』

一見、文が一人で見えるように見えるが、レミリアは蝙蝠になって文の肩に、光学迷彩で透明になった妹紅はその後ろをついてきていた。

「ここが九天の滝です。気づいていると思えますが、すでに天狗たちに捕捉されています。迂闊な行動は控えてくださいね」

『わかったわ』

『ああ』

途中で哨戒天狗に道を塞がれる——ということもなく、三人は無事に山の上の神社まで辿り着いた。

「ふうー、何とか誰にもバレずに来ましたか。おかしいですね、烏天狗の私が妖怪の山を登るのに緊張するなんて」

『意外とすんなり来れたな』

『ふっ、私の計算通りね』

「あの神様たちに余計な接触はするなど、誰かに止められるかと思いましたが、特に制止は入りませんでしたね」

集団行動を得意とする天狗だが、普段から一人で好きなどころに行っている文だったので、仲間の天狗たちにはいつものことかとスルーされた。

『さて、第一印象は大事だからね。一発かましてやるとするかな』

「ちよつと、レミリアさん？ 神社に攻撃とかしないでくださいよ」

『私をなんだと思ってるんだ。そんなことしないわよ』

「あなたには色々と前科がありますからね」

レミリアたちが神社の前で立ち止まっていると、中から一人の少女が出てきた。

緑色のロングヘアーで頭には蛙と白蛇の髪飾りを付けている。特徴的なのは服装で、腋が丸出しの巫女服——それらを纏めてぎつくり言えば色違いの博麗霊夢。

「おや、誰かと思えば文さんじゃないですか」

「こんにちわー、早苗さん。清く正しい射命丸文です」

「今日はどうしたんですか？」

「是非あなたたちに会いたいという方がいまして」

「おお！ 入信者ですか？ それは素晴らしい。いったいどなたでしょう？」

『私だ』

「え？ 今の声はどこから……？」

『ふっふっふっふっふ』

「誰!? 姿を見せなさい！」

『いいだろう』

そう言うのと蝙蝠は文の肩から飛び立った。

「!？」

カッ！

蝙蝠は紅く輝くと一瞬で元のレミリアの姿を取り戻した。

「生憎だけど、入信者じゃないわよ」

「蝙蝠が女の子になっちゃいましたよ!?! 貴方は一体……?」

「私は紅魔館のレミリア・スカーレット。吸血鬼の女王だ」

「吸血鬼! 実在していたんですね!」

「実在しているに決まっていますだろう。西洋諸国の夜を恐怖で支配した我らだぞ」

「それで吸血鬼——レミリアさんは守矢神社にどんなご用でしょうか?」

「簡単な話だ。お前たちが幻想入りしてそれなりに経つが、一向に私に挨拶に来ないじゃないか。そこで仕方なくこちらから来てやったというわけだ」

「え? 幻想郷に来たら貴方に挨拶に行かないといけないんですか?」

「当然だ。なにせこのレミリアは幻想郷の裏ボスだからな」

「う、裏ボス!?! 隠しボスということですか!?!」

「そういうことだ」

『おい、文。レミリアたちは何を言っているんだ?』

『さあ? 外の言葉はときどきよく分からないことがありますね』

「幻想郷の表のボスが霊夢さんで、隠しボスは紫さんかと思ってきましたが……」
「それは素人の考えね」

「でも隠しボスって普通はどこか人目につかない場所に潜んでいるものでは？」

「うむ、その通りだ。今回は特別だな」

「そうですか、特別……ふふ、そうですか」

早苗はレミリアの登場に興奮していた。外の世界ではゲームを好んでやっていた早苗にとって隠しボスというワードは琴線に触れるものがあつたようだ。

「さて、そろそろお前の名を聞こうか」

「おっと、名乗りが遅くなり、失礼しました。私は東風谷早苗。守矢神社の風祝（かぜはふり）です」

「そうか、早苗よ。これからすることはわかるな？」

「ええ。私もここでの挨拶の仕方を学びました——目と目が合ったら弾幕ごっこ！」

「そう！ この幻想郷では常識に囚われてはいけないのだ！」

第二十四話 『風神録異変 裏ボス（後編）』

「さあ！ 守矢の風祝とやらのチカラを見せてみる！」

開始早々、レミリアは大量に紅色の弾幕をばら撒いた。一斉に放たれた紅弾は妖怪の山の空を紅く染めんばかりだ。

「さすがは隠しボス！ 通常攻撃でこれですか！」

すかさず早苗もお守り型の弾幕で迎撃する。レミリアの紅弾は無作為に放たれるものが多く、自身に迫るものを集中的に撃ち落として突破を図った。

「いいですよー！ 紅魔館の当主VS守矢の現人神！ これは良い記事に——!？」

烏天狗が平常運転でシャッターを切っていると、いくつかの紅弾が飛んできた。

「うおおお!？」

「チツ」

夢中で写真を撮っていた文だが、自慢のスピードで辛うじて弾幕を回避する。

「ちよつと、レミリアさん！ ヒドイじゃないですか！」

「すまん、偶然そつちに逸れたようだ」

「嘘！　嘘です！　〃チツ〃　つて舌打ちが聞こえましたよ！」

「聞き間違いだらう」

——秘術「グレイソーマタージ」

文と騒いでいたレミリアに容赦なく早苗のスペルカードが襲い掛かる。

「！」

「余所見とは油断しましたね！　もらいました！」

降り注ぐ星形の弾幕。

タイミング的に回避は難しいように思われたが——

「油断？　これは〃余裕〃というものだ」

命中する寸前でレミリアは真下に急降下した。

「えっ、逃げ場のない地面に？」

レミリアはそのまま錐もみ回転をしながら、地面を砕き、土中に飛び込んだ。

「ええ！　それありですか!?!」

レミリアが激しく地中を掘り進む音が聞こえ、地面は振動で揺れ動く。

「モグラか、あいつは」

「吸血鬼、次に狙うのは地下帝国の建設か!? この見出しは目を引きますよー!」
妹紅が呆れているが、文は記事のネタにすることしか考えていない。

「ど……どこから来ます……はっ、そうです!」

——開海「海が割れる日」

早苗は巨大な波を生み出し、レミリアが開けた穴に注ぎ込んだ。

「どんどんいきますよー!」

大量の水が土中に流し込まれ、逃げ場をなくす。

掘り進んでいるレミリアが水流に飲み込まれるのは時間の問題と思われた。

「さあ、このままだと水没しますよ」

十分な水を流し込んだ早苗は、タイミングを見計らって霊力を溜めていた。

しばらくじっと待つが、ついに地面の一部が割れて、水が噴き出す。

「そこです!」

ドオオオン!

水に続いて地中から何かが飛び出すが、それを待っていた早苗がおみくじ爆弾を命中させた。

「やりましたか!」

爆発の結果を確認しようとする早苗だが、そのとき別の地面が割れ、中から水流と共にレミリアが飛び出した。

「プハーッ！」

「え!？」

レミリアは全身ずぶ濡れだが、特に負傷は見られないようだ。

「なるほど。最初に飛び出したのはレミリアでなく投げた槍で、そっちを囿にしたわけか」

「あの短い時間でよく考えたものですねー」

解説者に回っている妹紅が誰に聞かせるともなく説明する。

文はいうまでもなく実況ポジションだ。

「なかなかやるな、早苗よ。風祝という割に水を操るとはな」

「……私が仕える八坂神奈子様は風雨も司っていますから」

「ほう、それでか」

「私が奇跡を放てば貴方は必ず一撃で負けるでしょう。だから貴方の技をすべて見てからでも遅くはない……」と思っていましたか」

「どこかで聞いたような台詞。いや、聞いてないか」

「生憎ですが、晩御飯の時間が近づいてきました。そろそろ終わりにしましょう」

「ふ——いいだろう。では私も博麗の巫女を震撼させたスペルカードをお見せしよう」

そう言いながらもレミリアは腕を組み、静かに早苗の動向を伺う。

「刮目しなさい！ これが現人神の——奇跡を起こす神の力です！」

——奇跡「客星の明るすぎる夜」

大いなる奇跡が妖怪の山の空を照らし、レミリアもその光に飲み込まれる。

「むっ——！」

「あつはつはつは！ 種族を教えてくださいましたのは失敗でしたね、レミリアさん！ 日光が吸血鬼の弱点なのは外の世界でも有名な話ですよ！」

「——残念だが早苗」

「え？」

夜をも照らす輝きに包まれたはずのレミリアだが、光の檻を破り、悠然と現れた。

いまだ腕は組んだままで静かに早苗を見つめている。

全身から紅いオーラのようなのが立ち昇り、それが身を守っているようだ。

「あ……あれ？ 倒れていない?？」

「キサマのそのスペルは既に私が1年前に乗り越えたものだ」

「ちよつとー！ 光を克服するなんて反則ですよ！ 様式美！ 吸血鬼の様式美はどこに!？」

「様式美を抑えつつ、そこから更に先を進むのがこのレミリアだ」

——息符「輝く息」

レミリアは全身を震わせ、冷たく輝く息を吐いた。

凄まじい極低温が大气すら凍らせる。

「ひあああああー!」

完全に勝った気になっていた早苗は猛吹雪の直撃を食らい、一瞬で氷漬けになってしまった。

「現人神の氷像。紅魔館のエントランスにでも飾っておこうかしら」

——

「うわー、容赦ないですね、レミリアさん」

「おいおい、大丈夫なのか、あれ」

「カチコツチンになつてるけど、中身まで凍らせたわけじゃないわ。仮にも神を名乗るならこれくらい平気でしょ」

「無事だとしても、神社の巫女つぼいのを倒してしまつていいのか？」

「そうですね。守矢神社の二柱が怒りそうです」

「大丈夫、大丈夫。これくらい挨拶みたいなものよ」

「早苗ー、なに騒いでるの？ お腹すいたよ。そろそろ晩御飯にしよう」

騒ぎを聞きつけたのか、神社の中から何者かがケロケロとやってきた。

頭には目玉が二つ付いた帽子を被つており、どこが動作がカエルつぼい。

——八坂神奈子じゃなくケロちゃんが出てきたか。

「さな……え？」

カエル少女は早苗を探していたが、氷像になつているのを見て驚きで固まっていた。

「早苗ー！ なんて凍つてるのー！ まさかチル[＊]ル^精ノにやられたのか!？」

「これは、諏訪子様。チルノさんではありませんよ」

「そう、それは私たちとの弾幕ごっこの結果ね」

「ああ？ お前たちが……？」

大事な神社の仲間にして家族の早苗が氷漬けという目にあわされて、カエル少女は静かに激怒してレミリアたちを睨みつけた。

「ちよつと、レミリアさん。その言い方だと私たちまで——」

「……お前、烏天狗の新聞記者じゃないか。天狗は守矢神社を敵に回すつてことかい？」
「いやいやいや、違います、違います」

「私は紅魔館のレミリア・スカーレット。どうやらあなたも守矢神社の一柱らしいわね」
「紅魔館……？ たしか吸血鬼の住まう館だったか。それで何で早苗を氷漬けにしたんだい？」

「なに、軽い挨拶代わりさ」

「……へええ。なら、私からの挨拶も受け取ってくれるかな？」

「いいだろう。だが私はさつきやったから、次は別の者に代わるわ——さあ、やってやりなさい！ もこたん！」

「も、もこたん!? というか何故私が？」

「文はあまりやる気なさそうだしね」

「私がやると守矢神社と揉めるので勘弁してください。さすがに天狗の一員としては介入できませんよ」

「なんだ、仲間割れかい？ 私に怯えているのか？ だとしても……許さないよ」

騒いでいるレミリアたちを巨大なカエルのようなオーラを出して威圧する諏訪子。

「ほほう……さすがの神力ね」

「——ガキンチョが生意気言いやがって。神だか何だか知らないが、あまり粹がると火傷するぞ」

威圧してくる諏訪子だが、百戦錬磨の妹紅は意に介さずに睨み返した。

——おお、さすがもこたん。趣味で月人と殺し合いをしているだけあるわね。荒ぶる神にも怯まないか。

「が、ガキンチョだと！ 私が誰かわかって言ってるのか!？」

「知らん。誰だ？」

「私は洩矢諏訪子！ この守矢神社の真なる祭神さ！」

「ふくん」

「リアクション薄っ！ もっと畏怖するか、敬うかあるでしょ！」

「その見た目で畏怖しろって言われてもなあ」

「ふ、ふふ……初めてだよ。この私をここまでコケにしたのは」

「文句があるなら弾幕で語れ！ 妹紅はそう言っているわ」

「言っていないだろ。いや、まあいいけどさ」

「上等さ！ かつては崇り神として一国を支配した私のチカラ、見せてやろう！」

諏訪子も妹紅も引かず、レミリアも煽ることはいよいよ二人が弾幕ごっこを開始した。

この事態に文は一刻も早く騒ぎを収めようとする……はずもなく――

「これは素晴らしい！ 普段はあまり表に出ない守矢神社の謎の神VS迷いの竹林の不死鳥！ ここまで案内してきた甲斐がありました――って、あれ？ レミリアさん、凍った早苗さんを持ってどこに行くんですか？」

「神社の中」

――

レミリアは守矢神社の台所に来ていた。

「お、さすがは外の世界から来た神社ね。現代のキッチンが並んでいるわ。電力は河童から融通してもらってるのかしら？」

我が物顔でヤカンに水を入れ、火をつけて沸くのを待つ。

外からは妹紅と諏訪子が激しく戦う音が響いていた。

「私が炎で溶かしてもいいんだけど、失敗したら焼き早苗になっちゃうからね」

ヤカンの水が沸騰したら、凍った早苗の頭にトクトクとかけ出す。

何度かそれを続けていると段々と早苗を覆う氷が溶けていく。

「——あつ、あつつい！ 顔が！ 顔に熱湯があああ！」

「お、溶けた♪」

顔の氷が溶けたことに気をよくしたレミリアはそのまま体にも熱湯をかけていく。

「しづきが顔に！ 出れる！ 自分で出れますから、熱湯をかけるのをやめてください
いー！」

バリバリと身体の氷を砕きながら、必死に這い出す早苗。

「復活おめでと。並の人間なら凍傷になってたわね」

「……いやいや、普通の人間なら死んでましたよ」

「さて、早速で悪いけど、ヤンチャしてる二人を止めに行くわよ」

「え？ どういうことですか？ 凍ってる間は外の情報が入ってないんですけど」

「あなたのとこのカエルの方の神が暴れているのよ」

「諏訪子様が！ いけません、あの方は正真正銘の崇り神ですよ！」

「まあその相手も只者じゃないけどさ」

「恐れ敬え！ 我こそは土着神の頂点！」

——源符「厭い川の翡翠」

早苗が生み出した水流をも超える鉄砲水が妹紅に襲い掛かる。

「常に水が火より強いと思うなよ！ 吹き上がれ！ フジヤマヴォルケイノオオオ！」

富士山の大噴火が如き炎が諏訪子の鉄砲水とぶつかり合う。

あまりにも大量の水が瞬時に蒸発した衝撃で、元々荒れていた神社の境内はさらに目も当てられない惨状となった。

「ちいっ！ 相殺しただけか。焼きガエルにしてやるつもりだったかな」

「ケロケロケロ。なるほど、言うだけの實力はあるね。だが、次こそ真なる恐怖を味わわせてあげよう」

「はん！ この私に恐怖とはな。面白いじゃないか」

「はーい、諏訪子様！ もう終わりですよー！」

「え、早苗？ 氷は溶けたの？」

「ええ、私は大丈夫です。なので弾幕ごっこはそろそろ終わりにしてください」

「そうはいかない。祟り神が舐められたまま終われないよ。早苗もいずれ完全に神にな

るならそのあたりを——」

「晩御飯抜きにしますよ」

「さあ、祭りは終わりだ！ いやーなかなか楽しめたよ、諸君」

そう言うのと圧倒的な手の平返しで神社の中に戻っていく諏訪子。

「ええ……おい、ちよつと……」

勝手に戦いを止められた妹紅は消化不良で立ち尽くしていた。

「ご苦労様、妹紅」

「おい、レミリア。あのカエル神、自分勝手にもほどがあるんだが」

「神つてのはそういうもんでしょ。さ、私たちもご飯をいただきますしよ」

「お、おう……」

第二十五話 『風神録異変 裏ボス（エピローグ）』

守矢神社の中で皆は食卓を囲んでいた。

弾幕ごっこをしてお腹もすいたので、箸も進んでいるようだ。

ちなみに前世の影響もあり、レミリアは箸を問題なく使えている。

「こら、もんぺ女。いつか決着つけてやるからね」

「上等だ。いつでもかかってこい、カエル女」

「くうう。さすがは隠しボスのレミリアさんですね。霊夢さんや魔理沙さんに敗北後は修業をしたのですが、及びませんでした」

「まだ弾幕ごっこを始めて1年も経ってないんですよ。それであれなら上出来よ」
「隠しボス？ 何のことだ、早苗？」

そう問いかけたのはこれまた変わった恰好をした女性だ。

青紫の髪にアクセサリーのように注連縄を乗せ、腰にも大きな注連縄を背負うように付けている。赤い服の胸元には首から吊り下げた黒い鏡が存在を主張する。

彼女こそ守矢神社の祭神——八坂神奈子。

「レミリアさんは幻想郷の隠しボスで普段は表に出てこないそうですよ！」

「え……そういう設定なの？」

怪訝な諏訪子に対してレミリアは適当に返す。

「普段は紅魔館地下の玉座の間で挑戦者が来るのを待っているのよ」

「おおー！ やはり！ まさに勇者を待つ魔王って感じですね！」

早苗は目を輝かせるが、諏訪子や神奈子は困惑気味だ。

「お二方、レミリアさんの話は半分くらいに聞いておいた方がよいかと」

さすがに文にツツコミを入れられていた。

「そういえば、レミリアさんは月に行っただんですよ」

「そうよ。我が紅魔館のチカラを結集したロケットだね」

「いいなー！ 次は私も連れて行ってくださいよ！」

「ま、機会があればね。何なら文と妹紅も来るかしら？ 月に興味あるでしょ」

「おお！ 是非お願いしますよ！」

「ふん、別にあんなどころに興味なんてないさ」

「とか言っただけ私たちが月に行くときは輝夜と一緒に帰るんじゃないかって、やきもきしたんじゃない？」

「な、何故それを!？」

「妹紅さん、そうなんですか？ 普段はあんなに嫌っている風なのに……ほほう、これは良いネタを手に入れましたね」

「あ……いや、違う！ 勘違いするな！」

慌てる妹紅にニヤニヤする文とレミリア。

それを見てますます顔を赤くする妹紅。

「やめなよ、早苗。月なんてお高くとまった奴らの巣窟だよ」

「え、そうなんですか」

「あ、まあ諏訪子と月の神々はあまり仲が良くないからね」

神奈子の発言を聞いてレミリアがふむと考えを述べる。

「月にはいわゆる天津神系の連中が多いから、土着神とは反りが合わないのかしら？」

「そういうことだね。私はまあ微妙なところだけど」

「——ところでレミリアさん」

「ん？」

「弾幕ごっこが強くなるにはどうしたらいいですか？」

「んー、そうですね。やっぱり場数を踏むのがいいと思うわよ。異変時の霊夢や魔理沙なんて少しでも怪しいと思ったら、いえ怪しくなくても目に付いた妖怪は片っ端から退治してるからね」

「いやいや、怪しくなくても退治するとか……。魔法使いも問題だが、それより博麗の巫女がそんなんで大丈夫なのかい？」

神としてエキセントリックなこともするが、崇り神の諏訪子よりはまだ穏やかな神奈子が霊夢の行動に疑問を唱える。

「むしろ霊夢さんの方がひどいですよ。妖怪からしたら通り魔に近いと思います」

「私からしたら霊夢もお前も通り魔だったけど……」

霊夢への流れ弾で妹紅がレミリアをチラリと見るが、本人はあさつての方を向いてとぼけている。

「なるほど……。私も幻想郷のことを学んだと思いましたが、まだまだ自身の常識に縛られていたようです」

「ちよ、ちよつと、早苗？ 常識は持っていていいんだよ。あの連中の色に染まらなくても」

「うむ、諏訪子の言うとおりだ。そう焦らずともよいだろう」

諏訪子と神奈子が心配してブレーキをかけようとするがレミリアは更に煽る。

「私が見たところ早苗は才能があるわ。強くなりたいなら常識の檻は壊さないとね」

「はい！」

「はいじゃないよ?! ちよつと、あんた！ 早苗が真っ赤に染まったらどうしてくれる

のさー！」

「ふふふ……どうするもなにも朱に交わるのは確定事項だ。私にはその運命が見えるのだから」

「運命？ なに言ってるのさ」

「そういえばレミリアさんはそんな能力でしたね。ある程度、その人の未来やら運命やらが見えるとか」

「まあね」

「ええ!? じゃあ今のは比喻じゃなくて、実際に早苗がそうなるってこと!?!」

「そういうことだな」

「!?!」

—————

レミリアたちが守矢神社に行った翌月——幻想郷の各地で異常気象が発生していた。

梅雨に入ったにも関わらず、博麗神社周辺では殆ど雨が降らなかつたのだ。かと思えば魔法の森では霧雨や季節外れの雹が降つたりと、異常気象——いや、ここまで来ればそれは異変の予兆と言つても過言ではない。

「おかしいわね。人里では普通に雨が降っているのね」

日照り続きで不機嫌な博麗霊夢は買い物をしに人里に来ていた。

「こんなところでサボってないで早いとこ解決してよね、博麗の巫女様？」

人間に化したレミリアが霊夢と並んで歩きながら異変の解決を催促する。すっかり里に慣れた感じでのんびりと団子を食べていた。

その隣には文もいて、新しいネタ集めをしているようだ。

「天気の変異……やはりここは前科持ちを締め上げるのがいいかしら。前に広範囲に紅い霧を出したバカがいたわよね？ いまもなんか霧っぽいし」

「おやおや、巫女様はまさかこんな小さな子供に手を上げるのかしら？」

ピク！

霊夢の額に青筋が浮き立っていた。

「うわあ……。レミリアさん、後が怖くないんですか？」

「ふふふ……この私に怖いものなどあるはずがないだろう？」

人里では人間の子供の姿でまぎれているレミリアなので、霊夢もなかなか手を出せない。

「あなた、覚えてなさいよ」

「ふっふっふ……」

「先月はレミリアさんや妹紅さんのおかげで良いネタが入りましたが、今月は微妙ですね。この異常気象だけだとパンチが弱いですし」

「そのうち面白い事件が起こるわよ」

「お、レミリアさんがそう言うということは。期待していいんですか？」

「事件つて例えばどんなよ？」

「巫女が嵐に飛ばされたり、神社が倒壊したりとか？」

「なるほど。やはり喧嘩を売ってるのね」

――

その後、博麗神社に帰宅した霊夢とついできたレミリアに文はそれを目撃した。

突如発生した大地震により激しく揺れ動く博麗神社。

だが、遠くを見れば何も起こっていないので、この地震は局所的に発生しているようだ。

「ゆ、揺れてる！ こんな地震は滅多にないわよ！」

「オンボロ神社は大丈夫かしら」

「なにがオンボロですって！ この幻想郷のシンボルでもある博麗神社がそう簡単に――

」

ズゴゴゴゴゴ——！

「あああああー!?」

「危ないですよ、霊夢さん！ もう少し離れましょう！」

——ゴゴゴゴ……………

博麗神社はあつけなく倒壊した。

無事なのは屋根だけで、それ以外は見事に押しつぶされてペシャンコになっていた。

「私の神社が……………」

「あーあ」

「れ、霊夢さん。気を落とさずに……………」

「……………」

俯いていた霊夢が何かをぼつりと呟いた。

「レ?」「レ」

「レミリアアアアアアア！ あんたやったわねえ!?!」

「いやいや、なんでそうなる!?!」

「さつき人里で神社を倒壊させるって言ったじゃない!」

「違うだろう。面白い事件が起こると言っただけで——」

「やっぱりあんたが犯人か！ 退治いいいいいい！」

「ああああああ——！」

第二十六話 『天界異変』

レミリアは激怒した。必ず、かの邪智暴虐の天比那名居天子人を除かなければならぬと決意した。何もしていないのに神社が倒壊した腹いせとして霊夢に退治されたのだ。

これもすべてあの不良天人が、霊夢をおびき寄せるために地震を起こしたから。

「本来の時系列だと吸血鬼のレミリアは日光を遮る物が無い天界には行けない。けれどこの私は修行により日光を克服している。これは行くしかないでしょ」
転生レミリア

そう思い立ったレミリアは妖怪の山の頂上から天界に乗り込んだ。ちなみに道中の番人などの妨害は透明化魔法や蝙蝠変化を駆使してすべて回避している。

「あれ、レミリアじゃない。やつほー、奇遇だね」

天界に到着すると昼間から飲んだくれている伊吹萃香を発見した。

「たしかに奇遇ね、萃香。どうしてここに？」

「ちよつと天界の一部を借りてね。しかし、お前さんに会うなんて思わなかったよ。

ここは吸血鬼の苦手な日の光が降り注いでるのに」

「私くらいになると日光程度どうってことないのよ」

「へええ、流石だね。わざわざ天界に来たのはあいつに会いに来たのかな？」
「そう。そいつに会いに来たのよ」

「あいつとかそいつとか、私には比那名居天子という名前があるのよ」

そう名乗りながら現れたのは刃のない柄だけの剣を携えた少女。紅い瞳に腰まで届く青髪、頭には桃の実と葉が付いた帽子を被っている。

「早速お出ましか。お前——天子が地震を起こして博麗神社を壊した犯人ね？」

「うふふ……そうよ。まさか吸血鬼が来るとは思ってなかったけど、貴方も私を懲らしめに来たのかしら？」

「そういうことね。悪戯も結構だけど、少々やり過ぎたわ。お灸をすえないとね」

「ふっふっふ、吸血鬼風情に出来るかしらね？ 生粋の天人たるこの私に」

——そういえば天子はこの段階だと手加減をしてわざと負けるんだっけ。それではつまらないわね。ここはひとつ、煽っておくかな。

「おまえを倒すなど造作もない。ついでに天界の一部をもらって私の別荘を建てるとしよう」

「は？ 別荘？」

「……なら見晴らしもいいし、悪くない立地ね」

「おおー、いいじゃないか、レミリアー！　そこで宴会もできるね！」

「そういうことよ、萃香。早速、別荘の設計図の作成をパチエにお願いしないとね」

「建造は私も手伝うよー。だから私の部屋も作ってよね」

「ええ、いいわよ」

「さっすが、話がわかるー♪」

「ちよ、ちよつと待ちなさい！　何を勝手なことを言っているのよ！　そんなの許すわけないでしょー！」

「私を呼び寄せたのはお前の暇潰しの結果だ、天子。不満があるなら力づくで止めてみるんだな」

「む……」

「それと忠告をしよう。どうやらお前は私に手加減するつもりだったようだが、本気でやった方がいいぞ。そうでなければ相手にもならない」

「な……なんですって！」

「まあ私はどちらでもいいがな。お前がやる気になろうが、どうしようが、ここに別荘を建てるのは確定事項だ」

「——！　ふ、ふふ……。たしかに博麗の巫女が来るまでは手加減をして適当にあしらうつもりだったけど、ここまで天人を馬鹿にされたら仕方ないわね。あんたはこの比那

名居天子がコテンパンにしてあげるわ！」

天子が腕を振ると柄だけだった剣から刀身が現れた。

「そうでなくては面白くない。名乗りが遅れたな。私は紅魔館のレミリア・スカーレット。闇を統べる吸血鬼たちの女王だ」

「レミリアね。私を本気にさせたこと、すぐに後悔させてあげるわ……いくわよ！」

「かかってこい、天子！」

「これが天人だけが扱える緋想の剣よ！」

ガアンツ！

緋想の剣の一撃をグングニルで弾くレミリア。

まだまだと、天子は連続して切りつける。目にもとまらぬ早業が振るわれるが、レミリアは的確にいなししていく。

「はっは！ 天人といえは軟弱な連中ばかりかと思つたが、なかなかの剣さばきじゃないか！」

「甘いわね！ たしかに天人は穏やかで平和的な者が多い。けど、迎えに来る死神を返り討ちにする必要があるから皆それなりに腕は立つのよ！ そして私はその中でも武闘派！」

「なるほどなー！」

ガアアアン！

大きく振りかぶった緋想の剣を叩きつけるが、グングニルで受けられる。そのまま鎧
迫り合いの形となり、押し切ろうとする天子だが、レミアはニヤリと笑うと口を開い
た。

「？ なにを笑って——」

訝しむ天子に向かって激しい炎が吐き出された。接近した状態から放たれたそれは、
躲す間もなく不良天人を飲み込む。

「ぎゃあああああ——!?!」

「あはははははー！」

焼き天子になって転がるさまを大笑いしながら眺める萃香。

酔っ払いにとってはこの戦いもただの酒の肴である。

「ハアツ……ハアツ……! ずいぶんと舐めた真似をしてくれるわね！」

「おや、大丈夫か？ まだ髪がチリチリ焦げているが」

「ぶっ殺す!!！」

激怒した天子が集めた気質を一気に解き放つ。解放された気質は衝撃波となり、周囲一帯に襲い掛かった。レミリアは吹き飛ばされないように、防御を固めて対抗する。

「むっ——!」

衝撃波で周囲を薙ぎ払った天子は、その余波に乗り、一息で上空に飛び上がる。

「はああああああ!!」

上空の天子は巨大化させた物体——要石を抱えてレミリア目掛けて急降下する。

「うりやあああああつ——! ぶつつぶれるオオツ!」

「おおっ! (ハルクかと思ったらD I O——!?)」

大地の力が働いているのか、凄まじい速度で落下する要石。

「ちいいいいっ」

横に回避することで隙が出来るのを嫌ったのか、レミリアは無数の蝙蝠に分裂するこ
とを選んだ。

「なにっ!?!」

轟音を響かせて地面に激突する要石。衝撃でクレーターができ、岩や土砂が爆散す
る。

「どいかに逃げた!?!」

クレーターの中や吹き飛んだ岩石の影など隠れることが出来る場所を見ても、レミリ

アの姿はどこにもなかった。

「——？」

そのとき天界に住んでいる者にとっては珍しいことが起こった。
大きな影で太陽の光が遮断されたのだ。

ここは雲の上の天界。地上と違ってよほどのことがない限り、日光が遮られることはない。

ハツとした天子が上を見上げると、その原因はすぐに見つかった。

「ふふふ………気付くのが遅かったわね！」

「レミリア——！」

天界よりも更に上空を飛ぶレミリアは両手を上に掲げていた。

もちろんそれは降参のポーズなどではない。

両手の先には直径50mにもなる巨大な紅球が浮かぶ。

「これが——紅魔玉だ!!!」

満を持してレミリアが紅球を投げつける。

「はあああああ——！」

対して天子は周囲の気質を緋想の剣に集め、上空に一気に解き放った。

「全人類の緋想天！」

レミリアの紅魔玉を天子の氣質砲が迎え撃つ。

激しく空中で激突する両者のエネルギーだが、やや天子の分が悪いようだ。

溜めるのに十分な時間があつた紅魔玉に比べ、即座に放つた全人類の緋想天はチャージ時間が短く、周囲の氣質を完全に集めきれていない。

「こんなもの………!!!」

必死に支える天子だが、じりじりと紅魔玉に押されていく。

「ハッ………ハッ………!!!」

とうとう支えきれなくなったのか、天子からの氣質砲の放射が止まる。

邪魔するものがなくなった紅魔玉は容赦なく地表に襲い掛かる。

天界とはいっても雲しかないわけではなく、山や植物、土を含む地面は存在する。

巨大な紅球は地表に激突すると大爆発を起こし、山が吹き飛び、要石の衝突を遥かに超える規模でクレーターが出来上がった。

「ああああーっ！」

天子は紅魔玉の爆発に悲鳴を上げる間もなく飲み込まれた。

先程叫んだのは寝転がって酒を飲んでいて逃げ遅れた萃香だ。

「ちよつとやり過ぎたかしらね？」

クレーターの傍に降り立って呺くレミリア。

天人がこれくらいで大けがを負うとは思っていないが、気絶くらいはしているかと辺りを見渡していると声がかかった。

「——生憎だけど、これくらいじゃ全然足りないわ」

「——！」

立ち込める煙の中から歩いてきたのは天子。その歩みは堂々としていて、一見、ダメージがないように見える。

それどころか身体の周りを赤いエネルギーがスパークして、圧倒的な強者の威圧を感じさせた。

「私の紅魔玉を耐えるとはやるわね」

「“無念無想の境地”——超天子になった私はどんな攻撃も効かない無敵の魔神よ。あんたに勝ち目はないわ」

「ふっふっふ……面白い。では試してみるとしよう」

——息符「ドラゴンブレス」

レミリアの口から再度のブレスが吐き出された。

先程の炎とは違い、今度は龍属性を持つ、赤黒いビームのようなブレスだ。

それに対して天子は避けるそぶりを見せず、正面から受け止めた。
ブレスの直撃にダメージがないどころか、のけぞりすらしない。

「うふふふ！ かゆいわね、レミリアア！」

——たしか無念無想の境地はダメージを減少させるけど、無敵状態ではないはず。つまり、こいつはやせ我慢をしているだけ……それも凄いレベルで！ なるほど、DMの名をほしいままにするわけね。

「ならば直接攻撃に切り替えるまでだ！」

グングニルを構えて突撃するレミリア。

「無駄無駄無駄あ！ 弾幕だろうと槍の一撃だろうと、この超天子には無意味とまだわからないの！」

先程と同じく、天子はその場から動かず、自分自身で攻撃を受け止めた。

「ぬん！」

ガアアアン！

身体を中心に貫いているはずが、硬すぎる天子はレミリアのグングニルですら外皮で止めてしまった。

「お返しよー！」

攻撃を自身の腹で止めた天子はそのまま緋想の剣でレミリアの左肩を貫いた。

「ぐっ——!!」

「あっはっは! ようやくその顔を歪めてやったわ!」

「この私に傷をつけたことは誇っていいぞ! だが——」

緋想の剣に左肩を貫かれながら、レミリアは右手のツメを勢いよく天子の胸に突き立てる。

「——ツメ!?!」

「そう! このレミリアの最強の武器はグングニルではなくこのツメだ!」

——エナジードレイン!

「ああああああああ!!!」

吸血鬼の女王のエナジードレインが天人の生命力を根こそぎ奪い取りにかかる。

「な……めんじゃ……ないわよ——!!」

生命力を吸われながら、緋想の剣をより深く食い込ませようと足掻く天子。

「ふはは! 我慢比べだな!」

左肩から胸にかけてじりじりと剣が食い込んでくるが、ツメを突き立たせたまま、離すそぶりを見せないレミリア。

「——う……あ……ああああ……」

さすがに声が弱々しくなっていく、ついには力尽きる天子。

「タフなやつだ……ん？」

完全に意識を失ったはずの天子だが、緋想の剣を握りしめ、しっかりと両の足で立ったまま沈黙していた。

「意地でも倒れないか。天晴れよ、比那名居天子」

その後、吸いすぎた生命力をこつそりと天子に返すレミリア。

緋想の剣で斬られた箇所はかなり深い傷だったが、すでに見た目ではわからないくらい修復している。

「二人ともお疲れー」

紅魔玉の爆発に巻き込まれた為、見た目はボロボロになっている萃香が近寄ってきた。

並の妖ではチリも残らないが、流石に鬼の総大将はピンピンしていた。

「あら萃香、ずいぶんボロボロね」

「ひどいよレミリアー。私まで巻き込まないでよね」

「あんた油断して寝転がってるからでしょ」

「いやー、まさかあんな広範囲を吹き飛ばすやつがくるとは思わなかったから」

「地上だと紫がすっ飛んでくるからそうそう使えない技だけど、天界ならいいでしょ」

「そうだね。天界は土地余ってるし」

土地が余っていいようが住人が聞いたら全力で否定するような会話を繰り返しながら、吸血鬼と鬼は天界の別荘をどんな風にしようか楽しく計画を練るのだった。

第二十七話 『天界異変（エピソード）』

霊夢は珍しくパチュリーに呼ばれて紅魔館にやってきていた。地震を起こした犯人がわかったと咲夜を連絡係として博麗神社に寄こしたのだ。

神社を壊した責任を取らせる気だった霊夢にはまさに朗報といえる。

ついでに、たまたま一緒にいた魔理沙だが、こんな面白そうな話を逃すはずもなく、霊夢について一緒にきていた。

「天界？　そこに天気を変化させて、最後には地震まで起こしたやつがいるの？」

「そうよ。先日、私や咲夜が天界に行ったときに神社が倒壊すると言ってたやつがいたのよ。そいつが黒幕と見て間違いないわ」

「そのときに懲らしめなかったのか？」

「あのとときはまだ地震が起こってなかったから、確証がなかったのよ」

「私はある程度懲らしめたのですが、地震を起こしたことを見ると足りなかったようですよ」

「……まあいいわ。自分の手でお灸を据える方がスッキリするしね」

「あいにくだけど、行くのは霊夢だけじゃないわ」

「私も行くからな」

「魔理沙のことじゃなく、私と咲夜——それ以外にも暇そうなやつらに声をかけたわ」

幽々子、妖夢、アリス、鈴仙、小町……そして紫。

パチュリーが声をかけた連中が紅魔館に勢ぞろいした。

「ずいぶんと来たわね。暇人の多いこと」

「別に普段は暇じゃないわよ。私はたまたま休みだったから来ただけ」

「私も暇ではないけど、地震を起こしたやつにはお灸が必要と思ってたしね」

鈴仙とアリスが暇人扱いを否定するも、参加はしてくれるようだ。

「私は面白いものが斬れると聞いたので」

「私は天界でご馳走してくれると聞いて〜」

妖夢と幽々子は黒幕を懲らしめるためでなく、わかりやすい欲でやってきていた。

「私は暇だったけどね」

「あなたはもつと仕事しなさい。閻魔様に言いますよ」

明らかに仕事中の死神——小野塚小町に紫がツツコミを入れる。

「それは勘弁してくれよ」

「しかし、凄いメンバーだな。天界にはそれほどのやつがいるのか？」

「場合によつては鬼と天人の二人が敵に回るわ」

「……そりや強敵だぜ」

「萃香が天人に協力しているのですか？」

「この間、天界に行つたときは黒幕らしき天人と一緒にいたわね」

「そうですか……お仕置きが必要のようですね」

扇子で口元を隠しながら言う紫だが、目は明らかに怒つていた。

幻想郷の要たる博麗神社を壊されて、やはり彼女もご立腹らしい。

――

天界には妖怪の山の頂上から行くことが出来る。立ちふさがる烏天狗や竜宮の使いを蹴散らして、一行は無人の野を行くが如く進撃した。仕事として怒れる巫女を筆頭にしたメンバーの妨害をしなければいけない者たちは気の毒であった。

そして天界に辿り着いた霊夢たちは黒幕の居城らしきものを発見することとなる。

それは幻想郷では珍しい西洋風の屋敷だった。

建物の大きさはそれほどでもないが、敷地はかなり広く、中庭は大人数で宴会が出来

そうな広さだ。

そして何よりも特徴的なのがその色——屋敷の壁も門から中庭までの道も赤一色で統一されている。

その屋敷を見たとき、一行の顔から表情がなくなつた。

第二十八話 『地底異変』

その日、紅魔館は魔界からの来客を迎えていた。

レミリアと仲良くなった魅魔が遊びに来たのだ。

「ようこそ紅魔館へ。歓迎いたします、魅魔様」

「よく来てくれたわね、魅魔」

「世話になるよ」

「咲夜、私たちは大図書館に行くわ」

「かしこまりました」

「しかし、ちようどいいときに来たものね」

「ん？ 何か厄介ごとでも起こっているのかい？」

「まあそうですね。地底から間欠泉と一緒に地霊が湧き出す異変が起きてね。霊夢と魔理沙が解決に向かっているわ」

「地底か。相も変わらず色んなところに飛び込むやつらだね」

間欠泉が湧き出す異変が起こった当初、異変解決者である霊夢や魔理沙は楽観的だった。温泉と一緒に現れた地霊達は大人しく、特に影響がなかったからだ。

それに対して、地底には厄介な力が眠っていることを知るパチュリー・ノーレッジは地霊の他にそういった者たちが地上に出てくることを警戒した。

事実、そのことを相談した八雲紫は地霊に混じって怨霊まで湧き出していると指摘する。

だが、地底世界には地上の妖怪は踏み入ってはならない約束がある。

そこで人間である霊夢と魔理沙を地底へ向かわせ、妖怪たちは地上からサポートすることとなったのだ。

「二人の調子はどうかしら?」

大図書館で魔理沙のサポートをしているパチュリー、アリスにレミリアが異変解決の進捗を確認する。

「旧都中心にある地霊殿とやらに入ったところよ、レミイ」

「ん? レミリア、そちらは誰——!?!」

「困ったメイドだね。ご主人様の顔を忘れたのかい?」

魅魔の姿を見たアリスは驚愕で目を見開いた。

幼き頃にメイドをやらされていた記憶が呼び起こされたのか、心なしか震えているようにも見える。

どうやら成長した今でもこの悪霊に頭が上がらないようだ。

「あ、あんた……なんでここに……？」

「なんだい、私が幻想郷に遊びに来ちゃあいけないか？」

「前に魅魔がそのうち遊びに来るって言ったでしょ。感動の再会というわけね」
「全然、違う！ 別に会いたくもなかったわ」

『どうかしたのか？ パチュリー。何か騒がしいが』

「いや、ちよつと来客がね……」

『？ そうか』

『気を引き締めなさい、魔理沙』

紅魔館組の騒がしさに気を取られている魔理沙を霊夢が諫める。
『おつと、親玉のお出ましか』

—————

——地底

「………来客とは珍しい」

地霊殿に突入した二人の前に現れたのは薄紫の髪をした小柄な少女。

人間にも見えるが、一つだけだけ妖怪だとわかる特徴がある。

複数の触手を生やした第三の目が胸元に浮いているのだ。

「まさか人間が二人もこんなところまで来ることが出来るなんて」

「あいにく只者じゃないんでな」

『魔理沙、まずは間欠泉の情報を収集して』

「個人的にはせっかくの温泉を止めたくはないんだがな」

アリスに言われてしゅしゅ、間欠泉の話を聞こうとする魔理沙。

「間欠泉を止める方法はないのか？」

「間欠泉ねえ……。私のペットにそんな事も出来るのもいるわ」

「ほう、ペットがね……」

「………さっきの鬼は霊夢が相手をしたから、こいつは私に譲ってもらうぜ」
ですか。

ずいぶんと好戦的ですね」

「お？　なんでバレたんだ。初対面だろ？」

「私は古明地さと。この地霊殿の主です。私に隠し事は出来ませんよ」

『……さとり!? 心を読むことが出来る危険な妖怪よ! 気を付けて!』

「心を読むだか何だか知らないけど、紫が地底の妖怪は出会い頭に倒せって言うたでしよ。さっさと片付けて間欠泉を操れるやつのところに行くわよ」

「……白黒の魔女もそうですが、紅白の巫女も平和的解決という心を持っていないようですね」

「当たり前でしょ。異変時の妖怪はとりあえず倒すことにしているのよ」

「まあその方が早いからな」

「……ま、いいでしょう。たまには妖怪として人間を襲ってみましようか」

「おっと、やる気になったか」

「……貴方の心の中には数々の美しい弾幕があるわね。まさに百戦錬磨……けれどその経験があるからこそ、過去の弾幕によって地上へ逃げ帰ることになる」

「なにを言ってるんだ? お前は」

「ふふふ……。すぐに身をもって理解する——わ!」

——想起「恐怖催眠術」

挨拶代わりにさとりが先制のスペルカードを切った。

その名の通り、恐怖を呼び起こすような妖しい光が照射される。

だが、光自体には当たり判定がないようで、魔理沙は拍子抜けした。

「……「虚仮威しか？」　ですか。もちろん違いますよ」

心を読んださとりが律儀に教えてあげると同時に、光が通った跡をなぞる様にレーザーと大小の弾幕が襲い掛かる。

「ちっ、そういうことか！」

弾幕は魔理沙の位置を正確に狙ってくるが、彼女にとつてノーミスで避けるのは造作もないレベルだった。

「ラストダンジョンのボスの割には大したことないな。少々、眩しい程度だけ」

スペルカードが意外と簡単に凌げたので、若干拍子抜けする魔理沙。

「ふふふ、期待外れでしたか？　それは申し訳ありません。では本番といきましょうか」

「そうかい、それは期待するぜっ！」

魔理沙が強力な星形の弾幕をばら撒いて撃ち落とそうとするが、さとりは妖しく笑いながら新たなスペルカードで応える。

「さあ、眠りを覚ます恐怖の記憶（トラウマ）で眠りなさい！」

「なに？」

——想起「レーヴァテイン」

突如としてさとりは巨大過ぎる炎の剣を呼び出した。

それは魔理沙が以前に紅魔館で見たスペルカードに酷似している。

「あれはフランの!？」

「それっ!」

レーヴァテインから火弾が発射され、魔理沙の弾幕を飲み込みながら迫りくる。

「!……ここまでフランのスペカと同じかよ!」

まさかの好敵手と同じスペルカードの登場に動揺する魔理沙だが、フランドールが四人に分身した状態ですら突破した彼女にとって、避けることは難しくなかった。

「お次はこれです!」

——想起「しやくねっ」

さとりが口を開けると前方にすべてを焼き尽くす灼熱の炎が放たれた。

「うひゃあああ!？」

必死に距離を取って躲す魔理沙だが、服の一部が焦げてしまった。

「あれはレミリアのやつか!？ よく吐けるなそんなもん」

「私の弾幕は疑似的に再現しているだけですから、実際に炎を吐いているわけではありません」

「ふーん……」

「……あれは奇襲にもってこいでズルいぜ。今度教えてもらおうかな」
「茶なことを言いますね。人間が炎なんて吐いたら口が大やけどしますよ」
「ですか。無

「そこは私流にアレンジするさ。今度はこちらからいくぜ！ スターダストレヴアリエ！」

それは魔理沙お得意のスペルカード。

食べると甘い星形弾幕が逃げ場をなくすようにさとりを取り囲む。

「ではこちらで迎撃」

—— 想起 「我思あたしう故こに我在にり」

ゴウツ！

赤青緑紫、四色の巨大なビットがスターダストレヴアリエを相殺する。

「あのビットは……！」

非常に見覚えのある攻撃に、スペルカードが防がれたこと以上に驚愕する魔理沙。

なにしろ、先程の弾幕は彼女の師匠が得意とする物だったのだから。

「私には見えるのです。貴方の中に眠る数々の弾幕の記憶が。その経験があればこそ、私はそこから効果的な技を持つてくる事ができる」

「——っ」

本来、さとりが読める心は表層部分のみ。ただし、最初に放った“恐怖催眠術”を経ることでそれは変わる。相手のトラウマを呼び覚まし、過去に体験した弾幕を再現することが出来るのだ。

「どうやら先程の技は貴方の師匠の物のようですね」

「……それがどうかしたのか？」

「貴方の心にはいまだに師匠への畏怖がある。そして私が次に選ぶのも再びその方の技。過去に刻んだ畏れというものはそう簡単に乗り越えられるものではない——という事です」

「そうかい……なら——試してみるか！」

——もし魅魔様が今の私を見れば言うはずだ。がっかりさせないでくれよ” つてな。

「——へへっ……なら乗り越えるしかないよな！ いくぜ、古明地さとりー！」

魔理沙がミニ八卦炉を構え、彼女が最も頼りとするスペルカードの発動にかかる。

対してさとりも魔理沙の奥底に眠る畏怖を形として再現する。

——想起「Reincarnation」

緑の長髪と黒翼を持った悪霊の幻が現れ、同時に巨大な赤いレーザーが魔理沙目掛けて一直線に放たれた。

それはかつて、魔界神すら降した恐怖の霊撃。

「これが……今の私の——」

直撃すればただではすまない一撃が迫りくるが、魔理沙は落ち着いて限界まで魔力を

高める。

「!?」

凄まじい魔力の蠢動に顔を引きつらせるさととり。

魔理沙の大魔砲を前にその場に留まるのは悪手だが、スペルカード発動中により咄嗟の回避ができない。

「マスタースパークだああああああー!」

特大のレーザーがさどりの弾幕を飲み込んで尚、威力が衰えずに直進する。

それはフランドール、永琳、依姫の誰に放った時よりも苛烈で力強かった。

特に月人の二人には完全に防がれたマスタースパーク。

しかし魔理沙はそれに腐らず、日々進歩を続けていた。

ゴオオアアアアア!

「う……あああつ——!」

閃光に飲み込まれるさととり。

マスタースパークは地霊殿を貫通して飛び出した。

おそらく、外では騒ぎになっているだろう。

「また威力上がってる……弾幕ごっこでここまでの火力はいらないでしょ。どこを目指

してるのよ、あいつは……」

ひたすら火力特化の道を進む魔理沙に呆れる霊夢だが、長い付き合いの彼女には白黒魔女がまだまだ満足していないことはよく分かっていた。

——

「……」

「嬉しそうね？ 魅魔」

レミリアがにやりとしながら話しかける。

「……ふん。どうやら弟子は精進を続けていたようだね」

「声でも掛けてあげるかと思っただけ」

「今、私がちよっかい掛けると邪魔になるからね」

「ま、それもそうか」

——しかし、予想外だったのはさとりね。想起で使ってくるスペルカードはLuna ticだろうとサポートキャラの技だけだったはず。相手が過去に体験したあらゆる弾幕を再現出来るなら想定よりだいぶ強いわ。流星は地底の顔ってところか。この分だとExtraボスの妹も手強いでしょうね。

第二十九話 『地底異変（エピローグ）』

地底から間欠泉と共に怨霊が湧き出す異変は解決した。

博麗神社では異変解決を祝って、恒例の宴会をしているのだった。

「で、地上の神様があんたに八咫鳥の力を与えたのね。けど旧地獄にいる鴉にそんなことをして何の得をするわけ？」

「うにゅ？」

「もぐもぐ」

霊夢が問いかけるも、間欠泉で茹でた卵を頬張っている霊鳥路空と火焰猫燐。

お空は地獄鴉、お燐は火車という地底の妖怪で、二人とも古明地さとのペットでもある。

彼女たちこそ今回の異変の元凶。

神から力を貰ったお空が暴走した為、困ったお燐が地上に怨霊を送ることで止めてくれる者と呼んだというのが真相だ。

「私が得をしたわ。強い力を貰ってね」

「その神様はどんなやつだったんだ？」

「うーん。もうあんまり覚えてないねー」

「自分に力を与えた神をそんなすぐ忘れるものなの……?」

お空のあまりの記憶力の無さに呆れるアリス。

「無駄よ。さとり様がお空の心を読んだけど、何も判らなかつたわ。もうすっかり心から抜け落ちてるってさ」

「まさに鳥頭だぜ」

「確か山から来た神様だとは言っていたかな……二人組で」

お空が非常に重要なポイントをうる覚えで話す。

「山の二人組の神様? いやいや、それでだいぶ絞れるだろ」

「そうね。妖怪の山で二人組の神様といえば……秋姉妹」

「いや、そつちじゃないだろ」

「冗談よ」

ピピピ……ピーツ

「警戒信号が、近いぞ! どこだ!?!」

にとりが顔に付けている妖力計測器スカウターが高妖力に反応した。

妖力の数値化や索敵機能を備えたこの高性能マシンは、レミリアがにとりに提案して

開発されたものだ。

「やつほー！ 異変解決おめでとー」

ご機嫌でやってきたのは萃香。

すでにどこかで飲んできたのか、酒の匂いを漂わせている。

「地底に行つたと聞いたときはちよつとだけ心配したけど、無事でなにより。流石は霊夢と魔理沙だね〜」

「まあ何とかな。灼熱地獄はあやうく溶けるほどの熱さだったぜ」

「そりや多くの罪人が二度と行きたくない地獄って呼んだほどだからね。あれ？ そういえばレミリアは来てないの？」

「……そろそろ来るわよ。たぶん連れも一緒にね」

「連れ？ パチュリーのことか？ アリス」

「違うわ。けど、あんたもよく知ってるやつよ」

「ふくん？」

「ところでにとり、警戒がどうか言ってたけど、まさかその機械で私を……？」
「……故障かな」

※ スカウターのイメージ

「待たせたわね、皆の者」

「別に待ってないわよ」

遅れてやって来たレミリアに平常通りに冷たく返す霊夢。

「今日は皆に紹介する者がいる。とはいっても顔見知りも何人かいるらしいが」

「紅魔館で誰か雇ったの?」

「いや、普段は魔界にいる。今日はこっちに遊びに来ていただけだ」

「魔界……」

過去の色々を思い出すのか、あまり嬉しくなさそうな霊夢。

「どうした? 霊夢。魔界に嫌な思いでもあるのかい?」

レミリアの後ろからゆっくと宴会場に現れたのは魅魔。

いつもながら妖艶な笑みを浮かべている。

「なっ、あんな!?!」

「何よ、霊夢。そんな幽霊でも見たような顔をして」

「実際、そいつは悪霊でしょ」

「まあそうね」

レミリアがチラリと魅魔を見れば彼女はある方向を向いていた。

そこには白黒の魔女の姿。

「……」

魔理沙はあまりの驚愕に目を見開き、声が出ないようだった。

「……」

そんな魔理沙に魅魔も無言で対峙する。

彼女の方はしばらく放置していた弟子に対する後ろめたさや照れくささなどで、すぐに声をかけられないらしく、レミリアが背中を押す。

「ほら、魅魔。ここは師匠から何か言いなさいよ」

「そ、そうだね。……久しぶりだね、魔理沙。地底での活躍は見ていたよ」

「……」

「しばらく会わないうちになかなか出来るようになった。ちゃんと修行を——」

「……ま」

「ん？」

「魅魔さまあああああああ!!!」

「ぐほおあっ!？」

ブレijingグスター並の勢いで突っ込んできた魔理沙の直撃を受け、魅魔は吹き飛ばされた。

――

それからは大変だった。

師との再会に泣きは喚くは大騒ぎの魔理沙。

その師は最初に吹き飛ばされた後も弟子に抱き着かれて立ち上がれないが、邪険にも出来ずに動けない。

レミアアたちが宥めすかして、ようやく魔理沙が落ち着いたときには魅魔は見たことがないくらいげっそりとしていた。

「……しつかし、しばらく見ないからてつきり成仏したのかと思ったわ」

「魅魔様がそんな殊勝なタマかよ。かつては全人類への復讐を目論んだ大悪霊だぜ」

魅魔にしがみついて離れないが、一応、復活した魔理沙が反論する。

「……今更だけど、どう考えてもヤバイやつね」

「まあ今はそんな気もないから安心しなさい、霊夢」

「とても安心できないわね」

「さて、魔理沙も落ち着いたことだし、そろそろ今回の異変の話に行きましようか。紅魔館から二人の活躍は見てたけど、その鴉にチカラを与えたのは誰かわかったのかしら？」

「おお！ そうだ、レミリア。それなんだが多分——」

地獄鳥に強大な力を与えた存在——おそらくそれは守矢神社の二柱。お空の頼りない記憶からも、なんとかそう当たりを付けた一行は理由を聞き出すため、妖怪の山に向かった。

——

守矢神社——

「おらおら！ ネタはあがってるんだ、さっさと犯人を出しやがれ！」

「な、なんですか、貴方たち!? 犯人って何のことですか！」

唐突に大人数に取り囲まれた早苗が慌てる。

流石の常識に囚われない風祝も、この多勢に無勢では弾幕ごっこを仕掛けようとはしないらしい。

ちなみに魔理沙は魅魔から離れて、いまは先頭で早苗を尋問している。

「その鴉が吐いたんだよ。守矢の神様その1とその2に力をもらったってな」

「鴉……？ ああ、地獄鴉に八咫鳥のチカラを与える件ですね。それなら確かに神奈子様と諏訪子様がやったことです」

「おやおや、ずいぶんとあつさり白状したな。さすがに怖気づいたか？ 軍勢を引き連れてきて正解だったぜ」

「別にあんたに引き連れられたわけじゃないんだけど」

レミリアが突つ込むが魔理沙は気にせず続ける。

「ではまず地底まで行かされた私への迷惑料の話をしようか」

「博麗神社の周辺を間欠泉で穴だらけにしてくれた賠償金もね」

「え？ え?？」

魔理沙も霊夢も地霊殿のさとりからそれなりのお詫びをせしめているが、それはそれとして守矢神社からも取れるだけ取ろうとしていた。

「こんなに金にうるさい子だったかね……」

「まあ一人で生きていく上でお金は必要だし、多少はね?？」

「……そうだね。あの年で後ろ盾がないなら仕方ないか」

「あんたと違つて人間には食事やらなんやらが必要つてのもあるしね」

魔理沙の意外な姿に若干呆れ気味の魅魔だが、レミリアがフオローしてあげる。

ピピピッ

「ん？ 高い妖力を感知？」

妖力計測器スカウターが反応したことで、にとりが周囲をきよろきよろするが、誰も見つからない。
い。

「おかしい……誰もいない？」

「その機械、欠陥品なんじゃないの？ いつそ壊す？」

自分に警戒信号を出したスカウターにイラつときていた萃香がここぞとばかりに廃棄処分を提案する。

「そんなはずは……」

——あ、これはたぶんアレね。

心当たりのあつたレミリアが周囲を注意深く探るとそれを見つけることが出来た。

「みーつけた」

「うわっ」

レミリアが誰もいないところから一人の少女を引つ張り出した。

胸元には古明地さとりにもあつたサードアイが浮かんでいるが、その目は固く閉ざされている。

「あれー？ 私のこと見えてた？」

「ふふふ……まあ、私くらいになればね」

「あれ、レミリア。その子つて古明地んとこのこいしちゃんじゃない？」

レミリアに吊り下げられる少女を見た萃香が寄ってくる。

「お姉ちゃんのことを知ってるの？」

「私は地底に住んでたからね」

「ふむ、さどりの妹か。なぜ守矢神社に来たのかしら？」

「お姉ちゃんのおペットのお空が神様にパワーアップしてもらったのが羨ましくて。私のペットも同じように強くしてもらおうと思ってね」

「なるほどね」

「はっは。こいしちゃんらしい理由だね」

「話はわかったわ。なら私たちと一緒に行きましょうか」

「いいの？ ありがとうー」

「まずは魔理沙と霊夢を止めましょうか。さすがに詰め寄られた早苗が半泣きになつて気の毒だからね」

第三十話 『天界一武道会（前編）』

天界にある紅魔館別荘にてレミリアと天子はいかに自分たちの威光を幻想郷民に知らしめるかの策を練っていた。

「なるほど、武道会か。地上の民が好みそうな野蛮な催しだけど、それだけに分かりやすいわね」

「でしょ。場所も私とあんたが戦った跡地を整備すればすぐに用意できるしね」

「そこで華々しく優勝することで、この比那名居天子の名が轟くわけか。いいじゃない、いいじゃない」

「あいにく優勝は私だけだね。あんたは準優勝で我慢しなさい」

「は？ ちよつと、一回勝ったからって調子に乗らないでよね。次はガツンとリベンジをしてみせるわ」

「ふふふ、それは楽しみね」

「……それで参加選手はどうやって集めるの？」

「あんまり大人数が集まっても試合数が増えて大変だし、こつちで選んだ候補者に招待状を送るわ。定員の8名になったらそこで締め切り」

「なんで8名なの？」

「そりやあんだ、天下一武道会といえは8名って決まってるのよ」

「天界一でしょ？ ……しかし、8名か。私としてはもつと大規模にやりたいところだけど」

「観客として人間から妖怪、神様まで大勢呼ぶつもりだから、心配せずとも派手な催しになるわ」

「へえ？ うふふ……悪くないわね」

初対面では挨拶代わりに激突した二人だが、意外と気が合うのか、天子は紅魔館別荘にちよくちよく遊びに来ていた。建設するときには約束した通り、別荘には天子の部屋もある。

「次に空を飛ばない連中を天界まで連れてくる方法だけど——」

—————

そして時間は武道会の開催日まで進む。

会場はレミアアの紅魔王が吹き飛ばした跡地を利用している。

高速で飛行する少女たちが戦う武舞台はかなり広く作られ、会場全体の大きさとして

は東京ドームよりも広かった。

「さあー始まりました！ 第一回天界一武道会！ 実況はもちろん幻想郷ナンバー1記者、射命丸文！ 解説は八雲紫さんです。紫さん、今日はよろしく願います」

「ええ。こちらこそよろしく願います」

「しかし、多忙な賢者である紫さんがよく解説を引き受けましたね？」

「ええ……。目を離すと何をしでかすかわからないメンバーが揃いましたので、それならばいつそ近くにいた方が対処もしやすいと考えまして」

「ああ、なるほど……。心中お察します」

「さて、一回戦は早くも注目のカードのようね？」

「ええ、そうですね。初戦はレミア・スカーレット選手と博麗霊夢選手の試合です。いきなり決勝戦みたいな組み合わせですが、紫さんはこの試合をどう見ますか？」

「純粋なスペルカード戦では無類の強さを発揮する霊夢ですが、決められた武舞台での戦いとなると勝手も違います。そこがどう影響するかといったところですね」

「なるほどー。あ、ルールのおさらいですが、選手が武舞台から落ちた場合や倒れた場合にカウントを取り、10カウントで負けとなります。武器の使用はあり、相手を殺すのは失格となります」

「おや、早くも二人が中央で睨み合っていますね」

「さすがに血の気の多い方々です」

――

レミリアと霊夢は互いに目の前まで近寄り、火花を散らしていた。

「賞金は私がもらってあげるから、あんたはとつとと降参しなさい」

「ふふふ……あいにくだけど、それは出来ないわ。ここまで来たことに対するお駄賃はあげるからそれで我慢するのね」

「ギタギタにするわよ」

「面白い……出来るものならやってみろ」

「二人とも少し離れてください。試合を開始できません」

審判の四季映姫・ヤマザナドゥが二人を下がらせる。

なぜ閻魔がこんなことをしているかといえば、レミリアが断られること前提で審判を要請したらまさかのOKだったためだ。

本人曰く非番だったとのことだが、説教好きの彼女もまたお祭りは好きなのだろう。

「……」

「……」

二人が開始地点まで移動したことを確認した映姫は武舞台の外に出る。

観客席には弾幕から守るための結界が張られているので、そちら側に避難したのだ。

「では……一回戦はじめ……」

ゴウツ！

「そらあつー！」

「はっー！」

開始の合図と共に飛び上がったレミリアが空中から強襲するも、霊夢はサマーソルトで応戦してツメの一撃を弾いた。

「吸血鬼の攻撃を蹴りで迎撃するなんて、巫女というより武道家——いや、武闘家ね！」
「これくらい博麗の巫女にとっては基本技能よ！」

ガアアアン！

再び激突する両者。

確かに霊夢はそこらの木っ端妖怪なら術もお札も使わずにお祓い棒だけで退治が出来る。それでも、吸血鬼と接近戦が出来るだけの身体能力があるとは、博麗の巫女も常識には囚われないらしい。

「デーモンキングクレイドル！」

レミリアが高速回転しつつ、体当たりを仕掛けた。

霊夢が身構え、迎え撃つのかと思われたが、接触する寸前に姿が消えた。

「!？」

——空中昇天脚

「ぐうっ!」

体当たりをワープで躲し、レミリアのやや下方に転移した霊夢はその勢いのまま、強力なサマーソルトキックを食らわせた。

「やってくれるなあ! —— 紅魔玉っ!」

蹴りを食らった衝撃を利用して上空へと高速飛行したレミリアは紅球を投げつけた。

天子と戦ったときとは違い、今回の紅魔玉は数メートル程度のものだ。

溜めを最小限にして発射までの速度を重視している。

「陰陽飛鳥井!」

迫る紅球を見た霊夢は人を飲み込めるほど大きな陰陽玉を出現させ、上空目掛けて蹴り飛ばした。

空中で激突する紅魔玉と陰陽玉。

うひゃあああーっ!

武舞台を中心に魔力と霊力の嵐が吹き荒れ、悲鳴が木霊するが、観客席を守る結界はビクともしない。

態勢を立て直したレミリアは黒く輝く闇の炎を吐いた。

迫りくるブレスを結界を張り、押しとどめる霊夢。

ドウツ

闇の炎が消え去る前に中を突っ切ったレミリアが急襲をかける。

「レミリアアアストレッツチッ！」

「ぐっ！」

レミリアの強力なツメが結界の上から殴りつける。

苦し気に後ろに吹き飛ぶ霊夢。

それをチャンスと見て距離を詰めるレミリアだが、その一瞬、霊夢の周囲に8枚の札が浮いているのを見た。

——あれは!?

幾多の戦いを経たことによる直観か、猛烈に嫌な予感がしたレミリアは急停止した。

「気付いたか、けど……遅いわ！」

——神技「八方龍殺陣」

逃れようもない超速度のスペルカードが発動する。

霊夢の周囲に強力な結界が展開された。

この技は超速度で無敵状態に移行という高性能に加え、射程内の相手に大ダメージも与える攻防一体のスペルカードだ。

「でたー！ 霊夢選手の龍殺陣！ タイミング的にレミリア選手は飲み込まれてしまった模様！ これは勝負が決まってしまったかー!?」

八方龍殺陣の発動時間が終わる。

このスペルカードの弱点は技終了時に一瞬だけ術者が動けなくなる点にある。

周囲から見れば刹那の硬直だが、実力者にとっては十分な隙だ。

そこで霊夢は躲せない距離までレミリアを引き付けて発動したのだった。

そう——本来ならこのスペルカードで終わっていただろう。

だが、レミリアにもまだ見せていない奥の手があった。

ドオオオン！

轟音を響かせて霊夢の背後からレミリアが迫る。

「なっ?! ああタイミングで脱出できたっていうのー!」

紅いオーラを噴出させ、弾丸のごとき体当たりが炸裂する。

辛うじて体の前にお祓い棒を出して直撃こそ避けたが、勢いを殺すことはできず、地

面に向かつて吹き飛ぶ霊夢。

「がつ——つ！」

人間が食らったら無事では済まない速度でぶつかられた霊夢は、受け身をとることも出来ず舞台上に激突した。

「つ——……」

「おおつと！ 霊夢選手、立てません！ ……ここで審判による10カウント！ 試合終了だー！ かつての紅霧異変では霊夢選手に敗北を喫したレミリア選手、しかし今回は見事に雪辱を果たしましたー！」

わあああああ!!!

「最後のはレミリアが月での戦いで使った技に似てますね。そのときは紅霧を背後に噴射することで凄まじいスピードを出していました。あんなものを食らった霊夢は無事かしら……？」

「普通の人間ならコナゴナですが、霊夢さんなら大丈夫でしょう。あ、レミリアさんが回復魔法らしきものをかけたら起きましたね」

「ふう……心配させてくれますね。しかし、最後のレミリアはとてつもない速度でした。」

あなたより速いのでは？ 文さん」

「え？ い、いやですねえ。私のスピードは幻想郷一ですよ？ そんな私より速いわけが……」

「ふふ……まあ、深くは突っ込まないでおきましょう」

———

「あーあ、負けたか。私の賞金が……」

「ふっふっふ。今日は私の勝ちだな、霊夢」

「なによあの速度。あれって依姫と戦った時のやつ？」

「見た目は似ているが、また別の技だな。私の切り札だぞ？」

「ちえっ、ここでそんなもんを出すとはやってくれるわ」

「ふふふ、お前だからこそとっておきを見せてやったわけだ」

「ふん……。私に勝ったんだから優勝しないと怒るわよ」

「当然だ。安心して見ているがいい」

第三十一話 『天界一武道会（後編）』

大盛り上がりの天界一武道会は順調に試合を消化していた。

一回戦で博麗霊夢に勝利したレミリア・スカーレットは準決勝も藤原妹紅との激戦で観客を沸かせる。

そして蓬莱人との激戦を制し、決勝に駒を進めた。

「くっそー！ 負けたかー」

悔しがる妹紅に近づくとレミリア。

「今回も私の勝ちね、妹紅」

「今回もって肝試しのときは8対1だったろーが。まあ、もう怒ってないけどさ」

「そーいやそーうだったわね」

「当然、優勝する気なんだろう？」

「言うまでもないことね」

「お前なら大丈夫そうだけど、油断すんなよ。他にも厄介なやつはいるぞ」

「ええ、わかっているわ。その上で、優勝はこのレミリアと宣言しておきましょう」

そして試合は進み、優勝候補筆頭（自称）の比那名居天子は地底の太陽こと霊鳥路空の核融合攻撃を根性で耐えきり、見事勝利を収めた。

しかし、準決勝ではそう予定通りにいかなかった。

天子の相手は幻想郷でも古参の妖怪で、特殊な能力はないが、純粋に高い妖力や身体能力を駆使して戦う強敵だった。

正面からぶつかる両者は一步も引かずに戦ったが、妖怪の放った天界をも飲み込むかのような超巨大レーザーの直撃を受けて、ついに天子は武舞台に倒れた。

「天人敗れる！ 天界一武道会の主催者の片割れである天子選手が準決勝にて敗退しましたー！」

「あの天人も腕は立つのですが、今回の相手は闘いの年季が違いましたね」

その戦いをレミリアは腕を組んでじっと見つめていた。

表情からは内心を伺えないが、直接戦った天子の実力を知っているだけに彼女の敗北

に少なからず驚いているのかもしれない。

「……………この私が……………ただの妖怪に……………」

倒れ伏す比那名居天子。

敗れたことが信じられないといった顔だが、彼女の中でレミリアは「ただの妖怪」枠ではないか、ノーカウントになっているらしい。

天子を打ち倒した妖怪は一見すると普通の人間の女性に見えた。

羽が生えているわけでもなく、剣や刀といった武器を持っているわけでもない。

しかし、全身から感じられる妖力は間違いない強力な妖怪のそれだった。

緑の髪に赤い瞳。チエツク入りのロングスカートも瞳と同じ赤色だ。

四季のフラワーマスターと呼ばれる大妖怪——風見幽香。

審判の勝利宣言を確認した幽香は穏やかにレミリアの方に微笑みながら、武舞台を後にした。

服こそ切り刻まれて激戦だったことが伺えるが、余力は残しているようだ。

——風見幽香は本当にただの妖怪かしら？ 少なくとも長寿の妖怪の中でも閻魔に長く生きすぎたと言われるほど別格の存在ではあるが……………。

「くっそ、あのアマ……………。最後はレミリアの方しか向いてなかった。私は眼中にないっての——！」

武舞台の上上がり、天子の方に近づいていくレミリア。

「安心しなさい、天子。あんたとの決勝はなくなったけど、優勝は変わらずこのレミリアよ」

「……レミリアああ……」

天子に肩を貸して起き上がらせるレミリア。

敗者に慰めは不要とばかりに、多くは言わないが、改めて天人の友に自身の優勝宣言をするのだった。

———

「さあ、この射命丸の名実況のおかげもあり、盛り上がった天界一武道会もとうとう決勝です！ 解説の紫さん、決勝戦はレミリアさんと幽香さんになりましたが、予想通りでしょうか？」

「まあ妥当なところでしよう」

「大暴れのイメージがあるレミリアさんと違って、幽香さんが決勝まで来れたことを意外に思っている方も多いようですね」

「そうですね。若い方々の中だと幽香はたまに人里に花を買いに来る妖怪……くらいの

イメージしかないかもしれませんが、彼女も昔はヤンチャでした。最近はまだ大人しめですが、かつては鬼に匹敵するほどの暴れっぷりでしたよ」

「若き吸血鬼の女王と古参の大妖怪……これは面白い試合になりそうです！」

—————

「あなたが幻想郷に来た日からこのときを待っていたわ」

「それはそれは……お待たせして申し訳ないわね」

レミリアと幽香は武舞台の上でかつての吸血鬼異変を振り返っていた。

「妹のフランちゃんも良かったけど、私としてはあなたにもとっても興味があるのよ」

「おかげさまでこの武道会は大成功となったわ。その感謝として今日はこのレミリアのチカラを存分にお見せしましょう」

「それは楽しみね」

「さあ、お二人とも。決勝にふさわしい力強く美しい試合をお願いします。私も審判として最後まできつちりと白黒つけさせていただきます」

「ふ……当然だ。このレミリアの華麗な勝利を最も間近で見せてやる」

「あら、ウソはついちゃダメよ？ 貴方の負けるところをでしょ？」

互いに笑いながら言葉を交わしているが、目に見えない圧力は凄まじく、並の人間や妖怪では近くににいるだけで気絶していたかもしれない。その点、審判が閻魔でよかつたといえる。

「では位置についてください」

それ以上の言葉は無用と二人とも試合開始地点まで移動する。

「……天界一武道会、決勝戦はじめ……」

「……」

審判により開始の合図が出されたが、動きを見せない幽香。

対してレミリアは今回も速攻で先制攻撃を仕掛けていた。

「まずは挨拶代わりよ！ ハートブレイク！」

レミリアが紅い槍を高速で投げつける。

それでもその場から動かない幽香は右手を前に出す。

グシヤリ！

目の前まで迫った紅い槍を力任せに握りつぶしてしまった。

「槍で遊ぶならフランちゃんの方が刺激的だったわよ？」

「なるほど、つまらない挨拶となつてしまい悪かった——な！」

レミリアは灼熱の炎を吐いた。

「！」

業火に飲み込まれる幽香。

しかし、レミリアは油断せずじつと炎を見つめている。

やはりと言うべきか、燃え盛る炎の中から幽香が飛び出してきた。

その拳はすでに攻撃のために振りかぶられている。

「そらあつ！」

身構えていたレミリアは両手を前に組んで受け止めたが、勢いは止まらずに吹き飛ばされた。

「——ッ！ まるで鬼みたいなパワーね」

「あんなガサツな連中と一緒にしないでちょうだい。貴方こそ口から火を吐くなんて、鬼みたいよ」

「まあ吸血“鬼”だからね」

——しかし、ハートブレイクを片手で握りつぶすとはな。攻撃力、防御力共に尋常じゃないレベルだ。ここは一度、搦め手も試してみるか。

次の手を決めたレミリアはふわりと浮き上がり、幽香の周囲をゆっくりと回り始めた。

「次は何を見せてくれるのかしら？」

「ふふふ……。これだ——ライトニング・バインド！」

電撃をほとばしらせる魔力の網がフラワーマスターを捕らえにかかると。

おそらくハートブレイクのように、払いのけようとするだろうと考えていたレミリアだが、幽香は抵抗せずに電撃網で拘束された。

「——どういうつもりだ？」

電撃の網が捕らえた幽香にダメージを与えていく。

「どんな技かは見た瞬間に理解したわ。けど、あいにく私はあまり回避は得意じゃないのよね。だから……：畏は嵌って踏みつぶすのが主義よ——！」

幽香が全身の妖力を高め、両腕に力をこめると電撃の網が限界まで引つ張られていく。

「ぬんー！」

ブチリと音を立てるように電撃網が引きちぎられてしまった。

だが、その前に行動を起こしていたレミリアはグングニルを突き出す。

ガン!!!

「——いい一撃よー」

グングニルを腹に受けたにもかかわらず、右手で掴み、叩きつける幽香。

「ぐっ！」

レミアアが起き上がる前に幽香が猛烈な勢いで上空に蹴り上げる。

「さあ、絶好の的よ」

幽香の右手から巨大なレーザーが放たれる。

体勢が崩れたまま吹き飛ばレミアアは回避行動が間に合わない。

そこで彼女は回避ではなく攻撃を選んだ。

——夜王「ドラキユラクレイドル」

赤いオーラを身に纏い、回転するレミアア。

巨大レーザーに飲み込まれるが、大半は弾き飛ばすことに成功する。

それどころか、勢いをそのままに体当たりを仕掛けた。

今度の攻撃も避けようとはしない幽香。

高速体当たりを先程のレミアアのように両腕でガードして受け止める。

「ぬうっ——！」

グングニルを身体で受け止めた幽香もその一撃は多少は効いたようで、激しく後ろに吹き飛んだ。だが、それでも膝をつくことはなく、両の足でしっかりと立っている。

「……やるわね。けれど、全力の体当たりであの程度じゃあ私は倒せないわ。どうする？ 逃げ回りながら遠くからチマチマ攻撃するかしら？」

「遠距離からチマチマ削る？ ふはは、馬鹿を言うな。このレミリアが主催した武道会でそんなつまらない決着は許されない。お前こそ、ご自慢のレーザーがああの程度では私には勝てんぞ！」

「あら、誰があれが全力だと言ったの？ ほんの肩慣らしの一撃よ！」

「私も先程のはフルパワーじゃない。ウォーミングアップといったところだ！」

「おおーつと！ 挑発！ 二人とも挑発し合っています！ どちらも全く引こうとしません！」

「二人とも負けず嫌いですからね。だからこそ次の一撃は互いに全力になるでしょう！」

「真つ向勝負だ！ いくぞ！ 幽香」

「ふふ……そうこなくつちやあね！」

魔力を練り上げ、全身から紅いオーラを立ち昇らせるレミリア。

対する幽香もこれまでになく妖力を高める。すると、その背に光り輝く羽のようなも

のが現れた。

両者の魔力と妖力のぶつかり合いは凄まじい圧となつて、観客席を守る結界を振動させる。

「さあ！ 受けてみなさいレミリアー！」

ドオオオオオンッ！

幽香の両手から超巨大レーザーが放たれた。

見た目は魔理沙のマスタースパークにそっくりだが、さとりを吹き飛ばしたときのそれと比べても更に上と感じさせる迫力だ。

「くぐぐ！！」

レミリアは宣言通り、幽香のマスタースパークに正面から立ち向かう。

超巨大レーザーに向けて猛烈な速度で突撃をかける吸血鬼の女王。

すぐに両者は空中にて激突する。

だが、明らかにマスタースパークの威力の方が上回っている。

「ぐ……ぬ……あああああああ！」

——さあ、ここが勝負どころ！ 紅魔拳!!!

レミリアの全身を包む紅いオーラが爆発的に増加する。

先程まで押されていたマスタースパークを徐々に押し返し始めた。

「!?——まだまだ!」

ズンツ!

武舞台を両の足で踏みしだき、さらにマスタースパークの出力を上げる幽香。

「——つ……あああああああ!」

対抗するレミリアも限界までオーラを高めて極太レーザーを押し返す。

紅魔拳は魔力や体力を引き換えにパワー、スピード共に何倍にも強化する奥義。二元になったのはもちろん界王拳である。

レミリアは一回戦でもこの技による圧倒的な速度を利用して霊夢に勝利していた。

ついに紅い吸血鬼の突撃がレーザーを左右に引き裂いた。

「ずりやあああああああ!」

遮るものがなくなったレミリアの突進は一瞬で幽香との距離を詰め、その体に突き刺さる。

「——ぐはっ!!!」

身体がくの字形になり、激しく場外に吹き飛ぶ花の妖怪。

ガアアアアアアアアアツ!!!

幽香を吹き飛ばしたレミリアだが、本人にもその勢いを制御しきれず、観客席を守る

結界に衝突してしまった。

「いけません！ 結界が！」

あらゆる攻撃を抑え込んできた結界だが、幽香のマスタースパークすら押しつける超ド級の体当たりを受けて、とうとう限界を迎える。

だが、解説席にいた紫が観客を守るため、即座にレミリアの前にスキマを開く。

「——うおっ！」

スキマを通って武舞台の中央に戻されるレミリア。

急いで辺りを見渡すと、場外で倒れている幽香を見つけた。

わずかに動いているが、さすがにダメージが大きく、すぐには立ち上がれないようだ。

ここで10カウントにより、審判による決着が宣言される。

「勝者！ レミリア・スカーレット！」

「優勝！ 優勝です！ 第一回天界一武道会の優勝者は紅魔館のレミリア・スカーレット選手だああああああああつ！！」

わあああああああああ！

第三十二話 『天界一武道会（エピソード）』

天界一武道会・宴会場——

「納得いかないぜ」

「ん？ どうしたの魔理沙？」

見るからに不機嫌ですよといった魔理沙にレミリアがコテンと首をかしげる。

「天界一武道会の結果だよ！ 私が初戦負けっておかしいだろ！」

「そこはトーナメントだからそういうこともあるでしょ。霊夢だって初戦負けだし」

「霊夢はお前と激戦を繰り広げたじゃないか。私なんて戦闘シーンカットだぞ！」

混乱した魔理沙は訳の分からないことを口走った。

「今日が結果発表の第16回人気投票でも、この魔理沙様が4位だと!? 私は常に3位

以内にいないとダメだ！ でなければ宇宙の法則が乱れる！」

大宇宙の意思により魔理沙は訳の分からないことを口走った。

「まあ、魔理沙の相手は準優勝の幽香だったしねー。他に相手が悪かったといえれば妖夢か」

妹紅に敗れた妖夢も初戦負けだが、チラリと彼女を見ると特に騒がずに静かに酒を飲

んでいた。

その姿からは余裕を——人気投票¹位圧倒的勝者の気配を感じさせる。

「人気なんてどーでもいいわよ。その分、お賽銭でも入れてくれれば感謝するけど」

「霊夢は今日も平常運転である。このクールさも長年にわたり支持を集める要因なのだろう。」

そのあたり、熱い魔理沙とよい感じに対比となっている。

「魔理沙はまだ参加できただけマシさ。私なんてちよつと地底に行ってる間にこんな面白そうな祭りへの参加を逃したんだよ！」

伊吹萃香はやけ酒を飲んでいった。

「どうどう、落ち着きなさいよ萃香」

レミリアが目が据わっている鬼を落ち着かせようとするが、かなり酔っぱらっていて話が通じそうにない。

「あんたが戻る前に参加枠が埋まっちゃったから仕方ないでしょ」

「参加枠が8人って少なすぎるよ〜」

「うわあああと酔っ払いが絡みついてくるが、可哀想に思っていたこともあり、邪険にも出来ず、抱きとめるレミリア。」

鬼と吸血鬼がわちゃわちゃやっている、紫とパチュリーが二人のもとにやって来

た。

「相変わらず仲がよいですね、あなたたち」

「まあ、心の友だし？」

「ねえ実際のところさ、その心の友の存在を忘れてなかった？　ねえ？」

萃香が絡みついたまま聞いてくるが、無言でそつと視線を外すレミリア。

そしてさり気なく話題を変える。

「……しかし、解説にゆかりんを呼んでてよかったわ。決勝戦は場合によっては観客に

被害が出てたかもしれないしね」

「本当ですよ。感謝してください」

もう「ゆかりん」呼びにツツコミをいれなくなった紫。

「まさかあの結界が壊れるとは……。相当、強力なやつだったんだけど」

観客席を守る結界にはそれなりに自信のあったパチュリーがやや落ち込み気味だ。

「決勝戦までは攻撃の余波を完全に抑え込んでたし、十分な強度はあったわよ。ただ、このレミリアは日々、進歩しているというだけね」

胸を張って自信満々に答える吸血幼女。

「それも計算に入れて余裕を持った設計だったんだけどね。ま、私もまだまだってことか」

魔法研究者として更なる精進を決意する紫の魔女。

第二回大会が開催されれば、改良型の結界を披露することだろう。

「覚えてなさい！　今回は特別に花を持たせてあげたけど、次はこうはいかないわ！」

「あらあら。私に花を持たせるって、上手いこと言うのね」

「くうう、いつかその余裕な顔を歪ませてやるわ！」

天子が幽香に突つかかっているが、優雅に躲かれて歯噛みしている。

「飲んでいるかしら？」

酔っぱらった小鬼に絡みつかれたままのレミリアが花の妖怪と天人のところに近づく。

「ええ。おかげさまで楽しく飲ませてもらっているわ。あれだけ暴れることが出来たのは久しぶりよ」

「ふん……（優勝おめでと）」

何だかんだで楽しんでいるが、素直じゃない天人。

天子の仇をレミリアが取った形でもあるので、そのことを喜んでいるのだが、お祝いの言葉は絶妙な小ささで呟かれていた。

幽香にはそれが聞こえているが、空気を呼んで指摘しない。その代わりにレミリアに

質問を投げる。

「ねえ、レミリア。第一回ということは今後も武道会は開催されるのよね？」

「そうね。紫とも話したんだけど、通常の弾幕ごっこよりもこの武道会みたいな闘いを好む妖怪も多いわ」

「あなたにくつついてる小鬼みたいだね」

「そうね」

「それがわかってて」

「はいはい。悪かったわよ。次は優先的に参加枠を取つとくわ」

「約束だよ」

「……（幼女をあやす幼女）」

「——それで、そういう武闘派連中のガス抜きも兼ねて武道会の開催は継続することになったわけよ」

「そう。それは楽しみが増えるわね」

レミリアと天子の思いつきで始めた武道会だが、幻想郷的にも良い効果が見込めるとして、今後も妖怪の賢者たちが協力してくれることとなっていた。

「次こそ、この比那名居天子が優勝してみせるわ！」

「いやいや、次はこの伊吹萃香が出るからね。優勝はいただきさ」

「う!? ……、小鬼め。また私の前に立ち塞がるというの」

早くも次の武道会の話題で盛り上がる参加者たちを見ながら、レミリアは次に起こる異変について考えていた。

——時系列でいえば次は星蓮船か。思えば多くの人妖たちと出会ってきたものねえ。命蓮寺一行に会うのが楽しみだわ。

第三十三話 『お嬢様の華麗なる一日』

午前3時

紅魔館――

レミリア・スカーレットの朝は早い。

日光を克服した彼女に隙はなく、人間と同じ日中でも一般的な吸血鬼と同じ夜間でも好きな時に活動することが出来るからだ。

この日のレミリアは香霖堂に用事があったので朝の3時に起床していた。

幻想郷の自由な連中は昼夜関係なく香霖堂を訪れて店主を困らせているが、吸血鬼の女王として礼儀も弁えている紅魔館の主はきちんと日が出てから来店することにして

――

午前5時

香霖堂――

「おはよう、店主！ このレミリアが来てあげたわよ！」

勢いよく入り口を開き、ずかずかと店内に入るレミリア。

ちなみに以前は扉に鍵がかかっていたが、傍若無人な少女たちに何度も壊された結果、店主は鍵を付けることをやめた。

「ダメじゃないまだ寝ているなんて！ とつくに日は昇っているわよー！」

レミリアが騒いでいると、店の奥から一人の男性が現れた。

銀髪に金の瞳、眼鏡をかけ、黒と青の左右非対称の特徴的な服装をしている。

彼がこの香霖堂の店主——森近霖之助だ。

「……………レミリア？」

「もう開店時間は過ぎていているわよー！」

「いや、君。開店時間は……………」

「さつそく最近仕入れた商品を見せてもらえるかしら？」

「……………はあ。かしこまりました、お嬢様」

諦めた霖之助は商品を棚から持つてくる。

レミリアはそろそろ携帯が幻想入りしてはるはず……………とか言いながら商品の山をゴソゴソし始めた。どれも店主がそこらへんから拾ってきたものだ。

「……………とこころで霖之助」

「なんだい？」

商品を探しながら何気なく問いかけるレミリア。

「慧音とはどうなのかしら？」

「ぶっ!？」

唐突なレミリアの発言に噴き出す霖之助。

「な、なにを言っているんだい？ 僕と慧音は別にそんな……」

「そう？ なら魔理沙とは？」

「……魔理沙は可愛い妹分さ」

「ふくん……」

——うくん。今のままでとちよつと厳しいわよ、魔理沙。はやいところ妹ポジションから脱却しないと負けてしまうわ。

夜の帝王たるレミリアだが、少女としてやはり恋愛話に興味があるようだ。

ガラケーが幻想入りしているだろうと探したレミリアだが、残念ながらもまだ香霖堂にはなく、切り上げて人里に向かうのだった。

——

午前9時

人里——

「お前、すっかり人里に馴染んでいるな」

「今の私は謎の人間の少女レミイちゃんよ。馴染むのは当たり前」

いつも通り、人里では羽を隠して人間の振りをしているレミリア。

今は授業の準備をしている慧音の寺子屋で、のんびりと中華まんを頬張っていた。

「ところで慧音」

「なんだ？」

「霖之助とはどうなのかしら？」

「ぶっ!？」

唐突なレミリアの発言に噴き出す慧音。

「な、なにを言い出すんだ？ 私と霖之助は別にそんな……」

——こいつら、反応が同じ！

「いや、なに。今日は朝から香霖堂に買い物に行つてね」

「ほ、ほう？」

「そこで慧音の話題も出たのよ」

「ほ……ほほう？」

「——さて、授業の邪魔しちゃ悪いし。そろそろ行こうかな」

「!? お、おい……私の話題が出てどうなったんだ？」

「ん〜……ひみつ♪」

「おいしい！　そこまで言っておいて——」

レミリアは脱兎のごとく寺子屋を出ていった。

「悪いわね、慧音。どちらかといえば私は魔理沙寄りの中立よ。これ以上は言えないわ」
ひとりごとを言いながら、移動するレミリア。

——

午後1時

霧雨魔法店——

「ほら、魔理沙。キノコばかり食べてないで肉も食べなさい」

レミリアは持参した肉（非人間）でバーベキューをしていた。

「いや……レミリア。差し入れは有難いんだが、別に私はキノコしか食べていないわけじゃないぜ？」

「その割には発育が悪いわね」

「うるさいな。お前には言われたくないぜ」

「そんなことじゃあ、いつまでたっても妹分扱いで振り向いてもらえないわよ」

「は？ なんのことだ？」

「霖之助のことよ」

「ぶっ!？」

唐突なレミリアの発言に噴き出す魔理沙。

「な、なにを言うんだ？ 振り向くって……私と香霖は別にそんな……」

「あんたら……もう三人で一緒に住んだら？」

「三人??」

言われた意味は分からないが、呆れた目を向けるレミリアに魔理沙は憤然と言い返す。

「魔道の探求に忙しい私に色恋沙汰にかまっている暇なんてないぜ」

「あれだけ恋符やら恋心やらをスペカ名につけといて？」

「それはそれ、これはこれだ」

「やれやれ……そんなんじやあ慧音や霊夢に先を越されるわよ」

「えっ？ 慧音や霊夢って……あいつらに限ってそんな浮いた話があるわけ……まさか、ほんとに?」

「あら、色恋沙汰に興味はないんじゃないの？」

「う……いや、やはり親しい人間の交友関係は把握しておかないとな。それで、どうなん

だ？」

「あー、昼間から肉を焼きつつ飲むワインは上手いわね」

「そ、そうだな。……ところでさっきの話だが」

「さて、あまり食べすぎて夕食が入らなくなったら困るし、このくらいにするかな」

「いや、だからレミア」

「余った肉はあげるからしっかり食べなさい。じゃあね」

「おい、ちよつと——」

呼び止める魔理沙の声を振り切り、レミアは紅魔館への帰路に就いた。

「個人的には味方をしてあげたいけど、あまりに鼻根が過ぎるのもね。ま、このくらい焦らせるくらいが魔理沙にはちょうどいいでしょ」

恋愛合戦で魔理沙寄りの中立と自負するレミアとしては、多少背中を押す程度の援護が落としどころなのだろう。

——

午後5時

博麗神社——

「霊夢には誰か良い人はいないの？」

「いないわよ」

「あつさりしてるわねえ。ほら、例えば香霖堂の店主とか」

「霖之助さんねえ。すでにあの人に好意を持っているのが何人かいるみたいだけど」

「それは知ってるわ」

「いかにも興味はありませんといった気配を出しながら霊夢は土産のお団子を食べながらお茶を飲んでいた。

「すましちやつてるけど、霊夢も昔は美形の女剣士（明羅）との結婚をOKしたとか何とか」

「ゴフアアツ!?」

「思わぬところで黒歴史旧作の話を掘り起こされて盛大にお茶を噴き出す霊夢。

「ゴハッ! ゴハッ! ……あ、あんた何でそれを……!」

「んく。情報源は秘密」

「魅魔あああああつ! 覚えてなさいよおおお!」

「霊夢は額に青筋を立てて叫ぶ。

「あらあら。私は魅魔から聞いたとは一言も言ってないけどね」

「あいつ以外にそのことを知ってて、言いふらしそうなのやっなんていないわよ!」

魔理沙ですら自機ではなかった頃で、霊夢が当時の黒幕だった魅魔を犯人と考えるのは不自然ではないといえる。

「あらそうかしら？ 例えば亀……とか」

ハツとした顔をする霊夢。

「まさか、玄爺が……？」

ニヤニヤとして何も言わないレミリア。

本人（亀）に聞いた方が早いと思ったのか、霊夢はかつての相棒がいる池の方に飛び出していった。

もちろん、レミリアは前世の知識として知っているだけなので、魅魔も玄爺もとぼちりである。

「ククク……なんだかんと言って霊夢も年頃の乙女よね」

レミリアは悪い顔で満足気に頷きながら紅魔館に帰っていった。

——

午後9時

紅魔館——

幻想郷の少女たちの恋愛事情を引つ掻き回した確認したレミリアは紅魔ファミリ

に愚痴っていた。

「霖之助にも困ったもんだわ。まったく進展がないんだから」

「霖之助さんは積極的によくタイプではないですからね。それこそ女性側からいかないと進まないのでは？」

冷静に男女の立ち位置を分析する咲夜。

「ま、やっぱりそうなるわよねー」

「そういうお嬢様こそ、恋愛的な話はないんですか？」

ないんだろうな、という雰囲気を出しながらレミリアに尋ねる美鈴。

「私？ んー……私は実質、パチエと結婚してるようなもんだし？」

「ブハッ！」

唐突なレミリアの発言に噴き出すパチユリー。

「ゴホツゴホツ！」

「ああ、ほら。急に噴き出すから咳が止まらなくなってるわ」

パチユリーの背中をさするレミリア。

「誰が噴き出させたのよ……」

「ま、でもウソは言っていないでしょ？ パチエが紅魔館に来る時のアレよ」

「う……それはそうだけ……」

「え？ 冗談でなく、実際にそういう展開があったんですか!？」

「お、おとお嬢様?!」

予想外の爆弾発言に驚愕する美鈴と驚きのあまり震えて紅茶をこぼす咲夜。

「まあねー」

「あー、あれかあ」

フランドールは何か事情を知っているようで納得したように頷く。

「ど、どんないきさつなんですか!？」

美鈴が勢い込む。

「うふふ……秘密♪ フランも言っちゃだめよ」

「はーい」

「ええ！ ここまで秘密とか酷いですよ、二人とも!」

お預けを食らい、憤慨する美鈴。

咲夜はまだ動揺から立ち直れておらず、震えている。

レミリアとパチュリーの出会いに関してはいずれ語られることもあるだろうが、この

日はレミリアがはぐらかしたので、これ以上の話はなかった。

――

午後11時

就
寝

第三十四話 『星蓮船異変』

香霖堂——

レミリアは自室に置くインテリアを探しに香霖堂を訪れていた。

「この宝塔に目を付けるとはお目が高い」

最近入荷した商品がいきなり売れそうだと上機嫌の霖之助。

「ふふふ……まあね。ちょうどよい大きさに、強すぎず弱すぎない輝き。自室のインテリアにピッタリよ」

「い、インテリア……？ ひよつとして君はこれの価値に気が付いていないのか？」

「いや、わかるわよ。どこぞの神仏の秘宝でしょ？ けど私にとってはただの良さげな飾りにすぎないのよ」

「……はあ。価値をわかっていてその発言。流石だよ、レミリア」

「当然ね」

胸を張るレミリア。

「誉めたわけじゃないんだけどね」

呆れたため息をつく霖之助。

レミリアは購入した宝塔をドアノブカバー風の帽子の中に入れて移動する。

「いい買い物をしたわ。时期的にそろそろ香霖堂に入荷されるだろうって予想が当たったわね」

上機嫌で紅魔館に移動しながら、これから起こる異変のことを考える。

「どこぞのネズミ（ナズーリン）に高値で売りつけてもいいんだけど、魔道を追及する者として毘沙門天の宝塔には興味があるわ。パチエと一緒にいじくり回そうつと」

——

紅魔館——

「パチエー！ 良いものを手に入れたわよー！」

「良いもの……。また厄介ごとの種じゃないでしょうね？」

いつも騒動を運んでくるレミリアの言うことなので、やや警戒しながら尋ねるパチユリー。

「心外だな。魔道の探究者である我が友なら興味を持つはずさ」

そう言うのと帽子からそれを取り出すお嬢様。

「じゃじゃん！　これよ、毘沙門天の宝塔！」

「毘沙門天……東洋の神様ね。それって本物なの？」

「もちろん本物さ！　香霖堂店主のお墨付きもある！」

それを聞いてパチュリーの眉がピクリと跳ねた。

「へえ、香霖堂。……それでいくら使ったの？」

親友の反応にビクツとする吸血鬼の女王。

「う、ま、まあ……そこそこかな？　そう高くはなかったぞ？　店主としてもすぐに売れ

る保証もないからだろうな、うん」

「……」

「急に無表情になるのはやめて！」

このあと二人で滅茶苦茶、研究した。

——

数日後——

「お姉様はいるかしら?」

「うああああ! 離せ——!」

悪魔の妹、フランドールが大図書館にやってきた。片手で自分と同じくらい小柄な少女をぶら下げている。

少女は必死に振りほどこうとしているが、吸血鬼の腕力の前にビクともしていない。

「あら、どうしたの? フラン」

「お姉様。このネズミさんがゴソゴソ忍び込んでいるところを見つけたから、捕まえたの」

「違うんだよ! 私は泥棒じゃないんだ!」

「なるほど、言い訳はわかったわ。それでネズミさん? あなたはここがどこかご存じかしら」

「たしか吸血鬼が住まう館だとか……」

「その通り。この紅魔館は吸血鬼の女王たるレミア・スカーレットの居城。つまり貴方は王城に無断侵入して捕まった賊つてところね。さて、その場合の賊がどうなるか分かるかな?」

「ヒッ!」

ネズミさんと言われるだけあって、ネズミ風の耳と尻尾が恐怖に縮こまってしまっ

た。

彼女は毘沙門天直属の古参妖怪でスカーレット姉妹より年上なのだが、今の姿からはそんな立場を伺えない。

「お姉様ー。イジメちゃ可哀想だよ」

「フランは優しいわね」

——まあ、元々、彼女をどうこうするつもりもないけどさ。

『小さい身体に見合わず尊大。下手に出ると増長して交渉が上手くいかない。脅迫する位強気に出た方が上手くいくだろう』って阿求のアドバイスもあるから、多少ビビらせないとね。

求聞史紀や求聞口授の稗田阿求さんは相変わらず毒舌気味である。

「可愛い妹に言われたら仕方ないわね。本来は串刺しにするとところだけど、勘弁してあげるわ」

「く、串刺し……!?!」

「それで何をしに紅魔館に侵入したのかしら?」

「あ、それなんだけど、宝塔——宝玉の上に屋根が乗っている物なんだが、知らないかい?」

「……」

レミリアは無言だが、パチュリーがジト目で見てきている。

「……その宝塔とやらがどうかしたの？」

「いや、それは私の主の物なんだが、どこかに落としたりしたらくてね。それで失せ物探しが得意な私が搜索していたところ、この館から反応があつたんだよ」

「レミイ」

「わかつてるわよ、パチエ。……それってこれでしょ？」

レミリアは帽子から宝塔を取り出した。

「！　そう、それだよ！　やっぱりここにあつたか！」

嬉しそうに宝塔に手を伸ばすが、サツと躲すレミリア。

「ダメよ。これはもう私の物なの」

「い、いや……それは我が主の大切な物で……」

「私は古道具屋から大金で買ったのよ。ただでは返せないわ」

「う、うぐぐ……。わかったよ。なら、買い戻させてくれ。いくらだい？」

「66兆2000億」

「!?　……はは、吸血鬼の女王殿は冗談がお好きなようで」

「出せなくはないだろう……世界中のネズミを総動員すれば何とでもなるはずだ」

「できるかあああああーっ!!!」

とうとう激怒して咆哮するネズミ妖怪。

「はっはっは、ごめんごめん。一億二千万円でいいわよ」

「それなら……つて、まだ高すぎるでしょ！」

「あら……この宝塔の価値を考えたら妥当じゃない？ だって、これがないと貴方たちの大切な人の封印が解けないんでしょ」

「なっ!? 何故そのことを……」

「うふふ……はい」

レミリアは妖しく笑うとナズーリンに宝塔を手渡した。

「え?」

「いいわよ、持って行って」

「え……でも代金は……」

「お金には困ってないからいいわよ。個人的に神仏の秘宝に興味があっただけだから」

「……! すまない、恩に着る! 私はナズーリンという。このお礼ははずれまた!」

そう言うとなズーリンは宝塔を大事そうに抱えて去っていった。

「最初つから返してあげるつもりだったくせにく。意地悪ね、お姉様」

「いやいや。やっぱり悪魔として舐められるわけにはいかないからね。……さてさて、

面白くなつてきた」

「封印がどうか言つてたけど、大丈夫なの？」

あからさまに危険なワードを見過ごせず、確認するパチユリー。

「問題ないわ。私の見たところ、愉快的連中が幻想郷の仲間入りをするだけよ」

「……スキマ妖怪の心労が増えそうな予感」

「あら？ パチエとゆかりんつて仲良かったっけ」

「前の天界の騒動以来ちよつとね」

「パチユリーも紫お姉さんも、どっちも苦勞人ポジションだもんね」

「わかつてるなら姉を何とかしてよ、フラン」

「あはは！ 無理だよ。だってそれがお姉さまの『騒動を起こす程度の能力』だし」

「そうよね」

「え？ 何その能力。私、本人を前にしてdisられてる……？」

—————

三馬鹿（靈夢、魔理沙、早苗）が空飛ぶ船の異変を解決したとの噂が流れてから、しばらく経つたある日のこと。紅魔館に来客があつた。

「私は命蓮寺の聖　白蓮。ナズーリンが言うには、紛失していた毘沙門天の宝塔を無償で譲っていただいたとか。あれは私の封印を解くのに必要な秘宝でした。ありがとう
ごじます」

噂の幻想郷への新しい仲間が、紅魔館に挨拶に来ていた。

長い金髪には頭頂部から紫のグラデーションがかかっている。

ゴスロリ風の黒いドレスに黒いマント。

一見して魔法使いのようであり、実際に魔法使いなのだが、彼女の本職は僧侶。

「これよ、これ！　どこぞの神社の連中とは違うわね！　自分から挨拶に来るとはわ

かってるわ。紅魔ポイントで命蓮寺が1点リードよ！」

客間にて対応したレミリアは命蓮寺の評価を上げていた。

そしてさりげなく下げられる守矢神社。

「聞いたことがないポイントですが……」

咲夜が突っ込むが、フリーダムなお嬢様は気にしない。

「ふん。人妖平等ねえ」

「ええ。レミリアさんはどうお考えになりますか？」

「幻想郷的にはちよつと危険な思想じゃないかしら。妖怪は人間を襲い、人間は妖怪を畏れつつも退治する、このバランスが崩れる可能性があるわ」

「……私としてはその枠組みをどうしようかとまでは思っていない。我が命蓮寺が庇護するのは不当に虐げられる妖怪たちです。強い妖怪を導こうとは考えていませんので」

「ん〜。ならまだ大丈夫かな？ それくらいなら紫も目くじらを立てたりしないでしょ」

「紫……という方は幻想郷の代表のような妖怪でしょうか」

「この世界を作った賢者の一人よ。そのうち、紫から命蓮寺に行くと思うわ。新勢力の動向は気になるでしょうしね」

「なるほど」

「……しかし、人間と妖怪の平等な世界か。幻想郷は一応、人妖の共存を成してはいるけど、それ以上を望んでいるのよね？」

「はい。この世界でも少数の強力な妖怪を除けば、争いを望まぬがゆえに不当に低い身分に追いやられている妖怪は存在します。彼らを救っていきたくて考えています」

「古来からそれを達成した者はいないと知って言っているのね？」

「……はい」

「妖怪も人間も強者とされる連中はそういうのに興味ないからねえ。弱小妖怪を導くのはいいけれど、強者の協力も必要なんじゃないかしら」

「おっしゃる通りかと。しかしそれに賛同してくれそうな方はなかなか……」

意外とレミリアと白蓮の会談は盛り上がり、長時間話し込んでいたところで、おやつ
の時間となった。

「今日のおやつは特製ケーキです」

咲夜が生クリームたっぷりのケーキを二つ持って現れた。

「これよ、これ！ ちょうど食べたいと思っていたのよ！ さすがね、咲夜！」

レミリアは喜んでいるが、白蓮は見たこともないスイーツに困惑気味だ。

「紅魔館のメイド長たるもの、当然のことですわ。もちろん、お嬢様の方は生クリーム2倍となっております」

「さすがだわ！」

「メイド長ですから」

「……」

白蓮が阿吽の呼吸の紅魔主従を見ていると、門の方で何やら騒いでいる声が聞こえて

きた。

「せっかくのおやつタイムにうるさいわね。いつもの魔理沙の侵入かしら？」

「魔理沙は先程、図書館で見かけました。あれは美鈴に挑みに来た武術家のようですね」
「武術家の挑戦か！ ちょうどいいわ。おやつを食べながら観戦と行きましょう。行くわよ、白蓮」

「え？」

レミリアは有無を言わず白蓮をテラスまで連れて行つた。

紅魔館の門前では激しい格闘戦が繰り広げられている。

その武芸者は空が飛べないのか、または飛べても戦いで使えるほどではないのかは分からないが、地に足をつけたまま戦っている。

それでも美鈴の華光玉などの弾幕も巧みな足さばきで躲すなど、高い技量が感じられた。

最後は武術家の渾身の突きが紙一重で躲され、反撃の『彩光蓮華掌』がまともに決まったことで、紅魔館門番の勝ちとなった。

「おおー！」

「見事なものですな。魔理沙相手の弾幕ごっこでもこうであれば安心なのですが」
「あの技、食らったことあるけどきつついのよね。吸血鬼に効果抜群の特性でもあるのかしら」

「美鈴殿。今日も良き試合をありがとう。私もまだまだ修行が足りぬ」

「いえ、こちらこそ。いい鍛錬になりました。またいつでも来てください」

爽やかな握手を交わす美鈴と人里の武術家。

「……」

その光景を白蓮はじっと見ている。

「こらあああああ！ 待ちなさい、魔理沙！」

「はっはー！ 勝手知ったる紅魔館！ この館の中で私を捕まえられるかな！」

「あらあら、最近魔理沙が大人しかったから、パチエも油断してたのかしら」

「放っておいてよろしいのですか？ お嬢様」

「あれは魔理沙とパチエの勝負みたいなものだし？ 邪魔するのは無粋でしょ」

「それもそうですね」

「……あの」

遠慮がちに紅魔主従に声をかける白蓮。

「どうしたの？ 白蓮」

「普通に出来てません？ 共存……」

「？」

「いやいや、そんな不思議そうにしないでくださいよー！」

首をかしげる吸血鬼にすごい勢いで詰め寄る白蓮。

「人間の咲夜さんは吸血鬼のレミリアさんと阿吽の呼吸だし、美鈴さんも人里の武術家さんと定期的に修業してるみたいですし、魔理沙さんは自分の家みたいなの振る舞いでしたよ。人里以外でここまで人妖が馴染んでいるのは、ここくらいしかありませんでしたよ!?」

それを聞いてハツと言われてみれば、のような顔になるレミリア。

「気づいてなかったんですか!? ……一つ、お聞きします。レミリアさんにとって咲夜さんはどういう存在ですか？（普通の吸血鬼なら下僕や食料と答える。しかし、二人には主従としての信頼関係はあるように見受けられます。ですが、私が望むのはそうではありません。もし、それ以上の答えが返ってくるとすれば——）」

「そんなの決まってるわ。 ” 家族 ” よ」

「!!」

それを聞き、白蓮はくわつと目を見開いた。

咲夜は無言で控えているが、どこか嬉し気な気配を漂わせている。

「おおお……大物妖怪が、それもかの吸血鬼が人間を家族と……。——ここか！ この悪魔の館から私の理想は始めるべきだったか！ ついに見つけましたよ!!」

「え、ちよつ……。!? 急にどうしたの!」

「はーはっはっはっはっはー!」

最初の礼儀正しい姿がどこかに消え、ハイテンションで笑い続ける聖白蓮。

レミリアは急展開についていけない。

白蓮が復活して以降、何人もの強力な妖怪と話したが、自身の理想を語っても興味を持たれないか、そんなことは不可能だと言われる日々。

その中で吸血鬼の女王は真面目に話を聞いてくれた。

そればかりか、妖怪と人間の共存の形も見せてくれた。

あくまでここでの一幕は妖怪や人間の中でも強者に位置する者の姿に過ぎない。

それでも白蓮は嬉しかった。特にレミリアが咲夜を家族と呼んだことが。

この日以降、紅魔館への常連客に妖怪命蓮寺の魔住職が加わることになる。

第三十五話 『般若湯』

命蓮寺——

射命丸文は幻想郷へと仲間入りした命蓮寺に取材を申し込んでいた。

文を紹介したレミリアも烏天狗が粗相をしないか見張るために同行している。

「白蓮さんは封印から解放されて日が浅いとのことですが、すでに紅魔館の皆さんと顔見知りなのですね」

「ええ。お邪魔させていただきました。紅魔館は素晴らしいところです。当主のレミリアさんには今後も色々和相談に乗っていただきたいと考えています」

白蓮は非常に好意的なコメントをする。横にいるレミリアはどや顔で、あまりない胸を反らしている。

「白蓮さん。強引に言わされているなら力になりますよ？」

「はい？」

ガタツ

「ちよつと、あんた！いきなり失礼でしょ！」

「いや、だつておかしいですよ！　まだここにきて日も浅いのに、この好感度の高さはありえません！」

「それが私のカリスマのなせるわざよ！」

文とレミリアはギャーギャーと言いつ合っている。

「お二人は仲がいいんですね」

そんな二人をのほほんと眺めている白蓮。

「……（白蓮さんは変わった方の方のようですね。いままでの幻想郷の主要な勢力のトップにはいないタイプです）」

「（そうねえ。あえて言うなら幽々子が近いかもしれないけど、あれはあれで紫の親友だけあつて黒いところがあるしね）」

今度はコソコソと内緒話をする二人。

白蓮は変わらずニコニコしながら待っている。

「ごほん、失礼。白蓮さんのあまりの清廉さに戸惑ってしまいました」

「私は清廉などではありませんよ。修行中の未熟者もいいところです」

「謙虚！　どこぞの吸血鬼にも見習つてほしいものです」

「喧嘩を売っているんだな？　高く買うぞ」

「いえいえ、そんな、まさか」

ツメを光らせながらじりじり迫るレミリアに、少しずつ距離を取りながらも取材を続ける天狗。

「白蓮さんは幻想郷の誇る異変解決者の何人かにお会いになったようですね？」

「異変解決者……私が封印から解き放たれたときに三人の人間がいましたが、彼女たちのことですね。全員、独特な方でした」

「霊夢、魔理沙、早苗か」

「強欲巫女、泥棒魔女、非常識風祝ですね。彼女たちには気を付けた方がいいですよ。幻想郷の要注意人間トップスリーです」

「その三人だと魔理沙がマシかしら。あいつが通った後は物が時々なくなること目をつぶれば問題はないわ」

「かなり問題がある様に聞こえるのですが……」

まったく安心できない白蓮。

「危ないのは霊夢と早苗ね」

「霊夢さんには油断ならない覇気を感じましたが、早苗さんもですか？」

「早苗本人もそれなりだけど、注意すべきは守矢神社よ。最近の異変は大体、あそこが元凶になっているもの」

「最近というと、地底の異変と宝船の異変ですね」

記者としてあらゆる異変を調べている文にはすぐに察しがついた。

「そう。どっちも異変の元をたどれば守矢神社に行きつくわ」

「困った神様たちですね」

「宝船の異変——私たちが解放されたときですね。しかし、守矢神社の二柱には命蓮寺の土地の地ならしなどで尽力いただきましたが……」

「それ、善意だけでやってると思ってるの？」

「ええと……違うのですか？」

「なんとという純粹さ！ 生粋の妖には眩しすぎます……！」

「まあ、なんだ。善意もあるかもしれないが、それでも守矢神社を信用し過ぎない方がいいぞ。なにせ紀元前からこの国に君臨する神々。老獪さは半端じゃないわ」

「そうですか……」

——思いの外、おっとりしているわ。平常時だと苛烈な面が全然ないわね。スイッチが入るまではこんな感じなのか。

過去には世の表も裏も見てきたはずの白蓮だが、レミリアの想定以上に穏やかな人柄のようだ。

「……………」

「……………!?!」

隣の部屋から騒ぎが聞こえる。

騒音は段々とこの部屋に近づいてきている。

「ずいぶんと勝手なことを言ってくれますね!」

バーン!と襖を開けて登場したのは噂の守矢神社の現人神——東風谷早苗である。

神奈子たちが命蓮寺の建造に協力した関係で今後の話をしに来ていたらしい。

「取材が終わるまで大人しく待っているつもりでしたが、神奈子様や諏訪子様が誤解されそうとあつては黙っていられません!」

「申し訳ありません! 止めたのですが、彼女が制止を振り切り……」

早苗に続いて現れたのは虎の気配を感じさせる女性。

毘沙門天の弟子にして代理である寅丸星だ。従者のナズーリンもいる。

「やあ、レミリア。先日はありがとう。ご主人様も感謝しているよ!」

「それはよかったわ。ナズーリン………だったわね。そっちの虎っぽい妖怪があなたの主かしら?」

「うん、そうだよ」

「寅丸星です。レミリア殿には宝塔を見つけた上、無償で譲っていただいたとか。まことにありがたいございます」

深々と頭を下げる毘沙門天代理。

「あら、気にしなくていいわよ」

とはいいつつも機嫌よさげなレミリア。

「それでどうしたんですか？ 早苗さん」

取材を邪魔されて嫌そうな顔の文だが、一応聞いてあげるらしい。

「あ、そうです！ 神奈子様、諏訪子様はみんなが幸せになることを望んでいるのです！

その結果として信仰が増えればなくと考えるはいますが、決して邪なことは——」

「はいはい、わかったわかった」

「その態度、全然わかってないでしょ！」

「ま、守矢神社の主張は日を改めて聞いてあげるわよ」

「むう……」

何気ない会話だが、これが後に神道の神様、仏教の僧侶、道教の仙人＋吸血鬼の女王による会談の前振りとなるのであった。

「しかし、文の持ってきたこのお酒はなかなかいけるわね」

「そうでしょう。天狗自慢の一品ですから。……というかレミリアさんに持ってきたんじゃないんですか」

ゴクリ……

誰かが喉を鳴らす音が聞こえた。

レミリアが顔を向けると寅丸星が口を押えている。

どうやら美味そうに飲まれるお酒について音を漏らしてしまったようだ。

「ささ、白蓮さんも遠慮なくどうぞ。これはあなた方へのお土産ですから」

「あ、申し訳ありませんが、お酒は遠慮しておきます。仏教の戒律で飲むことができませんので」

「なっ!? て、てて天狗の酒を断る!?! 平和主義者かと思えばまさかの戦争希望でしたか!」

「え! 戦争!?!」

「そうです! 天狗に勧められた酒を拒否するのは宣戦布告も同義というわけです!」

「い、いえ、私にそんなつもりは——」

「言葉だけでは信用できませんね! 行動で示してもらわないと!」

そうやって射命丸はぐいぐいと酒瓶を白蓮に押し付ける。

「ですから戒律で飲むことが出来ない……」

「あく聞こえませぬ〜」

ドゴン！

レミリアのお仕置き拳によって烏天狗は床に沈んだ。

「このカラスは放っておいていいわよ」

「は、はい」

ガバツと起き上がった文が抗議を始める。

「なにをするんですか、レミリアさん！ 私はそんなことでは幻想郷に馴染めないというのを教えようとして——」

「ちなみに外の世界だと無理矢理お酒を飲ませるのは『アルハラ』といって、酒飲みの迷惑行為で代表的なものよ。文ぐらいの古参妖怪がやれば間違はなく老害扱いね」

「ろっ、老害!? 大天狗様ならまだしも、この射命丸文が老害……!」

文は何やらシヨックを受けている。

「アルハラってかなり最近の言葉ですよ。なぜレミリアさんが知ってるんですか?」

少し前までは外の世界にいた早苗が不思議そうに聞く。

「ふふ……。私くらいになると多少の情報には手に入るのよ」

「ほえ〜。さすがは幻想郷の隠しボス。凄いですね」

「でも実際、命蓮寺では宴会はどうやってるの？ ああ、般若湯ってやつで？」

「いえいえいえ。それだと飲んじやつてるじゃないですか。命蓮寺でも宴会はありますが、みんなお酒なしでやっていますよ」

「真面目ですね」

「早苗は飲んでるの？ 外の世界だとお酒は二十歳からでしょ？」

「幻想郷にはその法律がないので……。まあ、ほどほどにしていますよ」
「そう」

「——あつ！ そ、そうです！」

老害判定によるショックで固まっていた文が動き出した。

「どうしたのよ」

「白蓮さんはお酒を飲まないとおっしゃいましたが、私は命蓮寺の方が人里で飲んでるのを見たことがあります！」

「ほう」

「え？」

「人里で？ ナズーリンではないですよね？」

「私じゃないよ。そんな目立つところで飲むわけないでしょ、ご主人様」

「それもそうですね」

目立たないところなら飲むかもしれない発言だが、軽く流す毘沙門天代理。

「つまり、先程までの白蓮さんの言葉は建前で実情は異なるということですよ！」

「……」

「つまりこの天狗の酒を飲んでも……って、どうしました？ 白蓮さ——!?!」

白蓮は先程までと同じく穏やかに微笑んでいる。

だが、彼女から文ほどの上級妖怪が一瞬、言葉に詰まるほどの威圧感を感じた。

「文さん。ちなみにそれは誰か分かりますか？」

「え、ああ。たしか雲居一輪さんと村紗水蜜さんでした」

「そうですか……」

自然な動作で立ち上がる白蓮。

彼女らが悪いわけではないが、その姿を見るナズーリンと星は震えている。

「白蓮さん？」

「申し訳ありません、文さん。用事が出来てしまいました」

「そ、そうですか。おかげさまで良い記事が書けそうです。名残惜しいですが、取材はこ

こまでとしましょう」

「おやおや」

——ご愁傷様ね。一輪と村紗船長。

人里——

「へえー、一輪は元人間なのか」

「まあね。入道の雲山と暮らしているうちに、いつしか私も妖怪になっていたわ」

霧雨魔理沙は人里の飲み屋で命蓮寺の妖怪——雲居一輪と酒を飲んでいた。

「ほうほう」

「妖怪に興味があるのかな？」

「ま、多少な。けどあまり深入りしないようにしている」

「なんで？ あ、妖怪退治がやりにくくなるからか」

「そうじゃない。……幻想郷においての禁忌があるからだ」

「禁忌？」

「〃里の人間が妖怪になる事〃これが幻想郷において最大の罪とされる」

「！なるほどね。ここの成り立ちを考えると納得ではある」

「私は魔法の森に住んでいるが生まれは人里だ。このルールを破れば怖い巫女や妖怪の

賢者が肅清に現れるだろう」

「……」

一輪は無言で酒をあおる。

「だが、心配するな。幻想郷成立前に妖怪になった連中は対象外らしい。あんたらは問題ないってことだな」

「ふーん……あんたの知り合いにいたのかい？」

「ん？」

「妖怪になって肅清された者が」

「……いや。いないぜ」

「そうか」

「酒の肴にはあまり合わない話題だったな。まあ、飲めよ」

魔理沙が空になっていた杯に注ぐ。

「お、悪いね。しかし、ここはいいねえ。寺だと大っぴらに飲めないからね」

「仏教は酒は禁止だったか」

「宗派によるけど命蓮寺ではダメだね。姐さんが許してくれないよ」

「それはツライ——!?!」

「どうかしたのかい？」

「い、いや……その……もし酒を飲んでるのが白蓮にバレたらどうなるんだ？」
「そりやもう、メチャクチャ南無三されるよ」

「そ、そうか……はは」

「イケないことだと理解してくれていて良かったです」

「は——!??」

一輪がバツと振り向くとそこには慈愛の笑みを見せる聖白蓮の姿があった。

肩には舟幽霊の村紗水蜜を担いでいる。どうやら気絶させしているようだ。

「あ、ああ……」

「私もまだまだ未熟者ですが、それ以上に貴方も修行が足りないようです。行きましようか、一輪」

「あ、い……ひ、あ……」

震えてまともに話せない一輪をひよいと担いだ白蓮は微笑みながら魔理沙に別れを告げた。

「それでは魔理沙さん、失礼します」

「あ、ああ……」

一輪が助けを求めると目で見てくるが、魔理沙はさつと目を逸らした。

「強い者は大抵、笑顔である……か」

魔法の森の魔法使いはドナドナされていく妖怪を見ながら納得して酒を飲んだ。

第三十六話 『仙界異変（前編）』

【仙界】

幻想郷とも異なる次元にある世界。

チカラのある仙人が生み出した、彼らが住まう空間である。

そこに今、招かれざる二人の侵入者がやって来ていた。

「我こそは紅魔館当主にして闇の支配者ツツツ」

「そして私は大地を操るスーパージェリート天人ツツツ」

空中に飛び上がり回転しながら名乗りを始める。

「ダカダカダカダカ♪」

二人のセルフドラマロールがほとばしる。

「レミリア・スカーレット!!!」

「比那名居天子!!!」

ダダンッ！

着地するとともに、口で奏でていたBGMを止める。

レミリアはこれ以上ないくらいに翼を広げて体を大きく見せ、天子は緋想の剣を高く掲げている。

「……………」

唐突に妙なものを見せられた仙界の主——豊聡耳神子はどんなリアクションをすればいいのか分からず、固まっている。

「ふっふっふ。私たちのカリスマに言葉もないようね」

「しよっぱなから一発かます策は成功ね、レミリア！」

「そうね。やはり最初の印象が大事だからな」

—————

時間は少し前の紅魔館に戻る——

「旧一万円札ですよ、レミリアさん！ ついに復活を遂げたのです！」

珍しく紅魔館に来た東風谷早苗がテンション高く告げる。

「は？ 古いお札が幻想入りしたってこと？」

「こいつ相変わらず飛ばしてるな、という顔をしながら内容を確認するレミリア。

「違います！ お札ではなく、旧一万円札に描かれた人が蘇ったのです！」

「旧一万円円つてことは聖徳太子？」

「そうです！ さすがによくご存じですね」

「そりゃそれくらいはね」

「ですが伝承と違って実際は女性でした。桜に混じって神霊が舞う異変が起こりましたが、その原因がかの聖人の復活だったのです！」

「ふむ……」

「——そうか神霊廟か。星蓮船と連動してるだけあってずいぶん早いわね。もう神子が復活したのか。」

何事か考え込むレミリアに早苗がおや？と反応する。

「さすがのレミリアさんも伝説の聖人が復活したとあれば警戒してしまいますか？」

「ふふ……馬鹿を言うんじゃない。神にすら膝を屈しないこの紅魔王レミリアが聖人の

一人や二人でどうこうするはずないだろう」

「おおお！ カ・リ・ス・マ！」

「だいたいあんたも神の一柱でしょ。現人神と聖人のどっちが上かは知らないけどさ」

「それはもちろん神子さんですよ！ あ、神子さんというのは聖徳太子のことです。豊聡耳神子という名前ですが、あの方は凄いですよ！」

「ずいぶん素直に認めるのね」

「神子さんはただの仙人でなく神格らしきものも持っていますから。感服した私は神子さんのところで修行させてもらっています」

「はあ？ あんた信仰を捨てたの？」

「いえいえ、まさか。道教を学ぶことで風祝として成長できるのではと考えまして。レミアさんも神子さんに会われてはいかがですか？ 今日紅魔館の皆さんにあの方の偉大さを広めに來たのです」

「ふくん」

——こいつだいぶやられてるわね。さすが自機勢で影響されやすきナンバーワン。「それにそれに！ あの方はレミアさんに勝るとも劣らぬほどのカリスマですよ！ カリスマ同士、一度会っておくのもいいんじゃないでしょうか!?!」

「ほほう……それは確かに面白そうだな」

「でしよう？ 興味がおりなら私が——」

「そうです。神子様は貴方様にも比肩し得るチカラの持ち主です」

「え!?! 誰ですか!」

どこからともなく聞こえてくる声の主を探して早苗はきよろきよろと見渡す。
しかし、部屋の中に姿は見つからない。

「青娥か」

レミリアは落ち着いて壁の方に目を向ける。

「正解! 霍青娥、ここに参上!」

ボコン!

紅魔館の外壁をくり抜いて現れたのは仙人（邪仙）の霍青娥。

「壁から!?! ちゃんとドアから入ってきてくださいよ!」

「これは失礼しました、お山の現人神様。しかし、偉大なる夜の女王ともなればそんな些事は気にしないと思ひまして」

「ん……まあそれはその通りね」

レミリアは腕を組んでうんうんと頷いている。

「私の勘違いでなく良かったです☆」

「ええ……（レミリアさん、ちよろい）」

「それで、青娥。あんたはその神子とやらを知っているの？」

「それはもうよく知っています。なにせあの方に道教を教えたのは私ですからね」

「ほう」

「あの方は凄いですよ。師である私をも超えてすでに神霊の域に達しています」

「神霊ねえ」

「まともによつつかればレミリア様とて無事ではすまないでしょう」

「ほくお？」

「ちよつとー！ 煽らないでくださいよー」

これはヤバイと察した早苗は青娥を部屋の端まで連れていく。

「何を企んでいるんですか！ そんなレミリアさんを刺激するようなことを言っ

て！」

「企むだなんてそんな……。私はただ超越者たちが激突する様を観戦したいだけだとい
うのに」

早苗は声を潜めて詰問するが、青娥は気にせず普通に返す。

もつともレミリアのデビルイヤーにはすべて聞こえているのだが。

「完全に愉快犯じゃないですか！ どこが『だけ』なんですか、どこが！」

「安心しろ、早苗。このレミリアが安い挑発に乗ることはない」

「おお……！ さすがは裏ボスです！」

安堵する早苗がレミリアの方を向くが、吸血鬼の女王は獰猛な笑みを浮かべていた。

目は紅く輝き、幼げな顔に似合わぬ凶悪な牙を口から覗かせている。どう見てもこれから戦いに赴くかのような顔だ。

「れ、レミリアさん……？」

「けれど、聖徳太子だか何だか知らないが、この私に挨拶にも来ないのはいただけない」
「えっ!？」

「安心しろ、早苗。真のカリスマたる私は怒ってなどいない。理不尽に怒るはずもない。彼女らは幻想郷のルールを知らないだけなのだからな。だからこそ、無知な仙人にすこーし教えてやるだけだ」

ブンブンブンブン!

早苗が必死に首を振るがレミリアは意に介さない。

「さて、行くとするか。案内しろ、青娥」

「仰せのままに♪」

ついでにたまたま遊びに来ていた比那名居天子にも声をかけると――

「新しく幻想郷に来た仙人のところ!? 行く行く! この私に助力を頼むとはお目が高いわねレミリア! 仙人だろうが道士だろうが、片っ端から切り刻んであげるわ!」

「いや、戦に行くわけではないが……まあいいか」

――と非常に乗り気で付いてくることになった。

――

仙界――

ピシッ

「……空間の揺らぎ。何者かが侵入したようですね」

ミミズクのような髪形の少女がポツリとつぶやいた。

彼女こそこの仙界を作り出した張本人であり、聖徳王と呼ばれる聖人――豊聡耳神子である。

「なんと! は、博麗の巫女でしょうか? 太子様。我々は何も悪いことをしていないはずですが」

神子の側近である物部布都は先の異変で戦った博麗霊夢かと身構える。怯えているように見えるが、かなり手ひどくやられたのだろうか。

「いや、噂の命蓮寺——仏教の手の者かもしれません」

もう一人の側近である蘇我屠自古は他勢力が攻めてきたかと警戒する。為政者としてかつては仏教も利用していた彼女らだが、自身は仏教徒ではない。

「——強大な妖気！ 何かが来ますよ！」

神子が警告した瞬間、仙界の空が紅い霧に覆われた。

「これは——!？」

ザッザッザッ

まさかの事態に空を見上げてみると、足音が近づいてきていた。

おそらく、この異変を成した者だろう。

「た、太子様……いったい何者でしょうか？」

布都が不安気に神子の方を向く。

「わかりません。しかし、何が起こってもいいようにしておきなさい」

「は、はいー！」

侵入者は悠然と彼女たちの前に現れた。

神子は油断せずに観察する。

一人は小柄だが禍々しい妖気を放つ少女。

蝙蝠のような大きな翼を持ち、青みがかった銀髪に真紅の瞳。

西洋の伝承に聞く悪魔——それも吸血鬼と呼ばれる種族だろう。

もう一人の少女は青髪のロングヘアに同じく真紅の瞳。

隣の吸血鬼とは異なり、清浄な気を感じる。

仙人である自分に近いような不思議な気配だ。

「吸血鬼と……もう一人は仙人かな？ 私の仙界に何用でしょうか」

「ふっふっふっふ……天子！」

「ええ、レミリアー！」

「とうー！」

掛け声とともに飛び上がる二人。

神子は咄嗟に身構える。

そして冒頭のスペシャルカリスマポーズに戻る――

自信満々でポーズをとっているレミリアと天子。

「……………あ、あの？ お笑い芸人の方は呼んでいませんか？」

神子が恐る恐るツッコんだ。

あまりにもおかしな連中の登場に、流石の聖徳王もどう対応すればいいか分からない。

「おおー！ これが幻想郷の芸人というやつか！」

「いや……………たぶん違うんじゃないか？」

布都は素直に喜んでいるが、屠自古は自信なさげに否定する。

「誰が芸人だ!? どこをどう見たらそうなるというんだ！」

「いや、しかし、どう見ても……………」

「まあまあ、レミリア様」

憤るレミリアの後ろからひよっこりと顔を出したのは霍青娥。

「青娥ー！」

かつての師の登場に神子は驚くが、すぐに誰がこの状況を作ったのか察する。

「これは貴方の仕業ですか」

「ご無沙汰しております、神子様。しかし、いやですわ。仕業とは人間きが悪いですね」
「こいつは私に言われて案内しただけよ」

そう言いながらレミリアが一步前に入る。

「……この吸血鬼と知り合いなのか？ 青娥」

「ええ、とはいえ知り合ったのは最近ですが。ご存じの通り、私は強き者に惹かれる女です。幻想郷を探索しているときにこの方を見かけて知己となったのです」

「ふむ……（確かに仙界の空を紅く染めた妖力は強大だ。青娥が目をつけるのも理解できるか）」

そこで天子が話に割り込みをかける。

「あんた！ 神子だったわね。さっき、私のことを仙人とか言ってたけどそれは大きな間違いよ」

「違うのですか？ では仙人見習いの道士でしょうか？」

「もつと違う！ よく聞きなさい。私は天人！ あんたら仙人や道士が目指すべき頂にいる者よ！」

「て、天人!? 貴方は天人様なのですか！」

すぐには信じられず青娥に目で本当ですかと尋ねる神子。

「本当のことですよ、神子様。この天子様は天界に住む天人の一人であらせられます」

「なんと……!」

神子は青娥が断言したことで驚愕に目を見開く。

「おおお! 本物の天人様に会えるとは今日は善き日じゃ!」

「て、天人……。大丈夫かしら。私、消されたりしないよね?」

道士である布都はともかく、亡霊である屠自古は予想外の相手の格の高さに引き気味だ。

「この私がわざわざ来てあげたのよ! どう対応すればいいか分かるわね?」

「これは失礼しました。すぐに客間にご案内いたします」

「よろしい!」

いつにない相手の丁寧な対応に満足気な天子。

幻想郷では天人だろうが神だろうが気にせず弾幕を飛ばしてくる連中がゴロゴロいるので、神子ほどの実力者で自分を立ててくれる相手は新鮮なのだ。

「なんかあんなの方に意識がいつちやって、私の影が薄くなってる?」

やや不満気にレミリアが天子に言う。

「ん? ふふふ……。これも私の高貴なオーラのせいね。つらいわー隠しようもない天人力がつらいわー」

「むう……」

——まあいいわ。私のカリスマターンはこれからよ。

「では私もお邪魔させてもらいますね」

妖しげな笑みを崩さずに青娥もそれについて行く。

こうして仙人と天人、そして吸血鬼の邂逅は始まった。

第三十七話 『仙界異変（後編）』

仙界――

レミリアと天子は客間にて歓待されていた。

そこには後を追ってきた早苗もいる。はじめはハラハラしていた彼女だが、和やかに歓談が進んでいき、ほっとしていた。

その横で青娥はニコニコと微笑んでいるが、何を考えているかは表情からは伺えない。

「天子殿はどのような修行を経て天人となったのでしょうか？ 私もゆくゆくは天人に至りたいと考えています。是非とも参考にお聞かせいただければと」

「修行？ ふっ……それは素人の考えね」

不良天人は神子の質問を鼻で笑った。

「し、素人……」

「いい？ スーパーエリートのは修行なんて無しに天人になったのよ」

「なんと!？」 そのようなことがありえるのですか」

「あらいでか！ その証拠に私は天界でも最高クラスの實力を持っている。腑抜けた並の天人たちとは違うのよ！」

「ほ、ほう……」

神子には天子が嘘をついているように見えない。だが、仙人の目標である天人に修行もせずに成れたなどという話を鵜呑みにすることは出来ないようだ。

「天人様！ 是非とも我に稽古をつけてくれぬか？ 我はきちんとした仙人になりたいのだ。天人様の教えて受ければその近道になるかもしれない！」

この布都の言葉から雲行きが変わっていく。

「ふふん。かまわないわよ。腹ごなしに私がいっちょもんであげましょう」

「おお！ 有難い！ ラッキーだな、屠自古よ。ここは胸を借りようぞ」

「え!? 私もやるの?」

「当然だ！」

食後の運動気分で天子たちが表に出て行く。

「あ、ちよつと、皆さん!?!」

経験から良くない流れだと早苗は察するが、三人はさっさと外に行ってしまった。

「せつかくだ。あんたは私と一手どうかしら?」

「む。貴方とか」

レミリアも神子を誘つて外に出ようとす。

「ちなみに私は天子より強いわよ」

「なに!?　いかに吸血鬼といえど天人様より上だといふのか」

「なにせ私は幻想郷で最強を決める大会の優勝者だからね。そうよね?　早苗」

「あ、はい。それは間違いありません」

「——ということよ、聖徳王」

「……面白い。ならば貴方に勝てば私は幻想郷で一番ということかな?」

「そう言つても過言ではないわね」

「ふ、ふふ……そうか。まさか、こんなに早く機会がやつてくるとはな」

「あら、私に勝てる気かしら」

「さてね。だが、人間を導く者として避けては通れない道だと思つている」

永い眠りの果てに仙人と成つた彼女だが、目覚めて間もないためか、為政者だった頃の氣質が強く残つている。

「ではこのレミリアが胸を貸してあげましょう」

「幻想郷最強の御仁にそう言つてもらえるとは有り難い。遠慮なくお言葉に甘えよう」
二人も建物を出て外に移動する。

「天子殿たちはずいぶんと遠くまで行ったのだな」

「あまり近いと住処を壊しちゃうからね。私たちも出来るだけ離れるわよ」

「ふむ……承知した」

神子はこの会話を流れ弾が危ないから程度のことと軽く流した。

意味としては間違っていないのだが、流れ弾の規模を正しく理解していなかった。弾幕ごっこが始まってからそれを実感することになる。

「うふふ。いつでいいわよ」

レミリアは微笑みながら言った。

悠然と腕を組み、そこには強者の余裕を感じさせる。

「ではいくぞ。豊聡耳神子、参る！」

神子が何も無い空間を剣で斬り裂いた。

「ん？……ほう」

レミリアが一瞬、訝しむがすぐに何が起こるか理解する。

神子の斬撃痕が空間に残り、そこから多数のレーザーが射出されたのだ。

だが、吸血鬼は腕を組んだまま、動かない。

「何故避けない?」

挨拶代わりのレーザーで相手の出方を伺おうとした神子だったが、レミリアが微動だにしないので、次々と光線が着弾する。

この時点で並の人間なら穴だらけになっているだろう。

ほとぼしる光の雨がやんだとき、そこには同じように佇むレミリアの姿があつた——
無傷で。

「なにっ!?!」

「これが噂の十七条の憲法か」

「十七条のレーザーです! なぜわずかの傷もない……まさか分身を?」

仙術には分身に攻撃を肩代わりさせるものがある。吸血鬼も分身を生み出せる種族と聞くので、その系統の術かと予想する。

「いや、そんな素振りはなかったはず……(もしくは空間移動でやり過ごして、瞬時に元の場所に戻ったか?)」

「単に私が強いというだけよ」

レミリアは右手の人差し指を立てた。

指先にごく小さな、紅い球が浮かぶ。

「馬鹿な、そのからくりは暴いて見せますよ。ではこれならどうかな!」

神子が右手を高く掲げると、人間大の天球儀が現れた。

——道符「掌の上の天道」

「いきなさい！」

天球儀が回転しながらレミリアに迫る。

「遅いわね。よけろと言っているようなものよ」

「そうだな。だが当然これだけではない」

神子の言葉通り、天球儀から青く輝く光球が無数に生み出されていく。

その動きは不規則で逃げ道を塞ぐように飛び回る。

「さらにっ！」

剣を構えた神子が高速で接近する。

二方向からの同時攻撃だが、レミリアは尚もその場から動かない。

「ふふっ——！」

吸血鬼が笑うと指先の紅球が一瞬にして膨れ上がった。

その巨大さは天を覆うほどだ。

「なっ!?!」

くいつ

レミリアが指先を曲げると巨大紅球が前進する。

その動きは緩慢に見えるが、あまりの巨大さゆえの錯覚であり、あつという間に神子との距離を詰めていく。

進行方向にある弾幕をすべて飲み込み、突き進む。

「うおおおおおっ!!」

咄嗟に縮地のマントによる空間転移で巨大紅球を避ける神子。

何とかやり過ぎすことに成功したが、常識外れの弾幕に呼吸が乱されている。

「——はあ、はあっ! ふ、ふふふ……。大ききこそ驚きましたが、いかんせん鈍足に過ぎます。よけろと言っているようなもの、と言葉をお返ししましょう」

「まあ今の紅魔玉は挨拶代わりだしね」

特に気にせずに肩をすくめるレミリア。

カッ!!!

遙か彼方で大爆発が起こり、仙界を激震が揺らす。

紅魔玉が地表に着弾したようだ。

それを見て流石の聖徳王も冷や汗を流す。

——む、無茶苦茶です。仙界を滅ぼす気ですか……！

もちろんレミリアにそんな気はなく、言葉通りに挨拶代わりくらいに考えている。

一方、そのころの天子たちは——

「ふはははは！ 無駄無駄無駄あー！」

布都が放った火種が地面に当たると、それが複数の火柱となり燃え上がる。

一方の屠自古は天から雷の雨を降らせる。

上下から激しい攻撃が押し寄せるが、天子は回避も防御もせずに進軍する。

それどころか自分から当たりについているようにすら見える。

「どういふことじゃ!? 痛くないのか！」

「頑丈つてレベルじゃないわよ……！」

ありえない姿に布都と屠自古が戦慄していたとき、轟音が響き渡る。

発生源に目を向けると、巨大な何かが地表に激突して大爆発を起こしていた。

距離があるここからでも、それがどれほどの威力か理解できた。

「な、ななな何じゃあ!？」

「あれはレミリアの弾幕ね」

「あ、あんなのが弾幕なのか……?」

「ここまで移動してきて正解だったでしょう?」

「う、うむ。そうじゃな……」

一般的な弾幕ごっこの範疇から逸脱した光景に唾然とする布都。

「太子様は大丈夫なの……?」

「大丈夫じゃない相手に撃つやつじゃないわよ、レミリアはね」

「そ、そうですか」

神子を心配する屠自古だが、天子は軽く流す。

そこには友人への信頼があるようだ。

「ちなみに私はあれを正面から受けたことがあるわ! もちろん立って耐えたけどね」

「冗談……じゃよな? 天子殿」

「嘘でも冗談でもないわ。何なら後でレミリアに聞いてみるといいわよ」

「それくらい出来なければ天人としてやっていけないというわけですか?」

「そういうことよ!」

当然ながら、そんな天人は比那名居天子くらいである。

しかし、他の天人に会ったことのない布都たちにそんなことは分からない。

普段から天子とレミリアは趣味と修行を兼ねた激しい弾幕ごっこをやっている。

それにより、DM天人の耐久力は更に向上し、取り返しのつかないレベルにまで至っていた。

「さあ、構えなさい！ 次は私の弾幕をお見せするわ！」

天子は緋想の剣を掲げ、周囲の気質を集め始めた。強大な圧力が大気を震わせる。

かつてレミリアの紅魔玉を迎撃するときを使用した超高密度の気弾。

それが当時を上回る威力で放たれようとしていた――

――

神子が剣を鞘に納めた。

代わりに愛用の笏を両手に構える。

「あら。それは武器なのかしら？」

「疑問に思うのも当然だが、慣れ親しんだこの笏の方がチカラを集中しやすいのだよ」

そう告げると、神子はすべての仙力を掲げた笏に集め始めた。

「貴方には生半可な攻撃では通用しそうにない。私の最大の一撃にて勝負しよう」

「その思い切りの良さ。悪くないわよ」

妨害するのは無粋と考えたレミリアは空中で仁王立ちのままだ。

いや、わずかに下げた両腕を構えて来たる強大な攻撃に備えている。

「待ってくれるのか？」

「胸を貸すと言ったでしょう」

「ふふふ……そうだったな」

集められたチカラが黄金のオーラとなり、神子の全身を覆っていく。

一種のトランス状態になっているようで、髪は逆立ち、目からは感情が消えている。

黄金のオーラが笏を核にして巨大な光の剣へと変わる。

カッ！

「たわむれは……おわりじゃー!!!」

天をも貫く光剣が吸血鬼の女王に振り下ろされた。

「――！」

目も眩む光が収まったとき、そこには尚も不敵に笑うレミアアの姿があった。

「確かに命中したはず……！ うっ――!?」

レミアアの全身の傷が攻撃が直撃したことを物語っている。

しかし、神子が凝視していると傷ついた皮膚が超高速で癒えていく。

それはもはや再生というレベルではなく、時間が巻き戻っているかのようだ。

ポロポロの服は再生しないが、小さな発光が起こると、一瞬で新品同様になった。

「そ、そうか。最初の弾幕もそうやっていたのか。ご丁寧に服まで魔法で新調することで、傍から見れば攻撃を躲したようにも見えるというわけだ」

「さすがにバレちゃったか」

天子が頑丈さに磨きをかけたのに対して、レミアアは高い魔力を更に練り上げた。

全力で再生に魔力を回せば、ある程度のダメージなら一瞬にしてなかったことになるほどに。

要するに最初の十七条のレーザーに対してやったのは完全な力技である。

「ふ、ふははははははははっ！　なるほど、これは無理だ。天人様より強いと言うだけはある！」

「あら、降参かしら？」

「ああ。認めよう。今の私では勝ちの目が見えない」

「潔いわね」

「時には退くことが出来るのも為政者に必要な資質だ。猪突猛進するだけなら誰でもできる」

ドグオオオオオオオンッ!!!

神子が負けを認めたのと同じタイミングで爆音が鳴り響いた。

レミリアの紅魔玉に比肩するような激しい振動が仙界を揺さぶる。

「天子が奥義を放ったみたいね」

「これが天子殿の——！」

「これであつちも決着がついたでしょ。見に行きましょう」

「布都と屠自古が無事であればよいですが……」

――

「あ、あああ……」

吸血鬼と天人の暴れっぷりに早苗は震えていた。

場合によっては自分が止めに入らねばと待機していたが、目の前の光景を前にそんな気持ちには消え去っていた。

「いくら現人神でもあんな中に割って入ったら死んじやいますよう……」

隣にいる青娥も震えているようだ。

「う、うふふふ……」

だが、早苗とはその震えの種類が違う。

邪仙と呼ばれる女は妖しく笑っていた。

「これほどとは……。素晴らしい、素晴らしいですよ」

幸か不幸か、仙界の惨状に呆然としていた早苗はその笑みに気付くことはなかった。

第三十八話 『人里の異変』

紅魔館——

「——ということがあったのよ」

レミリアは仙界での出来事を紅魔館ファミリーに語っていた。

「お姉様、ちよつと出掛けたと思つたら、やつぱり無茶苦茶暴れてるね」

「ちよつと挨拶が丁寧になり過ぎたかしらね」

「挨拶で済むレベルなんですか？ 聞いていると地形が変わるような戦いなんですが」

冷や汗を垂らしながら美鈴がもつともなことを言う。

「いや〜。幻想郷内だとそうそう派手に暴れられないじゃない？ つい、羽目を外しちゃつてね」

「……その仙人は怒つてないんでしょうね？」

パチュリーがジト目で聞いてくる。

「うん？ それはもちろん。なにせ神子のやつもノリノリだったから」

「それならいいけど」

ふうーっと息を吐く動かない大図書館。

「パチエもたまには暴れてストレスを発散させたら？　ため込み過ぎるのはよくないわ」

「ストレスを溜めてるのは誰のせいだと思ってるの？」

「うぐっ!？」

直球で攻めてくる魔女に固まるレミリア。

「パチエ……。前から思ってたけど、幻想郷に来てから当たりがキツくないか？　いや、たしかに私が悪いのもあるんだけど」

「……その通りよ。外にいたときより厳しめになっているわ」

「ええー！　な、なんでよ!？」

親友のまさかの発言に狼狽える吸血鬼の女王。

「ここでは紅魔館は外様だからね。羽目を外しすぎると追い出される可能性もある。それ——」

「それに？」

それ以外にあるのか、と首をかしげるレミリア。

「気を引き締めないと、私はレミィにはどこまでも甘くなってしまうから……」

「え、それって……」

「あーあ、見せつけちゃって」

フランドールが呆れたようにぼやく。

「パチエー！」

ガバツ

「ちよ、レミ——あつ」

抱き着かれて倒れるパチユリー。

「このあと滅茶苦茶イチャイチャした」

「妹様!? 何を言つて——!?!」

大宇宙の意思によりフランドールは訳の分からないことを口走った。

狼狽える美鈴の横ではメイド長が真剣な顔をして一部始終を撮影していた。

——

人里——

「力こそが正義。いい時代になったものだ」

ザツ

「強者は心おきなく好きなものを自分のものにできる」

世紀末のような台詞を言いながら現れたのは人間代表の魔法使い——霧雨魔理沙。

「その通り。手始めに私は人間から漁業権を奪って占有する。これでぼろ儲けさ」

ヘリコプターのようにプロペラを回転させながら降下してきた河の便利屋さん——河城にとり。

今日は気合いが入っているようで全身を超兵器で武装している。

「オラオラオラオラー！」

「お得意の高速弾幕も完全武装の私には当たらないよ！」

光弾の連射で攻め立てる魔理沙だが、にとりは頭上のプロペラを高速回転させて緊急回避する。

「生憎だけど、さっさと墜ちてもらおうよ！」

にとりのリュックから巨大な砲塔が出現する。

一体、どこに入っていたのかは不明である。

「くらえ！ 荷電粒子砲！」

科学技術の粋を結集した最新兵器が唸りを上げる。

砲塔から発射された眩いビームは一直線に魔法使いに迫る。

「火力で私が負けるかよ！」

回避ではなく、迎撃を選択する魔理沙。

月面の戦いでは光速を超えたとも言われる彼女にとって、後の先を取るのは容易かった。

「マスタースパーク！」

お得意の極太レーザーが発射され、河童のビームと激しくぶつかり合う。

それを見て沸きあがる人里。

これだけの戦いであっても周囲の観客や家屋には何の被害も出ないように調整されている。

「荷電粒子砲……想定以上の技術ね。他にも明らかにこの時代に合わない兵器を持っているわ」

にとりの持つ超兵器に唸る永琳。

その中のいくつかはレミリアが悪乗りして教えたなら実現してしまったものだ。恐るべきはフィクションを現実に変える河童の技術力か。

「威力は凄いいけど、優雅さに欠けるわ。兵器にも遊び心がなくっちゃね」

兵器に優雅さなど相容れなさそうだが、謎のこだわりを語る輝夜。これが月人全般の意見なのか、彼女個人の嗜好なのかは不明である。

「うずうず」

「そんなわぎとらしく口に出してもダメよ、レミィ」

見るからに参戦したそうなレミリアにパチュリィがぴしやりと言う。

「うー……厳しい。この前はあんなに甘々だったのにー」

「なっ!？」

レミリアの眩きにボツと顔を真っ赤に染めるパチュリィ。

「だ、だ、黙りなさい！ お仕置きするわよー」

度重なる異変により、人里には厭世観が溢れていた。

それにより、もたらされたものは絶望感ではなく、刹那的な心。

人心は乱れ、秩序はなくなっていた。

大騒ぎして派手に目立った者こそが正義という末法の世界。

この状況に目を付けたのが巫女や僧侶、道士などの宗教家と、連中にだけ甘い汁を吸

わせまいと、率先して行動に出た魔理沙たちのような輩。

彼女らは ” 力も方便 ” とばかり派手な闘いを繰り広げていた。

「お嬢様。今回の騒動には参戦しないと約束したからには仕方ないのでは」

冷静に諫めるのはメイド長の咲夜。

出来る従者のような雰囲気を出しながら、実はこつそり、わちゃわちゃするレミリアたちを撮影している。後で鑑賞するのだろう。

「そうなのよねー。悪魔として約束は破れないからねー」

派手に目立って人気を集めたものが勝ちというレミリア向きなお祭りだが、やり過ぎることが目に見えていたので、事前にパチュリーや紫に不参加を約束させられていた。スキマ妖怪の胃は守られたのだ。

「さて、うちの屋台の様子でも見てこようかしら」

紅魔館は戦いにこそ不参加だが、お祭り騒ぎに便乗して人里に屋台を出していた。調理担当は主に美鈴と咲夜である。

「お待ちせしました！ 激辛紅魔麺です！」

「おお！ これこれ！ こいつを食べれば世界が終わるといふ恐怖も忘れられる！」

血のように真つ赤な麵料理を出す美鈴。皿の上で紅くない箇所はわずかもなかった。明らかに身体に悪いが、美味しいものはすべからく身体に悪いもの。この危なさが逆に病みつきになり、かなりの常連客を獲得していた。

「いつもながら見事な味だ……ああ、見える。世界の外側が見えるぞ……」

紅魔麵のあまりの辛さに意識を異界に飛ばす常連客の易者。

「ご苦勞様。美鈴」

「今日も好評ですよ！ お嬢様」

「うふふふ。それは良かったわ」

「しかし、ここまで売れるとは思わなかったわ。私なんて、一口食べただけで死にそうになったのよ」

激辛麵の味を思い出して苦い顔をするパチュリー。

「辛いもの好きってどこにでもいるしね」

最初は一般的な西洋風や中華風の料理を出す案もあった。

しかし――

『咲夜や美鈴の料理は絶品よ。普通に屋台で出しても人気は間違いないでしょう。けど、紅魔館の名で出す料理にはそれでは足りない。どんな料理よりも紅く！ 紅く紅く紅く熱く紅く紅く紅い料理が必要なよ!!!』

……という当主の意向により激辛紅魔麺でいくことになったのであった。

「これはレミリア殿。紅魔館もこのお祭り騒ぎに参戦するのですか？」

神子が布都と屠自古を引き連れて屋台までやって来た。

「残念だけど紅魔館は不参加よ。代わりと言っては何だけど、見ての通り屋台を出して
るからよかつたら食べていってちょうだい。一回目はサービスにしとくわ」

「ふむ……紅魔麺？ これはどのような食べ物なのですか？」

「ふふふ……。その名の通り紅い麺類よ。美鈴、三人前よろしくね」

「はーい、お嬢様」

美鈴が軽快に調理を始める。

「さあ、遠慮なく食べて頂戴」

目の前に出された紅一色の麺料理。

神子一行はそれを見て固まっていた。

「……レミリア殿。これは本当に食べ物なのでしょうか」

「失礼ね。ファンも結構ついでるのよ」

他の席に目を向ければ美味しそうに紅魔麺をすすめる人里の皆さん。

「……たしかにそのようですね」

「身体に悪いものこそ美味しいともいいますが……」

「美味しいなら食べてみるかの」

神子が認めたことで、屠自古と布都もゆつくりと箸を構えだす。

「まあ騙されたと思って食べてみなさい」

「では……」

神霊廟組、体調を崩して全員一回休み。

——そういえばこの騒動って心綺楼よね。となると、そろそろ輝針城か。正邪……鬼人正邪。あの何者にも屈さない生き様、大好きなのよねえ。会いたいけど、あいつからしたら支配者側の私は目の敵……どうするか悩むわね。

大げさに倒れる神子たちを介抱しながら、レミリアは今後の異変について考えを巡らせていた。

第三十九話 『動き始めた天邪鬼』

人里・秘密結社のアジト――

人里には幻想郷を人間のものにしてしようと考えるいくつかの秘密結社が存在する。その中でも、ここに集まっている者たちは、妖怪への積極的な攻撃も辞さないという、かなりの強硬派である。

そんな反妖怪組織の集まりの中に、明らかに人外の存在がいた。

頭に小さな二本の角を生やした少女。鬼のようにも見えるが、似て非なる天邪鬼という妖怪である。

「さあ、始めようぜ。我ら虐げられし者たちの逆襲をな！」

天邪鬼の名は鬼人正邪。

彼女の望みは弱者と強者の立場をひっくり返すこと。

「天邪鬼よ。はしゃぐのは結構だが、我らの最終目的は支配者たる妖怪を排除し、幻想郷を人間のものとすること。そのために貴様とは一時的に手を組んでいるに過ぎん。そのことを忘れるなよ」

「ふふ……まあそう言うなよ。我ら力無き妖怪、そしてお前たち人間。どちらも強者によって虐げられる被支配者だ。仲良くいこうぜ」

「そこまですておけ。妖怪とはいえ、今は利害の一致から肩を並べて戦う相手だ」
「はっ。申し訳ありません」

秘密結社のリーダーに窘められて、幹部の男は正邪を睨むのをやめる。

「では我らの決意と実力を見せつけるため、最初の目標を定めるとしよう」

リーダーの宣言に続いて、幹部たちが次々と意見を述べ出す。

「相手は誰もが知るような大物でなければならぬ」

「それでいて人里を脅かすような、わかりやすい悪が望ましい」

「命蓮寺のような里人から支持のあるところは不味いであろうな」

「だが鬼のように所在が不明な相手はどうすることも出来んぞ」

「妖怪の山にはまだ手が出せん。さすがに勢力が違う」

「大物妖怪かつ、所在がはつきりしている相手。人里に害をなした過去があり、抱える人員も少数——その条件ならば、あそこしかあるまい」

各々からの意見をリーダーがまとめ、結論を出す。

「狙いは紅魔館！ レミリア・スカーレットだッ!!」

「クツクツク！ 夜の女王を自称して調子に乗っている吸血鬼がターゲットか！ これは面白く——いや、つまらなくなってきたな！」

——

「今日もいい天気ね。良いことがありそうだな」

レミリア（変装中）は勝手にターゲットにされているとはつゆ知らず、本来は吸血鬼が苦手な太陽を機嫌よく眺めつつ人里を歩いていた。

「いいか？ 吸血鬼という種族は日光が大弱点だ。だから、昼間に歩くときは必ず日傘をさしている」

「なるほど」

「つまり、あそこで暢気に歩いている子供のようなのは除外できるってわけだ」

「日傘か……。簡単に見つかりそうだな」

秘密結社の構成員に暢気な子供と言われるレミリアだが、聞こえなかったようで鼻歌を歌いながらお気に入りのお子屋に入っていた。

尚、天界の武道会で彼女が日光下でも活動していたという情報が彼らに伝わるのはしばらく後の話である。

「ダメです、リーダー。人里をくまなく探しましたが、レミリア・スカーレットらしき存在は見つかりませんでした」

「そうか。かなりの頻度で人里に侵入しているという情報だったが、巧妙に姿を隠しているか、それとも今日は来ていなかったか……」

「おのれ、妖怪め。いったい人里で何を企んでいやがる」

「どうします？ リーダー」

「では第二案でいくか。人間でありながら吸血鬼の走狗となっている哀れな少女――十六夜咲夜の動向を追うとしよう」

「あのメイドですか。確かに最近、人里で目撃情報がありますね」

「おそらく、吸血鬼が自ら里に足を運んでいるのは獲物とする人間の品定め。そしてメイドの仕事がその獲物を誘拐、ないしは血を奪ってくるといったところだろう」

「血を……なるほど。吸血鬼の食糧ですか」

その言葉に他の幹部たちが騒ぎ出す。

「連中は人間を襲わないと約束していたはず。悪魔にとって契約は絶対ではなかったか？」

「おそらく契約に抜け道を用意していたのだろう」

「許せねえ。俺たちの里で好き勝手しやがって」

それまで黙って話を聞いていた正邪がしびれを切らして声を上げる。

「おいおいおいおい！ 何やってんだ!? 『狙いは紅魔館！』って啖呵を切ってたじゃないか。襲撃をかけるんじゃないのかよ？」

「慌てるな、天邪鬼。まずは情報収集の段階ということだ」

「然り然り」

「戦いとは始める前こそが肝心なのだ」

「情報を制する者が戦も制す」

彼らが理解しているか定かではないが、組織の構成員が無策で紅魔館に襲撃をかけた場合、門番の美鈴で全滅することだろう。ゆっくり情報収集をすることは正解といえた。

「まずは推測だけでなく、十六夜咲夜の里での行動を明確にするべきですね」

「然り。目撃情報のあった付近に人員を配置するべし」

「こ、こいつら……くっそー！」

威勢のいい言葉とは裏腹に、秘密結社の慎重さに業を煮やしたか、正邪はアジトを飛び出していった。

「長命な妖怪の割に堪え性のない奴よ」

「然り然り」

構成員たちは特に気にせず会議を続けていたが、しばらくすると訪ねて来る者があつた。

「どうもー！ 清く正しい射命丸でーす！」

「む。もう取材の時間か」

「ブン屋には我らの活動の正しさを新聞にて知らしめてもらわねばならんからな」

「然り然り」

彼らの妖怪に関する最新の情報源は主に射命丸文の『文々。新聞』であり、情報の大切さが云々と言っていたが、実のところ、かなりの情報弱者である。